

調査著手ノ方針 四

明治十九年ノ公文式ハ過渡ノ時代ニ於ケル權宜ノ法制ニシテ別ニ間然スル所ナカリシモ、憲法ノ實施法例ノ制定ト與ニ立法ノ作用モ亦一變シタル今日ニ至リテハ宜ク時勢ノ變遷ニ應ジテ改正修補ヲ加フベキノミナラズ、今後皇室ノ典例ヲ整理シ之ヲ宮廷ノ内外ニ向テ施行セントスルニ當リテハ必ず先ヅ公文式ヲ改正シ一定ノ標準ヲ設クルヲ宜シトス。其理由左ノ如シ。

第一

公文式第二條ニ「法律勅令ハ内閣ニ於テ起草シ又ハ各省大臣案ヲ具ヘテ内閣ニ提出シ總テ内閣總理大臣ヨリ上奏裁可ヲ請フ」トアリ。是レ勅令ニ關シテハ尙ホ有効ナルモ帝國議會アリテ以來法律ニ關シテハ事實ト違ヘリ。

第二

公文式第十條ニ「凡ソ法律命令ハ官報ヲ以テ布告シ官報各府縣到達日數ノ後七日ヲ以テ施行ノ期限トス」トアリ。然レドモ法律ノ施行時期ハ其ノ後法例第一條ヲ以テ「公布ノ日ヨリ起算シ滿二十日ヲ經テ之ヲ施行ス」ト定メラレタリ。是ニ於テ現今ハ同一ノ帝國ノ内地ニ於テ法律ト勅令ト施行期限ヲ異ニスルノ結果ヲ生ゼリ。

第三

帝國憲法ニ依リテ之ヲ見ルモ法律命令ノ外ニ國務ニ關スル詔勅ナルモノアリ。實際ニ於テ宣戰詔勅遼東半島還附詔勅、官吏製艦費獻金詔勅等、詔勅ヲ以テ極メテ重要ノ國務ヲ規定セラレタルモノ其ノ例ニ乏シカラズ。蓋シ詔勅トハ一般ノ名稱ニシテ、天皇ヨリ直接ニ發セラル、各種ノ命令ヲ謂フナルベク、此等ノ命令モ亦國家ニ有効ナル以上ハ一種ノ權義準則トシテ公文式ニ其ノ形式効力ヲ畫定セザルベカラズ。

第四

皇室典範ハ憲法ト對等ノ効力ヲ有シ、共ニ國家ノ根本法トシテ普通ノ法律勅令ノ上ニ位スルモノナリ。而シテ其ノ本文ハ今ヨリ正式ニ公布スルヲ便トセザルモ、之ガ改正増補ニ至リテハ之ヲ正式ニ公布スルニアラザレバ、將來皇室及皇族ニ關シテ普通法ノ變則ヲ設ケントスルニ當リ

テ故サラニ之ガ爲ニ法律ヲ制定シ、又ハ改正セザルベカラザルノ不便ヲ生ズベシ。故ニ公文式改正ノ機會ヲ以テ其ノ公布式ヲ一定シ行政官、司法官ヲシテ典範ノ改正増補トシテ直ニ遵奉ノ義務ヲ負ハシムルヲ要ス。

第 五

皇室ニ關スル要件ニシテ獨リ皇室部内ニ於テ施行スベキノミナラズ。又一般ノ官廳及人民ヲシテ遵奉セシムベキモノ將來ニ於テ益々多カラントス。然レドモ皇室ノ事ハ往々法律勅令ト爲スニ適セザルモノアリ。又故サラニ詔勅ヲ以テ發布セラルベキニ非ザルガ故ニ、此ノ際皇室部内ノ準則ノ爲ニ特殊ノ名稱(例ヘバ皇室令)ヲ設ケ、公文式改正ノ機會ヲ以テ其ノ法律勅令ニ對スル關係並ニ皇室部外ニ向テモ有効ナル所以ヲ明示スルヲ必要トス。

第 六

從來宮内大臣ハ宮内省官制ニ依リ地方長官ニ示命シ、並ニ臣民ニ命令告示スルノ職權ヲ有スルモ、宮内省官制ハ宮内省達ニシテ國家ノ權義準則ニ非ザルガ故ニ、國法上宮内大臣ノ示命及命令告示ハ一般ノ官廳及人民ニ向テ何等ノ効力ヲ有スルコトナシ。依テ此ノ點ニ關シテハ公文式

ヲ改正シ、宮内省ノ命令告示ニ假スニ國法上一定ノ効力ヲ以テスルヲ要ス。

以上公文式ヲ改正スベキ理由ノ重モナルモノトス。之ヲ要スルニ今日ノ急務ハ皇室ノ内事ヲ以テ全然國家ニ關係スル無シトシタル主義ヲ一轉シ、我國公權ノ沿革ニ依リ自然ニ定マレル關係ニ立戻リテ皇室ノ例規モ亦國家ニ向テ有効ナル所以ヲ明ニスルニ在レド、故サラニ此ノ關係ヲ表明セントスルトキハ徒ニ物議ヲ醸ス虞アルヲ以テ、公文式改正ノ舉ニ託シテ不言ノ際ニ此ノ事理ヲ明徹セシムルヲ無上ノ得策トスルニ似タリ。

帝室制度調査局經費豫算及職員ノ 進退ニ關スル伊東巳代治ノ意見書

謹啓御退京後炎暑之節復ビ猛威ヲ逞シ今日ノ如キハ都下近來稀有ノ暑氣ニ御座候。

儲過日申上候通り、皇族ノ庶子身分關係ハ事簡經ナルガ如クナルモ皇族身分ニ關シ殆ト事毎ニ生ズベキ問題ニ付、豫メ原則ヲ定メテ其ノ據ルトコロヲ的確ニスルノ必要アルハ勿論ニ付、試ニ別稿ヲ起シテ高覽ニ供シ候間瀾閱ヲ賜リ度候。

豫算ニ付其梗概ヲ申述候ヘバ、從前調査局經費總額貳萬五千圓、之ニ宮廷別途支出ニ屬セル總裁副總裁御用掛十一人分手當壹萬九千四百圓ヲ加フルトキハ、累計ニ於テ四萬四千四百圓ト相成候。而シテ今回ハ整理ノ結果トシテ調査局ノ經費ニ於テ九千八百十四圓四十錢ヲ削減シ得ル都合ナルヲ以テ、從前二萬五千圓ナリシ經費ハ一萬五千八百八十五圓六十錢ヲ以テ支辨スル次第ニ有之、又御用掛ヘハ月額平均一人百五十圓トシテ十人分ヲ算出要求致度候。實際五十圓乃至百圓ニテ足り候御用掛モ可有之ニ付、人員ハ必ズシモ十人ニ止メズ、其以上ヲモ使用スルノ便

路ヲ開キ、唯々金額ニ於テハ其總數ヲ超過セザルヲ相期シ候コトニ御座候。以上總括スレバ今回ノ豫算總額ハ三萬四千九百八十五圓六十錢トナリ、從前ノ總額四萬四千四百圓ニ比スレバ仍ホ九千四百十四圓四十錢ノ削減ヲ見ルコトニ相成候。

有賀長雄ノ諸學校兼勤致居候ハ畢竟報酬關係ニ外ナラズ。依テ今後ハ成ルベク學者トシテ名譽的職位ハ別トシテ、報酬目的ノ兼勤ハ相止メサセ度候ニ付、單ニ御用掛ノ手當ノミニテハ全力ヲ傾注致サセ候コト如何ト存候ニ付、幸ニ空缺ノ主事ヲ兼サセ其報ユル所ヲ厚クシテ十分勵精爲致度候。此儀ハ過日モ申上置キ候ヘドモ改メテ御高裁奉仰候。

其他豫算及御用掛ノ更任判任ノ進退等ニ關ル伺書七通加封仕候間御高裁奉願上候。
右要件而已得貴意候。頓首々々

三十六年八月念五

巳 代 治 再 拜

伊藤總裁候閣下

帝室制度調査局經費豫算及職員ノ進退ニ關スル伊東巳代治ノ意見書

現世統治者中最大ナル皇帝

本年日本皇帝ハ英雄叡敏ノ拔群ナル名譽ヲ得ラレタリ。年初國王其人ニ就テハ世界ニ於テ知ル者少ナカリシガ、年末ニ至リテ人類統治者ノ前列ニ立チ、現世國君ノ目錄上、各其國君ノ性質行爲ヲ録スルモノハ誰シモ現世國君中首位ヲ占ムルモノハ日本皇帝 睦仁陛下ナリト信ズルニ至レリ。

名聲アル日本皇帝ノ稱號ヲ觀テ、其生涯ト行事ヲ追想シ、而シテ他ノ皇帝ニ比シ或ハ他ノ皇帝全體ニ比シテ考フレバ、皇帝ノ統治下世界各国嘗テ起リタルガ如ク最大ナル驚ク可キ變化ヲ生ゼリ。皇帝ノ治世廿八年間、其統治下ニ於テ記憶シ難キ古代ヨリ成立シタル封建制度ヲ廢棄シ專制帝國ノ政治ヲ變ジテ議院政體トナシ、帝國古代ノ社會法ヲ革新シテ文明ノ技術工業ヲ應用シ、東洋世界中第一ノ兵權ヲ握リ、舊財源ヲ發達シテ新源ヲ創造シ、貿易ヲ擴張シテ西國競爭者ニ一驚ヲ喫セシメ、世界ノ主ナル權力者中自ラ高名ヲ立テタリ。

是等ハ 睦仁皇帝陛下ガ千八百六十七年二月御齡十五歳ノ時 祖宗ノ皇位ヲ繼レタル以來日本歴史ヲ裝飾シタルモノナリ。 皇帝ハ帝國再建ノ時期間政府ノ主ナル精神ニシテ而シテ

主人公タリシヤ疑フ可ラズ。皇帝ハ自己ノ專制權ヲ以テ即位後未ダ二十歳ニ滿タザル際、改革ノ宣告ヲ發シ、朝廷ニ於ケル無氣力ナル數多ノ臣ヲ免除シ、帝國人民中高貴ノモノヲ撰拔セリ。其後速ニ帝國ニ於テ基礎シタル封建制度ノ全廢ヲ宣告セリ。又六年前自ラ主權ノ一部ヲ剝テ以テ自由憲法ヲ制定授與シ、皇帝ノ不認可權ノ下ニ立法制定權ヲ有スル兩院議會ヲ創成セリ。而シテ議院ハ近年合衆國議會ニ於テ屢々勝ラ能ハザリシ獨立ノ法略ヲ運動セリ。頌揚ス可シ「名譽アル門」ノ原義ヲ示ス稱號タル光リ輝ク御門（皇帝）則チ其門ハ 睦仁陛下ナリ。

世紀ノ過去廿五年間 皇帝ノ行事ヲ記スルニハ太陽ノ紙數ヲ要ス可シ。 皇帝ハ最高能力ノ政治家ノ協議ヲ得タリト雖ドモ、新日本ノ成立ハ主ニ 皇帝ニ歸スト謂テ可ナリ。茲ニ現時支那ト開キシ戰事ハ 皇帝ノ主ナル部分ヲ行ヒタル事ヲ信ズルニ最モ理アリ。戰爭起ルヤ、皇帝ハ都ヲ去リテ西海岸ニ居處ヲ移シ、海陸ノ動作ヲ容易ニ監視シ、事件ノ速報ヲ得其確實ナルヲ知リテ而シテ陸海軍司令官ニ直ニ命令ヲ發セリ。ワシントン府駐在日本公使ハ唯一個ノ朝臣ニアラズシテ日本ニ於ケル愛國ニ高慢ナル人民ノ如キ愛國者ニシテ、氏ハ左ノ如ク談話スルニ權利アルナリ。朝鮮ニ於テ戰爭ノ第一發砲アリシ時ヨリ北京ニ進軍スル迄ハ皇帝ハ大元帥トシテ日々活潑ニ其全權ヲ實行セラル、ナリ。

歐洲及其他ノ政府ト交際上或ハ談判上 皇帝ハ第一ニ其國ヲ代表セラル、ハ眞ニ然リ。近時
議會ニ於ケル 皇帝ノ演説ハ日本ノ利害ニ關スル事件ニ就テ 皇帝ハ充分ナル能力ヲ有セ
ラル、ヲ證スルニ足ルナリ。

現世々界ノ國君中日本 皇帝ト比シ得ルモノハ誰ナルヤ。

支那ノ虛弱ナル皇帝「ペルシヤ」皇帝及「トルコ」皇帝ニ至ル迄、亞細亞ニ於ケル皇帝中誰ヲ
以テスルモ比スルニ足ラザルハ確實ナリ。

歐洲ノ目錄ニ於テ觀ルニ露國皇帝ハ即位シテ間モアラザル若年ニシテ、其器量ニ就テハ未ダ世
ニ知ラレタルモノナシ。獨逸皇帝ハ政治或ハ軍事ニ對スル能力ヲ有スルコトヲ證スルニ未ダシ。
奧國皇帝ハ言語不同ノ臣下ト共ニ平穩ニ統治スル愛敬アル老統治者ナリ。伊國皇帝 不幸ナ
ル「アンベルト」第一世ヨリ更ニ劣リタル王ハ此録中ニアラズ。英國女王ハ其内ニアラズ。佛
國共和大統領ハ一モ其所ヲ有セズ。南北亞米利加ノ共和大統領ノ結線ハ平和ナリ。

大事件ヲ完成シ進歩及ビ勝利ノ記録ヲ有スルモノハ現世統治者中日本 皇帝ノ外他ニアラザ
ルナリ。

羅馬ノ「オーガスタス」、英國ノ「アルフレッド」ノ治世、或ハ「スウキーデン」ノ「グスタヴ
ス、アドルフス」、或ハ露國ノ「ペーター、ゼー、グレート」、或ハ佛國ノ「ナポレオン」或ハ

伊國ノ「ヴァクトル、エンマヌエル」、或ハ獨國ノ「ウキリアム」第一世吾國（米國ナラン）
ノ「リンコルン」ノ統治ヨリモ遙ニ日本 皇帝ノ治世ハ大ナリ。

「名譽ナル門」ナル 睦仁陛下ハ生涯ノ第一位ニアリ。而シテ齡僅ニ四十二歳、猶ホ（日出）
王國ノ國君トシテ永久ノ統治者タル可シ。若シ 睦仁陛下ニシテ現世統治者ノ最大ナル者ニ
アラズンバ誰カ孰レノ國ニ於テ其拔群ナル稱號ヲ争フモノアランヤ。若シ 睦仁陛下ニシテ
世界ノ改革者ノ率先ナラズンバ何ヲカ率先ノ名トナス乎。（米紙抄譯）

憲法及皇室典範ニ關スル伺文

一、樞密院ヨリ會議ヲ經上奏シタル憲法及皇室典範案ハ
裁可ヲ賜フニ當リ

御名ヲ親署シ御璽ヲ鈴セラレ之ヲ

皇室ノ寶匱ニ藏メ内大臣之ヲ封印シ宮内大臣立會ニ御庫

又ハニ奉藏スベシ。

一、上奏本ノ外ニ樞密院ヨリ別本一通ヲ進奏シ親署鈴璽アルベシ。

一、憲法ハ

親署鈴璽ノ後上諭ト俱ニ之ヲ内閣ニ下付セラレ總理大臣以下國務各大臣總員副署シ之ヲ臣民ニ

公布ス 皇室典範公布ノ式ハ別ニ具フ

一、皇室典範及憲法ノ説明ハ其ノ正文ニ關連セシメズシテ別ニ官報ニ登載シ其ノ體裁ハ伊藤伯
調査ノ報告上奏ノ文トナス

一、典範及憲法ノ發布ハ同時ニ於テセラルベシ

一、典範及憲法發布ノ日ハ

天皇親ヲ

祖宗ニ宣誥シ臨時祭ヲ行ハセラレ同日華族百官ヲ召集サセラル 其ノ式ハ別段
取調ニ諒ル

法典調査ニ關スル達案

達案

其會ニ於テ自今法典調査ノ附屬事務トシテ新條約實施ノ準備ニ關スル事務ヲ掌ルベシ

明治三十一年六月 日

內閣總理大臣

法典調査會總裁 宛

辭令案

條約實施準備副委員長被免

子爵 田中不二麿

平田 東助

小村 壽太郎

横田 國臣

松本 莊一郎

梅謙次郎

奥田 義人

佐藤 秀顯

目賀田 種太郎

三崎 龜之助

寺原 長輝

柳田 謙太郎

添田 壽一

久米 金彌

道家 齊

穂積 八東

免官ニ因リ當然解任カ

同奥田

同

各通

法典調査ニ關スル達案

條約實施準備委員被免

達案

自今ニ其會委員ヲ二部ニ分チ法典部（又ハ本部）及ビ條約部トシ法典部ニハ專ラ法典調査ノ事務ヲ掌ラシメ條約部ニハ專ラ新條約實施ノ準備ニ關スル事務ヲ掌ラシムベシ。

明治三十一年六月 日

內閣總理大臣

龜井英三郎
河村讓三郎
有松英義
寺尾亨

法典調査會總裁 宛

法典部（又ハ本部）

（假議長）

橫田國臣
穗積陳重
梅謙次郎
長谷川喬
高木豐三
富井政章
富谷銚太郎
河村讓三郎
田部芳
岡野敬次郎
倉富勇三郎
寺尾亨

條 約 部

- (假議長) 平 田 東 助
- (兼) 小 村 壽 太 郎
- (兼) 横 田 國 臣
- (兼) 梅 謙 次 郎
- 添 田 壽 一
- 久 米 金 彌
- 道 家 齊
- 穂 積 八 東
- 太 田 峯 三 郎
- (兼) 龜 井 英 三 郎
- (兼) 河 村 謙 三 郎
- (兼) 寺 尾 亭

帝室御資産ニ屬スル日本郵船會社
 株券原價拂下ノ出願ニ關スル宮内
 大臣ノ垂問ニ對シ遞信大臣ノ答辯

帝室御資産ニ屬スル日本郵船會社株券原價拂下ノ出願ニ對シ、本省ニ於テ指令セシハ宮内大臣ノ職權ヲ侵シ、且資本ノ減却ヲ命ジタルハ干涉スベカラザル事柄ニ干涉シタルニアラザルヤトノ御垂問ニ對シ、先ヅ其事由ヲ開陳スルニ當リ、日本郵船會社々長ヨリ差出セル願書ヲ左ニ並列シ御熟讀ニ供シ候。

當會社一千百萬圓ノ資本中ニハ現ニ九拾餘萬圓ノ空物アリ。又三分ノ一モ回收ノ見込ナキ九拾餘萬圓ノ貸金證書アリ。又船舶ハ現實ノ市價ニ比シ概ネ格外ノ高價ニ屬セリ。其他高利ナル百餘萬圓ノ負債アリ。斯ノ如キモノ皆實物アリトシ本社ノ負擔ニ歸シタルモノニ御座候故、本社ノ資本ヲ實價ニ改算スルトキハ實ニ莫大ノ缺額有之、畢竟本社ガ分外ノ負擔ニ苦シム所以ニ御座候。是レガ救治ノ方法ヲ求テ永ク社業ノ基礎ヲ固ムルハ實

帝室御資産ニ屬スル日本郵船會社株券原價拂下ノ出願ニ關スル宮内大臣ノ垂問ニ對シ二〇七
 遞信大臣ノ答辯

ニ今日ノ急務ト奉存候。依テ其方法ヲ按ズルニ、本社ノ力ニ應ジテ株金ヲ減少スルノ外ニ爲スベキ道モ無之ト奉存候。就テハ甚恐懼ノ至ニ候得共、現今 帝室ノ御資産ニ被屬居候本社株式三萬千三百十株ヲ額面原價百五拾六萬五千五百圓ヲ以テ本社へ御拂下被下其方法ハ本社會計ノ力ニ應ジ向フ五年乃至七年間ニ代金上納次第其都度株券御下渡相成候様御許容被成下候ハ、其株式ハ御省ノ御指揮ニ從ヒ直ニ資本消却候様仕度、最早本年株主總會モ切迫致居候ニ付、何卒特別ノ御詮議ヲ以テ前陳願意速ニ御採用被成下度此段奉願候也。

明治二十年十一月七日

日本郵船會社々長

森 岡 昌 純

遞信大臣子爵 榎 本 武 揚 殿

右願意單ニ 帝室御資産ニ屬スル株券拂下ノ一事ニ止マル以上ハ、宮内大臣ノ主管タル論ヲ俟スト雖ドモ、之ヲ審按スルニ、該社ノ理財上權利義務其權衡ヲ失シ負擔重キニ苦ミ、現今ノ

資本ヲ相當ノ額ニ減却セントノ目的ヲ以テ、該株券ノ拂下ヲ請願シタルモノナレバ、畢竟該願書ハ宮内遞信兩省交渉ノ事柄ヲ含有スルモノト認メザルベカラズ。故ニ宮内大臣ト雖ドモ本省ニ照會シ、其協議ヲ遂ゲタル上ナラデハ直ニ之ヲ令スルヲ得ザルベク、本大臣亦然リ、宮内大臣ノ承諾ヲ得タルノ後ニアラザレバ之ヲ決行スルコトヲ得ザルモノト思惟シ、先以テ大藏大臣協議ノ上左ノ如ク宮内大臣へ照會セリ。

曾テ被屬 帝室御資産候日本郵船會社株式三萬千三百拾株ヲ額面原價百五拾六萬五千五百圓ヲ以テ拂下相成度旨、別紙之通り該社長ヨリ願出候、其情實ハ該書面ニ縷陳之通り、該社ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルノ點ニ於テ餘儀ナキ嘆願ト認メ候間、至急何分ノ御詮議相成度別紙相添此段及御照會候也。

明治二十年十二月十二日

遞 信 大 臣

宮 内 大 臣 宛

追テ本件ハ貴省御主管ノ件ニ付、本願可及御引繼答ニ候得共監督上必要有之候ニ付御許

帝室御資産ニ屬スル日本郵船會社株券原價拂下ノ出願ニ關スル宮内大臣ノ垂問ニ對シ 二〇九
遞信大臣ノ答辯

可ノ上ハ當省ヨリ指令致度ト存候此段申添候也。

右照會ニ對シ拂下ヲ許可スベキ旨宮内大臣ヨリ左ノ回答ヲ得タリ。

帝室御所有日本郵船會社株式拂下相成度旨郵船會社ヨリ願出ノ書面相添御照會ノ趣了承事情難默止儀ト存候間願ノ通聞届連々ニ拂下可申就テハ左ノ個條該社へ御達相成度候。

一、帝室御所有株三萬千三百拾株額面原價百五拾六萬五千五百圓ヲ以テ明治二十一年ヨリ六ケ年間ニ連々可拂下事。

一、右拂下ハ毎年十二月ニ於テ其代金貳拾五萬圓宛上納シ末年ニ至リ殘額悉皆上納可致然ルトキハ其時々代金額ニ對スル株券可下渡事。

一、株券ニ屬スル割賦金ハ其拂下ニ至ル迄ノ分ハ勿論内藏寮へ納付スベキ事。

右御達之上請書差出候ハ、御回付相成度此段及御回答候也。

明治二十年十二月十三日

宮内大臣子爵 土方 久 元

遞信大臣子爵 榎 本 武 揚 殿

是ニ由テ大藏大臣協議ノ上左ノ如ク指令セシモノナレバ敢テ宮内大臣ノ職權ヲ侵シタルモノニアラザル事ト確信仕候。

願之趣特別之詮議ヲ以テ聞届候條左之通り心得ベシ。

明治二十年十二月十五日

遞 信 大 臣

一、帝室御所有株三萬千三百拾株額面原價百五拾六萬五千五百圓ヲ以テ明治二十一年ヨリ六ケ年間ニ連々宮内省ヨリ拂下ベシ。

一、右拂下ハ毎年十二月ニ於テ其代金貳拾五萬圓宛宮内省へ上納シ、末年ニ至リ殘額悉皆上納スベシ。然ルトキハ其時々代金額ニ對スル株券ハ同省ヨリ下渡スベシ。

一、株券ニ屬スル利益配當金ハ其拂下ニ至ル迄ノ分ハ勿論宮内省内藏寮へ納付スベシ。

一、拂下タル株券ハ當省ノ指揮ニ遵ヒ尙ホ會計監查官立合ノ上直ニ消却シ其都度株金總高ノ内ヨリ之ヲ減却スベシ。

又右指令ニ宮内大臣通牒外タル資本減却ノ一項ヲ命令シタルハ干涉スベカラザル事ニ干涉シタルカ否決シテ然ラザルノ理由アリ。

抑モ普通ノ合本會社タルモノハ株主中ヨリ社長若クハ頭取ヲ公撰シ、業務統理ノ任ニ當ラシメ、

帝室御資産ニ屬スル日本郵船會社株券原價拂下ノ出願ニ關スル宮内大臣ノ垂問ニ對シ 二一一
遞信大臣ノ答辯

尙取締役數名ヲ撰擧シ、常ニ其行爲ヲ監督セシムルヲ以テ例トヒリ。然レドモ該社ハ大ニ其趣ヲ異ニシ舊兩社ノ請願ニ據リ政府之ガ監督ノ地位ニ立ツモノニシテ、即チ命令書ヲ下付シ社長理事ヲ官撰シ、本省及大藏省其監督ノ任ヲ分掌スル所以ナリ。其命令書タル特典ヲ與フルノ外逐條干涉ニ屬セザルハナシ。今本案ニ關スル條項ヲ舉示スレバ

第二條 其會社ノ資本金ヲ壹千壹百萬圓トシ、之ヲ貳拾貳萬株ニ分ツ。但其會社ニ請願又ハ政府ノ詮議ニヨリ資本金額ヲ増減スルコトアルベシ。

第五條 其會社ハ中外ノ海運ヲ以テ事業トナシ他ノ事業ニ關涉スベカラズ。但船舶修繕ノ爲メ鐵工場ヲ保持スルコトヲ得。

第三十二條 其會社總會ニ於テ決定シタル事件ト雖ドモ農商務卿ノ認可ヲ得ルニアラザレバ之ヲ執行スルコトヲ許サズ。

第三十六條 政府ハ其會社ノ業務ヲ監督シ此命令書ノ明條ニ違背シ又ハ公益ヲ害シ若クハ其會社ノ不利ト認ムル事件ハ之ヲ制止シ又ハ其營業ヲ禁止スルコトアルベシ。

斯ノ如ク本省ハ該社ノ業務上其他ノ舉措ニ付キ常ニ干涉ノ地位ニ立ツモノニシテ、畢竟株主ガ安心シテ該社役員ノ行爲ヲ顧ミザル所以ノモノモ亦政府監督ノ任ヲ取ルヲ以テナリ。是ヲ以テ

資本減却ノ一項ヲ故ラニ命令セシ所以ニ御座候。

若シ之ヲ放任センカ、資本ノ減却ニ充テズシテ之ヲ市場ニ賣出シ、若クハ金融ノ資ニ供センモ亦未ダ保スベカラズ。若シ之ヲ不問ニ付セバ陽ニ資本減却ヲ名トシ、私ニ株式ノ賣買ニ從事シ、營利投機ニ流ル、ノ恐ナキニアラザルナリ。是レ命令書第五條ノ制アル所以ニシテ、其弊害ヲ未萌ニ防グハ最モ必要ノコトト確信仕候。凡ソ合本會社タルモノハ如何ナル場合ヲ問ハズ其會社ノ株券ヲ買入レ、之ガ株主トナルベカラザルハ普通ノ定則タリ。現ニ我國立銀行ノ如キモ亦條例中左ノ一項アリテ之ヲ制止セリ。

第五十八條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其銀行紙幣ヲ抵當又ハ質物トシテ借金を爲スベカラズ。又其銀行ノ株式ヲ抵當ニ取りテ貸付金をナスベカラズ。又其株ノ買主トナリ又ハ其株主トナルベカラズ。云々

又英國會社條例ヲ調査スルニ左ノ條項アリ。

會社ニ於テ自ラ本社ノ株式ヲ購入シ得ルハ創立證書及ビ結社定款中ニ之ヲ許可スルノ明條ヲ掲載シタルトキニ限ルベシ。若シ此事ニ關シテ明文ナキ場合ニ於テ其株式ヲ購入シタルトキハ假令一般合資會社ノ株式ヲ賣買スベキ權力アルニ拘ラズ仍ホ越權ノ處分ト認ムルモノトス。

是ニ由テ之ヲ觀レバ一會社自己ノ株券ヲ所有スルヲ得ザルハ勿論ニ付、郵船會社ガ拂下若クハ購入シタル自己ノ株券ハ果シテ資本ノ減却ニ供スルヤ否ヲ監督スルハ本省職權内ノ義ト確信仕候。

猶終ニ臨ンデ一言スベキコトアリ、資本ノ増減ハ命令書第二條ニ依リテ株主ノ決議ヲ俟タズ政府之ヲ命令スルノ權限アリ。然レドモ猥リニ之ヲ適用セズ、專ラ株主ノ望ニ副ハンコトヲ務メ株主臨時總會ニ提出セル左記資本償却議按ノ決議ヲ認メタル後前陳拂下ノ株式ハ資本高ノ内ヨリ減却スベシト令達シタル義ニ有之候。

日本郵船會社臨時總會第四號議按

資本金償却ノ件

本社株金壹千百萬圓ノ處今後會計ノ都合ヲ計リ政府ノ認許ヲ得テ漸次八百八拾萬圓ニテ償却センコトヲ豫メ本會ノ議決ヲ請フ

以上陳述スルガ如キ理由ナルヲ以テ、本省ニ於テ指令シ殊ニ株金總高ノ内ヨリ減却スベキコトヲ命ジタルハ敢テ越權ナリト云フベカラズ。又干涉スベカラザル事ニ干涉シタリト云フベカラ

ズ。尙ホ政府ト該會社トノ關係ヲ約言スレバ、本省ハ政府ヲ代表スルノ位地ニ立ツモノト云ハザルヲ得ズ。如何トナレバ他官省ニ於テ該社ノ船舶ヲ使用スル等、其他百般ノ事項概ネ本省其照會ヲ受ケ該社ニ令達スルノ慣例ニ有之候。

右御垂問ニ付具陳仕候。然レドモ本件自然越權之處置ト御認定相成上ハ其責素ヨリ拙官於テ辭スベキ所ニ無之候間御熟閱之上仰御指揮候也。

明治二十年十二月廿三日

管船局長 塚 原 周 造

遞信大臣子爵 榎 本 武 揚 殿

琉官上京始末

琉球藩所分方之儀ニ付伺

琉球藩之儀、從來本朝清國へ兩屬人民ハ本邦ヨリ保護シ、正朔ハ重ニ清國ヨリ奉ジ來リ、一昨五年使臣來朝之節初テ封ヲ賜リ、尙泰儀藩王ニ被爲列候得共、清國ノ所營ヲ脱セシムルニ至ラズ。曖昧模糊トシテ何レノ所屬ト申儀一定不致、甚不體裁之譯トハ存候得共、數百年來之仕來リ殊ニ頑僻固陋舊章ヲ致墨守候習俗藩人一般之情合モ有之、一筋ニ名分條理ノミヲ以論決難致、漸ヲ以鎔陶之積ニ候處、今般清國談判之末藩地御征討ハ同國ヨリ義舉ト見認メ、受害難民之爲メ換郵銀ヲ差出候都合ニ立到リ、幾分カ我版圖タル實跡ヲ表シ候得共、未ダ判然タル成局ニ難至、各國ヨリ異論無之ト申場ニ到兼、萬國交際之今日ニ臨ミ此儘差置候テハ他日ノ故障ヲ啓クモ難計事ニ候。征蕃之舉ハ琉球難民ノ爲メ保護上ヨリ不得止之義務ニ出テ、巨萬之金額ヲ費シ御處分相成候譯ニテ、藩王初メ深ク御趣意拜戴早々上京恩義ヲ奉謝候儀當然之事ニ候得共、

從來之因習ヲ以清國ヲ懼レ、他日ヲ慮リ、知テ不知之姿ニ罷在候情實モ可有之歟。藩王之上京ヲ被爲命御教諭有之度儀ニ候得共、是迄自身來朝致候事無之、萬一左右ニ託シ直様上京不致事共有之候ハ、御譴責之外無之儀ニ付、一往御用赦別格之御取扱ヲ以此涯蒸氣船壹艘御差下シ、時世ニ致通達候重役兩三名被招呼、征蕃ノ顛末清國談判之曲折方今之形勢名分條理懇篤ニ申聞、歸藩之上藩王へ傳達藩王奮發上京謝恩之都合ニ致度候。此節被招呼候琉官上京候ハ、清國ノ關係ヲ一掃致シ、鎮臺支營ヲ那霸港内ニ被召建、其餘刑法教育ヲ始メ制度改革之事共順次相運候様篤ト示諭致度候。其内同藩ヨリ米佛蘭へ條約ノ件ハ難差置儀ニ候間、速ニ政府ニ於テ結替候手順ニ御運有之度、抑モ藩民臺灣へ漂到致候モ畢竟堅牢之船無之處ヨリ相起リ、昨年七月同藩之船洋中困難之際米國般扶助清國上海之我領事ニ引渡、當年五月ハ福洲之内定海ニ漂流、七月五島玉ノ浦へ、壹艘ハ肥前蠣ヶ浦へ流著、其他當年中本島近海ニ於テ五六艘ノ難船有之、南海中ニ致屹立候孤島航海商法ヲ以衣食住ヲ營ミ候土地柄、適出來之產物海底ニ致沈沒候テハ將來同藩立行候モ爲覺束甚以憫然之次第ニ候間、這回清國ヨリ相辨へ候撫郵銀難民五十四名ノ家へ米三拾石位宛並ニ生殘リシ備中人ニ至ル迄貨財船衣類等奪レ候始末取調夫々相當ニ扶助シ、其餘銀ヲ以三拾間餘ノ瀛船壹艘御買入之上同藩へ下シ賜候ハ、前條之災難ヲ免レ目下便益ヲ來シ御鴻恩之程長ク感銘可仕、然者難民之爲メ清國ヨリ差出撫郵之名義ニ不及全藩人民之供福

ヲ得一舉兩得ノ御取置ト有候。施設之順序改革之箇條見込之次第モ之有候間琉官上京之上時々上裁ヲ經委曲說諭ヲ加へ着手致度此段相伺候也。

明治七年十二月十五日

內務卿 大久保利通

太政大臣 三條實美 殿

伺之趣聞届候條琉球藩官員上京之上篤說諭ヲ加へ其情願ヲ推究シ尙清國關係處分之儀ハ追テ可伺出事

明治七年十二月廿二日

太政大臣
三條實美
印

琉球藩

御用有之候條三司官一員並ニ與那原親方同道上京可致事

十二月廿四日

太政官

琉球藩人被招呼候ニ付瀛船差立方伺

今般琉球藩處分ノ爲メ同藩官員兩三名被招呼候ニ付瀛船壹艘被差下度相伺候處來ル一月十日前後ニハ隔月往復之郵便船當地出發之期ニ相當リ候間此船便ヨリ御達之趣申越右歸船へ乗込上京致候ハ、態々臺艘被差下ヨリハ格別御入費減少右之方可然ト存候遲緩之琉人三四日中仕舞相付乗船之都合整兼可申候間日數十五日間用赦致度左郵船那霸港定式外碇泊之費用別途官費ニ被相立此旨大藏省へモ御下命有之様致度此段相伺候也

明治七年十二月廿四日

內務卿 大久保利通

太政大臣 三條實美 殿

琉官上京始末

伺之趣聞届候事

明治七年十二月廿八日

大政大臣
實美印

一局第六千二百
三課七十四號

十二月廿八日
決

驛遞頭
琉球藩

十二月廿八日
一局三課達濟

第三局
長印

十二月廿九日受十二月廿八日上達

山形

官省

三局

明治七年十二月廿八日奉
同月同日出

中錄 河原田 盛美

河原田

下田

卿代理

友幸

丞

新田

輔 第二局長

第三課長

章

今般琉球藩官員被召呼候ニ付驛遞寮並ニ琉球藩へ御達案

驛遞寮へ御達案

今般太政官ヨリ御用有之琉球藩三司官壹名並ニ與那原親方被召呼候ニ付兼テ隔月往復之郵便
船來ル一月八日出船爲致右歸船之節乗船上京爲致候様可取計尤那覇港定式之碇泊ニテハ琉官
支度相整兼可申都合十五日間猶豫申渡候條定式外碇泊之費別途官費ニ立相渡候條諸事不都合
無之様可取計候事

七年月日

琉官上京始末

驛 遞 寮

內 務 卿 代 理

琉 球 藩

今般御用ニ付三司官壹名與那原親方被召呼候ニ付テハ來一月八日出發之郵便船歸船之節乘込候様可致尤支度等モ可有之候間右船那霸港へ十五日間滯船申付候條右江乘船上京候様可致候事

七年 月 日

內 務 卿 代 理

驛 第 廿 七 號

一 月 廿 四 日 判 決

三月二日受

一月廿四日上達

阿部

官省

調

一ノ第二號

明治八年 一月十二日出

權中屬 大野 省 內 大野

卿代理

友幸

輔

丞 新田

驛 遞 頭

前島

助

真中

屬

五島

第四局長

松平

課長

照一

錄

玉村

岡本

琉球へ通航郵船之義蒸氣船會社御一覽

本月中琉球藩へ通航郵船解纜都合等之儀兼テ御達之趣蒸氣船會社へ相達候處別紙請書差出候ニ付供御一覽候尤定式外碇泊入費御渡方之儀ハ追テ歸航之上取調可申上候

琉官上京始末

玄龍丸琉球航之儀ニ付御請

郵便蒸氣船會社

御 請

今般太政官ヨリ御用有之琉球藩三司官壹名並與那原親方御召呼被爲成候ニ付隔月往復之ノ郵便船來ル一月八日出船爲致候様且那覇港定式之碇泊ニテハ琉官支度相整兼候ニ付都合十五日間猶豫御申渡相成就テハ定式外碇泊入費ハ別途御官費ヲ以御下ゲ可相成右ニ付諸事不都合無之様被仰聞逐一奉畏候右ハ來ル一月八日蒸氣玄龍丸東京出帆大阪繼一月十二日蒸氣玄龍丸ヲ以琉球へ向ケ出船爲致候様確定可仕候且碇泊費之儀ハ別紙之通御座候間宜敷御採用被成下度奉願候依之御請奉申上候以上

郵便蒸氣船會社

明治七年十二月廿九日

副頭取 岩 橋 萬 造 印

驛遞頭 前 島 密 殿

蒸氣玄龍丸碇泊一晝夜分入費

一金參拾五圓拾貳錢參厘

船 貸 料

是ハ船元代理及ビ修復金共六萬四千百圓五ヶ年ニ割合一日分

一金參拾貳圓五錢

船 代 利 息

是ハ船元代價及修復金共六萬四千百圓之利息壹ヶ月百圓ニ付金壹圓五拾錢之割合ヲ以テ三拾日九百六拾壹圓五拾錢ノ一日分

一金四拾參圓參拾參錢參厘

乘 組 月 給

是ハ船中乘組外國人二名日本人四十二名三十日給料琉球航ニ付増給共千三百圓ノ一日分

一金貳拾八圓

船 中

是ハ船體及ビ機關修繕費一晝夜分

琉官上京始末

一金拾參圓

是ハ甲板上及ビ運用品機關室掃除致候麻類其外入費

合金百五拾壹圓五拾錢六厘

來ル八日郵便蒸氣船黃龍號大阪へ向品海抜錨夫ヨリ玄龍號ニ繼替琉球藩へ通航致シ候ニ付例之通同藩へ向御差立之郵便物ハ七日午前四時迄ニ四日市郵便局へ御差出有之度此段及御報知候也

明治八年一月三日

前 島 驛 遞 頭

琉球藩事務局 御中

來ル八日郵便蒸氣船黃龍號大阪へ向品海抜錨夫ヨリ玄龍號ニ繼替琉球藩へ例之通り通航仕候ニ付史官へ別紙之通常察ヨリ直ニ相届候間此段申上候也

明治八年一月四日

驛遞頭 前 島 密 驛遞頭印

内務大少丞 御中

來ル八日郵便蒸氣船黃龍號大阪へ向品海抜錨夫ヨリ玄龍號ニ繼替琉球藩へ例之通り通航仕候此段御届申進候也

明治八年一月四日

史 官 御 中

書記 野 村 親 雲 上

右者今般太政官ヨリ三司官一員並與那原親方御用之御書付又ハ御達之趣爲演達來八日出艦之郵便船へ乗合差下申候右ニ付同人罷歸迄之間書役ハ久志親雲上へ寄勤サセ申候爲御心得此段申上

琉官上京始末

候也

一月

津波古親方^印

内務卿大久保利通殿代理

林友幸殿

今般琉球官員三司官一員與那原親方別紙之通太政官ヨリ被招呼右ニ付同藩野村親雲上歸藩致候ニ付而者自ラ此度ノ郵船ヨリ上京之儀ト存候得共尙其許ニ於テモ厚ク御主意ヲ奉シ無遲滯上京候様可被取計事

八年一月七日

内務大丞

琉球在勤

九等出仕 福崎秀連殿

十二等出仕 時任義當殿

十五等出仕 小菅直達殿

別紙前ニアリ依テ略ス

琉球藩官員上京ニ付接待向之儀ニ付伺

今般琉球藩三司官並與那原親方被招呼候ニ付而者着京之期モ來ル二月廿日前後ニ可有之右接待向之儀一昨年使臣來朝之節者外務大丞已下奏判任數名接待候用掛被命優渥之御取扱ニ候得共最早今日ニ至リ候而者右等之儀ニ不及ハ勿論ニ而當省之管理ニ候間適宜ニ任セ至當之取計可致候得共着京候ハ翌日ヨリ三日間休日ヲ賜リ四日後ニ至リ御用之次第被 仰出度且遠來ノ勞ヲ慰シ候爲メ右休暇中且御用濟出發之節再度酒饌下賜候様致度此段相伺候也

明治八年一月十八日

琉官上京始末

內務卿大久保利通代理

內務大丞 林 友 幸

太政大臣三條實美殿

伺之趣聞届候事

明治八年二月三日

太政大臣三條實美印

琉球藩官員上京之節接待向之儀別紙正院御指令之通當省江御委任相成候處當今之御場合ニ至テハ別段御差構無之而モ可然候得共一昨年來朝御優渥之御取扱モ有之候間左之通御決定相成可然ト存候仍テ此段相伺候也

一、琉官坂着候ハ、坂地出帆横濱着之時日及ビ隨從之人員等早速電報候様兼テ大阪驛遞寮出張所江中遣置事

一、横濱港着之日ニハ第二局第三課官員兩名出張萬事不都合無之様取計同伴ニテ入京之事

一、新橋ステーション迄道案内之馬車壹輛差出置出張官員同伴本省へ出頭夫ヨリ藩邸江着爲致候事

候事

但シ三時後着京モ候ハ、翌日届出サセ候事

右之外在京中諸事不都合無之様掛リ官員ニ而取調時々上裁ヲ經取計可申事

一、着三日後且歸藩出發之節

聖上拜謁被 仰付候事

此件正院ニ伺出ニ不及宮内省へ御掛合ニテ相濟來候事

一、大臣參議方江見舞之事

一、本省卿輔大丞江見舞之事

一、滯京中省中ノ位置體裁且陸軍練兵等モ拜見其他開拓使官園四ツ谷勸業寮出張所製 寮工學寮諸製作場所モ一見爲致候事

寮諸製作場所モ一見爲致候事

右四ヶ條未ダ御決議ニハ不相成候得共着之上右之通取計度所存ニ御座候事

右省中決議濟相成ル

兼而相達置候琉球藩官員着京之期本月廿日前後ニ可有之候處當省之都合モ有之候條着阪候ハ、

琉官上京始末

阪地出艦橫濱着港之日及ビ隨從之人員等早速電報候様兼而其寮大阪出張所江達置候様可致此旨相達候也

明治八年二月九日

内務卿大久保利通代理

内務大丞 林 友 幸

驛遞頭 前 島 密 殿

琉球藩官員阪地着候ハ、同地出發及橫濱着港之期日等當寮同地出張所ニ於テ電報可取扱旨御達之趣致了承候即右之趣出張所江相達置候條此段及御答候也

八年二月十七日

前 島 驛 遞 頭 ①

大久保内務卿代理

林内務大丞殿

別紙之通當寮大阪出張所ヨリ電報有之候間御廻シ申候也

第三月八日

前 島 驛 遞 頭

伊地知六等出仕殿

リウキウジンコヂウニンホンゲツイチジツカゴシマチヤククワシキハトウチヤクノウエホウチ
ス

一簡致啓上候陳者今般奉命出京之琉球藩三司官壹員池城親方並與那原親方外ニ爲附屬幸地親雲上一同郵船江乘組二月十七日午後第二時那霸港出帆以來海上都合不宜瀨底運天兩港へ滯船廿二日午

琉官上京始末

前第九時運天港揚錨同廿三日午後第二時大島名瀬江繫纜廿八日午前第十時同所出艦昨一日午後第十一時前之濱江着仕來ル六日頃當地出發之積ニ候間左様御承知有之度不取敢此段申進候也

明治八年三月二日

在鹿兒島

外務權中錄 堀江 弘貞

內務省

第二局第三課 御中

三月三十一日上達

明治八年 三月三十日奉 同月同日出

中錄 河原田盛美

河原田

卿 丞

松田道之

輔 友幸

第二局長

第三課長

章

錄

種島

琉球藩處分方之義再應正院御伺

右御指令相成候ニ付

供回覽候也

松平

阪部

松平

二局

正

琉球藩處分方之儀ニ付再應上申

先般相伺候琉球藩處分方之儀琉官着京候ハ、兼テ相伺候通征蕃ノ顛末清國談判ノ曲折方今ノ形

琉官上京始末

勢情實名分條理等篤ト加示諭申度尤變革ノ次第ハ嘗テ上申致候通名分條理ノミヲ以論決難致事
 情有之一時十分ニ施行致候テハ却テ混亂ヲ醸シ歸着難致勢ヒ有之哉モ難圖候ニ付今般ハ先ヅ粗
 藩治ノ體段ヲ定メ保護ノ實蹟ヲ表シ餘ハ順叙ヲ逐ヒ漸ヲ以テ着手致度依テ凡テノ目的ヲ定メ可
 及懇諭候間別紙ヲ以テ相伺候ニ付何分御指令有之度藩治職制適宜改正之儀豫メ取究難申上候ニ
 付猶琉球官ノ接得ノ上可被行度ニ應ジ見込相立上申可致候那霸港内へ鎮臺支營被建置候事ハ速
 ニ不相運候テハ不都合ニ付御評決ノ上陸軍省へ御達有之度此段及上申候也

明治八年三月十日

內務卿 大久保利通

內務卿
大久保
利通印

太政大臣三條實美殿

上申之趣ヲ以テ懇說篤諭可致事

但陸軍省并琉球藩へハ追テ可相達候事

明治八年三月廿九日

太政大臣
三條實
美印

琉球藩

其藩管内保護之爲メ第六軍熊本分營トシテ那霸港内エ鎮臺兵營被建置候條此旨相達候事

年月日

太政官

從前之職制可成體裁ヲ改メ先ヅ急務ノ件々ニ着シ結局府縣一致ノ制度ニ復シ候様致シ度依テ

左條ニ掲グ

- 一、藩王謝恩トシテ上京令伺 天機爾後朝觀シ規則治定致度事
- 一、管内一般ニ明治ノ年號ヲ奉ジ年中ノ儀禮等布告通遵奉爲致度事
- 一、刑法ノ儀司法省ノ定律通施行可爲致依テ刑律取調ノ爲擔任ノ者再三輩出京爲致候事
- 一、藩治職制適宜改正ノ節内地コリ人撰ヲ以テ官員赴任可爲致事
- 一、學事修行時勢通達ノ爲メ少壯ノ輩十名餘出京爲致候事

イチチサタカ ウヲスミゲンソヲ
ユウビンセン コンニチ チヤク リウジンモチヤク

大阪ニテ 堀 江

内務省御中

リウサンシカンコンニチ ヲヲサカエチヤク

三月十三日

大阪山内驛遞權助

前島頭殿

リウキウジン ジウゴニチシヨウゴジウニジダイユウマルニテシユツハツテンサイノゾクノホ
カジウシチニチゴゴクジマデニヨコハマチヤクノヨシ

(三月十五日別紙電報真中驛遞權助持參)

御届

別紙ノ通大阪表ヨリ電報有之候間此段御届奉申上候以上
八年三月十五日

郵船蒸氣船會社 印

驛遞御寮

ユウセンカイシヤ ドウシヤ
リウキウジン シジウゴメイ (大有丸)
ダイニテアスダス (三月十七日)

三司官 池城親方

右御用ニ付幸地モ附添玄龍丸ヘ乗合二月十七日那霸川出艦所々汐懸ニテ於大阪大有丸ヘ乗替昨夜橫濱着艦今日上京仕申候此段御届申候也

明治八年三月十八日

琉球藩 津波古親方

内務卿 大久保利通殿

今般御用ノ三司官一員并與那原親方同道上京仕候被 仰出右ニ付池城親方與那原親方鎖之側幸地親雲上茂附添被差上候間萬端可然様御引進御依頼申候也

浦添親方印
宜野灣親方印

堀江王子印

内務卿 大久保利通殿

別紙ノ人數當月十八日出京仕第三大區四小區飯田町三丁目八番地琉球藩邸江寄留仕候此段御届申候也

明治八年三月

琉球藩 津波古親方印

内務卿 大久保利通殿

覺

池城親方
與那原親方

幸地親雲上
 山里親雲上
 眞榮城親雲上
 祝嶺親雲上
 多嘉良親雲上
 池村親雲上
 金城親雲上
 桃原親雲上
 伊是親雲上
 前川親雲上
 坡名城里之子
 新城里之子
 渡具知里之子

小灣筑登之
 鉢嶺筑登之
 屋部筑登之
 久場筑登之
 伊波子
 安村子
 松川子
 新垣
 城間
 知念
 仲染
 城間
 玉城

知念 嶋袋 新里 金城 玉袋 山嘉 大桃 大原 宮城 大川 山城 宮城

右者太政官ヨリ三司官并與那原親方御用召ニ付爲演達琉球江罷下候處昨日上京仕申候爲御心得此段御届申上候也

八年三月十九日

内務卿 大久保利通殿

琉球藩 津波古親方

琉球藩三司官

池城親方 與那原親方 領之側

幸地親雲上 上下四拾五人

右一昨十七日午後十時横濱著港昨日正午十二時着京届出候ニ付此段御届申進候也

琉官上京始末

二四五

明治八年三月十九日

內務卿 大久保利通

太政大臣 三條實美殿

各通

池城親方
與那原親方
幸地親雲上

遠路航海上京ニ付爲慰勞酒饌下賜候事

明治八年三月廿三日

正院ヨリ遠路航海爲慰勞酒饌下賜ニ付及御廻候也

八年三月廿三日

伊地知貞馨

池城親方殿
與那原親方殿
幸地親雲上殿

正院ヨリ遠路航海爲慰勞酒饌被下給難有次第奉存候右御禮宜様被仰上被下度奉依頼候也

明治八年三月廿四日

幸地親雲上
與那原親方
池城親方

伊地知貞馨殿

今般琉球藩三司官池城親方始左ノ三名御用有之被召登去十八日着京致ニ付兩三日之内三名共
聖上拜謁被 仰付度日限御治定御申越有之度此段申進候也

明治八年三月廿二日

內務卿 大久保利通

宮内卿 德大寺實則殿

琉球藩三司官 池城親方

同藩 與那原親方

同藩鎖之側 幸地親雲上

今般琉球藩三司官池城親方始外二名御用有之被召登去ル十八日着京ニ付拜謁之儀御照會有之候
處即今

御風氣被爲在候ニ付差向日時御治定難相成候間御快氣之上ハ當省ヨリ御省へ可及御打合候此段
及御廻答候也

明治八年三月廿三日

宮内卿 德大寺實則

內務卿 大久保利通殿

今般上京ニ付早速

聖上拜謁可被仰付之處此節御風氣ニ被爲在候ニ付御快氣之上可被仰付旨宮内省ヨリ申來候此段
申進候也

八年三月廿四日

伊地知貞馨

池城親方殿

與那原親方殿

幸池親雲上殿

去廿二日御申立相成候琉球藩三司官始外兩名來ル廿八日午前十時拜謁被 仰候間右之者共江御申達可有之候也

明治八年三月廿五日

宮内卿 德 大 寺 實 則

内務卿 大久保利通殿

去ル廿四日申立候琉球藩三司官池城親方外兩名來ル廿八日午前十時拜謁被 仰付候ニ付可相達旨御申越之趣致承知候則右日時參内可爲致候此段及御回答候也

明治八年三月廿七日

内務卿 大久保利通

宮内卿 德 大 寺 實 則 殿

來ル廿八日午前十時

聖上拜謁可被 仰付旨被 仰出候間本日午前第九時前本省迄出頭可有之候此段申進候也

明治八年三月廿五日

伊 地 知 貞 馨

池 城 親 方 殿

與 那 原 親 方 殿

幸 地 親 雲 上 殿

三月廿八日

一、午前第九時前池城親方幸地親雲上出省與那原親方依所勞不參午前九時前伊地知貞馨同車

兼テ本省馬車用意

但此日藩王ヨリ献上物可持參之處正院伺中ニ付其旨宮内省六等出仕櫻井純造江貞馨ヨリ申

談置委クハ後號ヲ見合ヌ可シ

琉球藩王ヨリ献上物之儀ニ付伺

今般上京ノ琉球官員ヨリ別紙品物之通藩王ヨリ献上物仕度旨申出候處兼テ時々ノ献上物ハ説諭ヲ加ヘ差止候様外務省所轄中御達之趣モ有之候得共先般御寫眞頂戴三祝日酒饌等モ被成下旁恩謝ノ爲メ微志ヲ表シ奉リ度態々遠海ノ場所持越候旨懇々申立候ニ付申出ノ通献上爲致此度上京ノ琉官歸藩ノ節相當ノ御品下賜候ハ、可然ト存候尤明廿八日午前十時拜謁被仰付候ニ付其節献上致度旨申出候間本日中御指令有之度此段相伺候也

明治八年三月廿七日

内務卿 大久保利通 印

太政大臣 三條實美 殿

伺之通

明治八年三月廿八日 印

謹白今般御用有テ三司官毛有斐並ニ馬兼才同道鑽之側向德宏附添上京セシム因テ茲ニ微物ヲ備ヘ謹ンデ

聖安ヲ窺フ伏シテ

奏聞ヲ請フ

明治八年二月九日

琉球藩王 尙

泰 謹奏

謹

紺地縞細上布

紺縞細上布

縞 紬

圓 金

縹 緞

琉官上京始末

具

十 端

十 端

十 端

一 本

一 本

雜 纂

太平布

青貝中央卓

燒 酎

奉

敬

十 疋

一 脚

十 壺

申

謹白今般御用有テ三司官毛有斐並ニ馬兼才同道鎖之側向德宏附添上京セシム因茲微物ヲ備

へ謹ンデ

皇后宮ノ福安ヲ窺フ伏シテ

奏聞ヲ請フ

明治八年二月九日

琉球藩王 尙

泰 謹奏

謹

具

紺地縞細上布

紺縞細上布

縞 紬

紗 綾

襪 緞

太平布

燒 酎

奉

敬

五 端

五 端

五 卷

一 本

五 疋

五 壺

申

謹白今般御用有テ三司官毛有斐並ニ馬兼才同道鎖之側向德宏附添上京セシム因茲微物ヲ備

へ謹ンデ

皇太后宮ノ福安ヲ窺フ伏シテ

奏聞ヲ請フ

琉宮上京始末

明治八年二月九日

琉球藩王 尙

泰 謹奏

謹

紺地縞細上布

紺縞細上布

縞 紬

紗 綾

粧 緞

太平布

燒 酎

奉

敬

具

五 端

五 端

五 端

一 本

五 卷

五 疋

五 壺

申

琉球藩王ヨリ献上物之儀ニ付御伺出之趣本日中御裁可有之度旨御加筆ニ候得共最早三職御退出後ニ付明廿八日早々御裁決相成候様取扱可致候間此段御承知被置度候也
八年三月廿七日

史 官

内 務 大 少 丞 御 中

藩王ヨリ献上物之儀只今正院伺濟ニ相成候條明廿九日宮内省江献上物御差出可有之候此段申入候也

明治八年三月廿八日

伊 地 知 貞 馨

池 城 親 方 殿
與 那 原 親 方 殿
幸 地 親 雲 上 殿

琉官上京始末

追而御門鑑三枚相廻シ候尤持夫多人數故御門鑑通行不都合無之様宮内省江打合置候條此段モ申添候也

過刻出省之節琉球藩王ヨリ献上物云々及御談置候處只今正院伺濟ニ相成候就而者明廿九日献上物持參可致候間宜敷御取計有之度且持込之節御門通行不都合無之様其筋へ御達置有之度此段申進候也

明治八年三月廿八日

伊地知貞馨

櫻井純造殿

過刻御談有之候琉球人献品明廿九日御差出可相成旨ニ而云々御申越之趣致承知候御門通行之儀ハ夫卒ニ至ル迄御門鑑各人一枚ツヽ所持候得者差支無之若各人江御渡方御差支之事モ候ハヽ少

時間 皇居通用門前ニ爲御待置ニ而相纏候人ヨリ當省江御申出有之候ハヽ當省通行印紙相渡候様可致候此段御答旁申入候也

八年三月廿八日

櫻井純造

伊地知貞馨殿

上京琉官練兵ヲ始所々一覽之儀伺

琉球之儀ハ海隅ニ僻在シ西洋諸國ノ學科兵制ハ勿論器械工藝之術未ダ全ク開ケズ日移進步之一端ニモ可相成ト存候間今般上京ノ琉官御用間都合ヲ以テ別紙之場所實地目撃致サセ度御聞届之上ハ陸軍省海軍省開拓使等江御達相成度此段相伺候也

明治八年三月廿三日

琉官上京始末

內務卿 大久保利通 ①

太政大臣 三條實美 殿

伺 之 通

但關係之省使へ別紙之通相達候事

明治八年四月九日

太政大臣
三條實美印

- 一、陸軍練兵一覽之事
- 一、學校一覽之事
- 一、製作寮工學寮一覽之事
- 一、橫須賀製鐵所一覽之事
- 一、開拓使官園一覽之事

陸 軍 省

今般上京之琉球官員御用間之節爲練兵一覽相越候儀可有之候間差支無之樣可取設此旨相達候事

明治八年四月九日

海 軍 省

今般上京之琉球藩官員御用間之節爲橫須賀造船所一覽相越候儀可有之候間差支無之樣可取計此旨相達候事

明治八年四月九日

文 部 省

今般上京之琉球藩官員御用間之節爲諸學校一覽相越候儀可有之候間差支無之樣可取計此旨相達候事

明治八年四月九日

工部省

今般上京之琉球藩官員御用間之節爲製制寮工學寮一覽相越候儀モ可有之候間差支無之様可取計此旨相達候事

明治八年四月九日

開拓使

今般上京之琉球藩官員御用間之節爲官園一覽相越候儀モ可有之候間差支無之様可取計此旨相達候事

明治八年四月九日

琉球ハ遠海ニ僻在シ諸事未ダ全ク開ケズ日移進步ノ一端ニモ可成ト存候間今般出京之琉官御用間都合ヲ以テ左之場所一見致サセ度此段御決議有之度候也

一、省中之位置體裁一見之事

一、四ッ谷勸業寮出張所一見之事

一、富岡製絲場一見之事

一、參 内及ビ正院出頭諸所一覽之節掛リ官員一兩名宛同行案内之事

琉球人接得入費金之儀ニ付伺

今般出京之琉球藩三司官始接待向當省之適宜ニ任セ可取計旨伺濟ニ付而者外務省所轄中一昨年使臣來朝之節ハ優渥之御取扱故入費金壹萬圓御渡相成候處於此度ハ右等之儀ニ不及ハ勿論ニ候得共兼而伺之通滯京中兩度酒饌下賜且御用間都合ヲ以テ知識開明ノ爲メ横須賀製鐵所富岡製絲場ヲ始メ諸所一覽發著之節ハ横濱迄送迎等總テ掛官員同行案内諸事不都合無之様可取計積リニ候右等之入費一昨年ノ振合モ有之悉皆藩費ニ致サセ難キ場合モ有之候間臨時之入費凡積リヲ以テ金三百圓大藏省ヨリ別途相渡候様御達有之度此段相伺候也

明治八年三月廿二日

内務卿 大久保利通

太政大臣 三條實美殿

伺之趣聞届候條金額大藏省ヨリ可請取事

明治八年三月廿七日 圖

明治八年 三月廿九日奉
四月同日出

十四等出仕 平野長憲 ⑩

課長

章

錄

河島

種島

琉官接待入費正院伺濟ニ付第四局江御掛合案

今般出京之琉官接待入費之儀別紙之通正院伺濟ニ付大藏省ヨリ御受取之上當課江御渡有之
度此段及御掛合候也

第二局

第三課

年月日

第四局 御中

迫而別紙正院伺濟元濟等之書類者當課江御返却有之度此段モ申進置候也

琉球藩王江賜品ノ儀ニ付伺

琉官上京始末

今般琉球藩官員上京ニ付藩王ヨリ獻上物致度趣申出獻上物ハ御取納相成歸藩之節相當之御品下賜候様相伺候處伺之通被 仰出候付テハ外務省所轄中去ル六年八月同斷之節賜品ハ於同省見込相立伺出代價之儀ハ大藏省へ申立候様御達相成候間此節之儀モ右ニ基キ於當省取扱可然哉此段相伺候也

明治八年三月三十一日

內務卿 大久保利通 印

太政大臣 三條實美 殿

伺之通

明治八年四月廿二日 印

琉球藩王ヨリ獻上品仕度申出兼テ不時之獻上品ハ差上候様外務省所轄中御達之趣モ有之候得共

先般御寫眞影頂戴等之微志ヲ表シ奉リ度旨懇々申立趣有之申立之通獻上爲致琉官歸藩之節相當之品下賜候ハ、可然哉之旨正院御伺候處伺之通御指令相成候ニ付賜品ノ儀ハ獻品ニ應ジ於御省下賜候哉又ハ當省ニテ取計可然哉否致承知度此段及御掛合候也

明治八年五月十四日

內務 大少丞

宮內 大少丞 御中

琉球藩王先般

御眞影頂戴等之儀ニ付微志ヲ表シ不時之獻上物致候ニ付歸藩之節相當之御品下賜可然哉之旨正院江御伺之處則御指令濟ニ付右賜物之儀ハ御省ニ於テ御取計可然哉又ハ御手元ヨリ可下賜哉云云御掛合ノ趣致承知候右者於當省別紙之御品下賜候様取計候條此段及御答候也

明治八年正月廿四日

宮內 大少丞

内務大少丞御中

追而歸藩之者明日參内致候節品物相渡可申候此段申添候也

藩王へ下賜品

錦

貳卷

右

聖上ヨリ

紅白縮緬

五卷

右

皇太后宮ヨリ

錦テーブル掛

一枚

右

皇后宮ヨリ

先般琉球藩王ヨリ國產物品献上ニ付御答附トシテ別紙目錄之通本日下賜候間御廻申候條可然御取計有之度此段申入候也
八年五月廿五日

宮内大少丞

内務大少丞御中

(別紙)

聖上ヨリ

錦

貳卷

壹箱

皇太后宮ヨリ

紅白縮緬

五疋

壹箱

皇后宮ヨリ

錦卓布

一枚

壹箱

琉球行玄龍丸碇泊入費別紙之通申立右者別紙御見合之通リ兼而仕譯書申上置候儀ニ付御取調之上御渡シ方相成度此段及御掛合候也

八年三月廿三日

前島驛遞頭印

伊地知六等出仕殿

琉球行玄龍丸碇泊入費御下ケ願

琉球藩三司官始御召呼被爲成候ニ付本年一月同藩江差向候郵便船那霸港定式外碇泊入費ハ別途ニ御官費ヲ以テ御下ケ被成下候筈兼而御達今般無滯郵便船歸着仕候ニ付別紙之通碇泊入費御下渡被成下候様奉願上候以上

明治八年三月廿日

郵便蒸氣船會社

頭取 竹 内 綱

驛遞頭 前 島 密 殿

蒸氣玄龍丸二月一日午前十時那霸港着船二月十七日午前二時同港出船日數十七日之中日數二日發着港日數一日風波之爲メ定泊日數四日定式碇泊右合計日數七日引去リ日數十日分碇泊入費計算書

一金千五百拾五圓〇六錢也 碇泊入費

但一晝夜百五拾壹圓五拾錢六厘宛先達而奉差上候積リ書之通右之通御下ケ金奉願上候以上

郵便蒸氣船會社

頭取 竹 内 綱印

驛遞頭 前 島 密 殿

琉官上京始末

御 請

今般太政官ヨリ御用有之琉球三司官一名并與那原親方御召呼被爲成候ニ付隔月往復之郵便船來
 一月八日出船爲致候様且那覇港定式之碇泊ニ而者琉官支度相整兼候ニ付都合十五日間猶豫御申
 渡相成就而者定式外碇泊入費ハ別途御官費ヲ以テ御下ゲ可相成右ニ付諸事不都合無之様被 仰
 聞逐一奉畏候右ハ來ル一月八日蒸氣船黃龍丸東京出帆大阪繼一月十二日蒸氣玄龍丸ヲ以テ琉球
 江向ケ出船爲致候様確定可仕候且碇泊費之儀ハ別紙之通御座候間宜敷御採用被成下度奉願上候
 依之御請奉申上候以上

明治七年十一月廿九日

郵便蒸氣船會社

副頭取 岩 橋 萬 造

蒸氣玄龍丸碇泊一晝夜分入費

一金參拾五圓拾貳錢三厘

船賃料

是者船元代價及ビ修復金共五萬四千百圓五ヶ年二割合一日分

一金參拾貳圓五錢

船賃利息

是ハ船元代價及修復金共六萬四千百圓ノ利息壹ヶ月百圓ニ付金壹圓五拾錢ノ割合ヲ以テ三拾日九百六拾壹圓五拾錢ノ一日分

一金四拾參圓參拾參錢參厘

乘組月給

是ハ船中乘組外國人二名日本人四十二名三十日給料琉球航ニ付増給共千參百圓ノ一日分

一金貳拾八圓

船中小修復

是ハ船體及ビ機關修理費一晝夜分

一金拾參圓

碇泊雜費

是ハ甲板上及ビ運用品機關室掃除致シ候麻類其外入費

合金百五拾壹圓五拾錢六厘

去月廿三日御掛合有之候琉球行玄龍丸碇泊入費金千五百拾五圓〇ハ錢及御廻候條御查收之
 上可然御取計有之度此段及御掛合候也

明治八年四月廿二日

琉官上京始末

第二局 第三課

前島驛遞頭殿

金千五百拾五圓六錢

右者去月中及御掛合置候琉球行玄龍丸碇泊入費書面之金圓銀行爲替手形ヲ以テ御差廻有之
正ニ致領收即郵便蒸氣船會社江相渡候也

八年四月廿五日

前島驛遞頭

第二局 三課 御中

琉球藩處分方之儀伺

琉球藩官員へ説諭往復ノ顛末大要別紙之通ニ有之其内爲謝恩藩王上京ノ儀ハ彼等ノ存付ニテ此
ニ至ラシメ度反復婉曲ニ申入書面ヲ以嘆願ノ末一層嚴重及示諭候得共約ソ藩王承知ノ上ナラデ
ハ出東官員ノ手限ヲ以テ決着ノ權利無之趣ヲ以テ陳謝シ鎮臺支營設立藩制改革ノ條ニ於テモ同
様故障申立候藩王之上京ハ少シク御用恕有之候ハ、官員赴任ノ上更ニ説諭ヲ加ヘ成ルベク來朝
候様取計フ心得ニ候支營御設立ハ即今難被捨置急務ニ付御請ノ有無ニ拘ハラズ御施設相成度儀
ニ候間至急陸軍省へ御沙汰有之度藩政改革モ同段ノ儀ニ付適度ニ應ジ施行致度存候隔年朝貢福
州琉館廢止ノ件々ニ至テハ清國御交際上ニ係リ頗ル重大ニ有之候ニ付飽マデ保護ノ道ヲ盡シ粗
藩治ノ體段ヲ定メ漸次推及ノ存慮ニ候處清國在留代理公使鄭永寧琉球藩使節北京到着衙門應接
ノ始末伺越候趣モ有之且新帝即位ニ付其儘被差置候ハ、福州琉球館在留ノ者ヨリ藩元へ報知次
第舊例ニ依リ賀慶使ヲ差立ルハ按中ニテ此期限モ近日ニ迫リ居候琉球藩御處分ノ儀ハ目今内外
共致注視候折柄ニテ賀慶使ノ發遣ヲ默止致候テハ御國權ニ相拘ハリ難被差置儀ト心配仕候乍去
頑僻固陋ノ琉人何程丁寧ニ説解ヲ加ヘ候共遽カニ承諾致シ候程無覺東抑清國關係ノ事ハ畢竟政

府ノ御着目ニ依リ豫メ標準ヲ立テ施設ノ順叙ヲ内定致シ置度存候間前件緩急輕重酌量ノ上廟謨御確定何分御下命有之度別紙應接書類等相添此段相伺候也

明治八年五月八日

內務卿 大久保利通

太政大臣 三條實美 殿

伺之趣清國關係之儀兩國交際上ニ差響キ尤重件ニ候得共昨年征臺清國談判結局ニ至リ候上ハ今後琉球藩舉動ニ依リ大ニ御國權ニ相係リ其儘難差置候條左ノ條件之通可相心得事
但實際處分之儀ハ官員派出被 仰付候上緩急見計ヒ可取計事
一、從來同藩之儀隔年朝貢ト唱へ使節ヲ派遣シ或ハ清帝即位ニ付慶賀使等ノ例規有之趣ニ候得共今後可廢止事

一、福州ニ在ル琉球館可發事
但貿易上ニ付存在致度候ハ凡テ在厦門領事管轄ヲ受從前之通差置人民往來在住致候儀ハ

不苦候事

一、從前藩王代替之節清國ヨリ官船渡來冊封受來候趣ニ候得共今後可廢止事
一、藩王爲恩謝來朝并ニ藩政變革官員派出等之件々兼テ許可致置候ニ付猶着手之順叙緩急等取調可伺出候事

一、今後琉球藩ト清國トノ關係ハ都テ外務省ニ於テ引受處分可致事

明治八年五月九日

太政大臣
三條實美
印

(別紙)

琉球藩官員へ説諭往答ノ始末

三月三十一日

今般御用召ニ付致上京候池城親方與那原親方幸地親雲上ヲ呼出シ御召呼ノ御用筋一往拙者ヨリ内達致スベキ旨太政大臣ヨリ承知致候今般蕃地御征討ノ原由ハ去ル明治四年其藩管内ノ島民六十餘名臺灣島へ漂流土蕃ノ爲ニ殺害セラレ或ハ掠奪ノ難ヲ蒙リ殘暴ヲ極メシ始末ヲ聞食サレ人民保護ニ付捨置レ難キ政府ノ義務ヨリ右談判ノ爲清國ニ公使ヲ派遣シ我所轄中ノ人民將來左様成殘暴ノ害ヲ蒙ラシムルニ忍ビズ巨萬ノ金額ヲ費シ問罪ノ師ヲ差向ラレ多少ノ將士瘡痍ヲ犯シ粉骨碎身忠力ヲ盡シ戰役物故セシ者モ鮮カラズ其際ニ當リ清國政府異議ヲ生ジ更ニ使節ヲ差立ラレ幸ニシテ和議ニ決シ征蕃ノ役議舉ト見認將來蕃民ヲ化シ航客ノ安寧ヲ護シ我意トスル處ヲ意トシテ處分可致トノ旨ヲ盟ヒ撫卹銀ヲ差出シタル都合ニ到レリト雖モ其際談判中屢破レントスルノ勢アリテ若ノ彼ヨリ兵端ヲ啓カバ已ヲ得ズ相應ズベキトノ御決定マデニ相成 聖上御慮

ヲ惱マサセラレ政府大臣方ノ苦心如何計ゾヤ是全ク其藩管内人民ノ爲ニ起レル事ナリ斯マデ御配慮ヲ掛奉リシ儀ヲ藩王及ビ各達ハ何様心得ラレタルヤ

琉官曰ク御内諭ノ趣承知仕候評議ノ上御返答申上ベシ

御處分ノ得失厚薄ハ是迄各方ノ心中ニ之アルベシ存慮ノ程承リ度

琉官曰ク誠ニ以テ御手厚御取扱ニテ藩王始メ幾重ニモ難有奉存儀ニ御座候

難有トノ儀ナラバ口上許ニテハ淺深厚薄ノ程分リ難シ其難有實ハ何ヲ以テ表セラルベキヤ

琉官曰ク退テ評議ノ上可奉伺候

開國ノ氣運ニ際會シ舊弊一掃御親政ノ世トナリ歐米及ビ清國トモ條約ヲ結ビ彼是公使ヲ派出シテ互ニ在勤シ大ニ昔ノ面目ヲ改メ百事宇内ノ公法ニ基キ御處分有之其人民ヲ保護スルニ丈夫ノ道ヲ盡サレバ公法ニ戻リ他日ノ障害ヲ來ス譯ナリ殊ニ琉球ハ所屬未定ノ如ク獨立ノ形ヲナスヲ以テ亞細亞航海ノ便ヲ開ク爲此土ニ據リ修船場トセント企望スル國モアル由ナレバ豫メ公法ニ照シ異議ヲ受ザル程ノ備ナケレバ其期ニ臨ミ何程哀訴嘆願アリテモ最早如何トモスベカラズ旁深遠ノ廟議ヲ以テ其藩保護ノ爲鎮臺支營ヲ那霸港上ニ召建ラル、御内決ナリ且其藩管内ノ島民臺灣島へ漂到セシモ堅牢ノ船無キヨリ生ジ近年藩内ノ船舶諸方ノ洋中ニ於テ困難ニ遭ヒ適出來ノ產物海底ニ沈没スル儀惘然ニ思食サシ別段ノ譯ヲ以テ蒸氣船一隻下賜受害難民ノ家へ撫卹

米ヲモ賜與ノ積リニ候厚キ御趣意ノ程能々被相心得度此内現在餘儀ナキ情合有之御請難致トノ
簡條アラバ幾度モ承知可致乍去舊習ニ拘泥シ目前瑣々タル小得失ヲ以テ陳述アリテモ御採用相
成間敷外ニ内達ノ件々モ候得共今日ハ先ヅ此簡條ノミ示諭ニ及ビ候
琉官曰ク篤ト評議ノ上可奉伺候

四月八日

三名出省申出ルニハ此程御内諭ノ趣評議致候處琉球ハ南海ニ僻在シタル僅カニ周回百餘里ノ小
島ニテ從來寸兵ヲ備ヘズ禮義ヲ以テ維持ノ道ヲ立外國船來航ノ節モ全ク口舌而已ヲ以テ應待シ
今日マデ無異ニ治リ來リ候新ニ兵營ヲ御設立相成候ハハ夫丈外國ヨリモ手強ク押掛リ却テ困難
ヲ生ジ可申外國船來着ノ折ハ御出張ノ官員モ候得バ一々御相談ヲ遂ゲ處置致シ重大ノ事件ハ時
時伺越候ハハ不都合ノ事ハ有之間敷且愚昧ノ下民兵士ト對シ如何成失敬ヲ生ジ混雜ヲ醸シ出ス
モ難計候間支營御取立ノ儀ハ御用捨被下度蒸氣船下賜ノ儀ハ幾重ニモ難有次第ニ候得共御直管
以來屢御手厚御取扱ヲ奉蒙此上重大ノ御品頂戴仕候テハ恐入ル仕合清國御談判ノ末ニ候得バ彼
國ニ對シテモ如何ト存候間御斷申上度撫卹米ノ儀モ其節藩王ヨリ夫々致扶助置候事故是以御斷
申上度前條申上候通琉球ノ儀ハ僻遠ノ土地ニ候間萬事從前通り被召置被下度旨演說ノ上書面ヲ
出ス各方案内通り西薩摩ヨリ東北奥羽ニ至リ殘ル所ナク畫一ノ郡縣トナリ制度一變セシニ無之

哉然ルニ琉球ニ限り藩ニ列セラレ制度其外改正アリシ事アリヤ是殊遇ニ非ラズヤ固ヨリ好ソデ
御着手有之儀ニ非レ共世上ノ沿革ハ氣運ノ然ラシムル所以ニシテ其節ニ應ジ之ガ措置ヲ爲サ
レバ相叶ハザル事ニテ今日ニ至リ名分條理ニ關シ差置レ難キ事ノミ無據御改正ノ儀ニ候說諭ヲ
加ヘ人氣ヲ調和シ之ヲ施行スルコソ執政ノ任ナリ行レ難キ事モ盡力ノ功ニヨリ幾分カ成功アル
者ナリ此段ハ能々諒承有之度支營設立ノ事モ多少ノ手數ニ及ブ事ナガラ公法上差置難キ所ヨリ
其藩保護ノ爲遠大ノ御評議ヲ以テ御着手有之事ニ候蒸氣船下賜撫卹米賜與ノ儀モ厚キ御趣意ニ
應ゼズ筋ナキ故障被申立候テハ不都合ニ可有之不條理ノ申譯ニテハ大臣方ニ向ヒ申解難致旨前
日說諭ノ意ヲ擴充シテ反復諭解シ書面ノ趣ハ同前瑣々タル申譯ノ趣致承知度旨ヲ申聞ク

同月十八日

三名並ニ在勤津波古親方出省再應ノ御說諭ヲ蒙リ御趣意ノ程深ク奉汲受候間蒸氣船及ビ撫卹米
下賜ノ儀ハ御請仕候鎮臺支營御設立ノ段ハ一藩ノ人心ニ關シ清國ニ對シテモ不相濟他日如何ナ
ル難題ヲ受クルモ難計御座候間御用赦被下度旨申立第一號第二號ノ通書面ヲ出ス支營ノ儀ハ此
内ヨリ繼々申述候通り即今難被捨置急務ヨリ御決議相成タル事ニテ此度御着手中ノ要領ニ有之
清國ニ對シ不都合モ有之トノコトナレドモ冊封ノ御請モ致シ東京ニ官員モ在勤セシコトナルニ
此一事ニ限り清國ニ對シ不相濟トノ申立モ承知難致不心得ノ事ニ候勿論分營ヲ置候事今日ニ始

リ候義ニ無之兼テ陸軍省ノ取調モ有之既ニ政府ニ於テハ御内決相成居候故夫等ノ情實ヲ申立有之候テモ御採用可相成義ニ無之候乍去是迄再三示諭ノ上是非トモ御請難仕トノ事ニ候得バ此上何ケ度申入候共同様ナレバ形行ヲ以テ上申イタシ候外無之候就テハ政府ニ於テ如何ノ御沙汰可有之哉難圖拙者ニ於テモ申上ラル、ノ旨趣萬々尤ト不存候故嘆願ノ趣御採用有之候様盡力ハ不相叶候ニ付其段ハ分テ申入置候間可被心得何レ形行ヲ以テ上申可致追テ何分ノ御達シ可有之儀ト存ズル旨申聞ク

同月廿三日

四名呼出シ鎮臺支營ノ儀申立ノ趣上陳致シ置候先日モ申入ル通り申立ノケ條拙者ニ於テモ更ニ至當トハ存ゼズ自ラ何分ノ御達シ可有之候間左様可被相心得其餘ノ件々内達可致各方承知通り積年一定シタル制度ヲ改メ藩ヲ廢シ縣トナサレシモ時勢ノ變遷ニヨリ如此ナラザレバ不相叶所ヨリ御處分爲有之事ニテ數百年人心ニ凝結シタル君臣ノ情義ヲ割キ各藩異議ナク命令ニ從ヒシモ人々不忍ノ私情アリト雖モ時勢ノ沿革ヲ參酌義理ノ大小ヲ識別シテ朝旨ヲ遵奉セシモノナリ琉球ニ限リ藩ニ列セラル、モ一般ノ制度ニ觸レ不體裁ノ儀ナガラ右ハ特旨ヲ以テ其儘被召置差向御着手無之テ叶ハザル事ノミ御施行ノ譯ニ候府縣同一ノ制度ニ被召變度儀ナレドモ舊來ノ習風モ有之一時ニ面目ヲ難改儀可有之ニ付御用捨被爲在適度ニ應ジ改正粗府縣ノ制ニ準ゼラル、

御内決ナリ是等ノ爲人選ヲ以テ官員出張可被仰付且藩内一般明治ノ年號ヲ奉シ年中ノ儀禮等御布達通り奉行可被致刑法ハ國家ノ重事故司法省ノ定律通り御施行ノ筈ニ付刑法取調ノ爲擔任ノ者兩三名上京候様可被取計人才ヲ養育スルハ政務中ノ急要其藩ノ盛衰ニ關スル事ナレバ往々要樞ノ職ニ任ズベキ見込ノ者學事修業時勢通知ノ爲人撰ノ上上京可被申付トノ趣曲折ニ諭達ス琉官曰ク御箇條多端ニ付御箇條書ヲ以テ承知仕候得バ仕合ニ御座候依テ陳述ノ件々第三號ノ通書面ヲ渡ス

同廿八日

四人出省此内ヨリ細々御内達ノ趣謹ンデ御請申上候其内藩治御改正ニ付テハ體裁ハ何卒前從通召置被下度體裁ヲ改ムル事ハ藩王攝政ヘモ申聞サレバ我々共ノ手限ニテハ御請難致旨演述書面ヲ出ス

今日ニ臨ンデハ名分條理ニ關スル事ハ必ズ御改正無之テハ叶ハザル譯ニテ全ク體裁ヲ改ズト云フ事ハ承リ屆難ク候猶又御趣意ヲ參酌評議被致度旨申聞ケ書面ヲ返ス

五月二日

四人出省一昨年モ制度ハ不被召替旨御達相成上下共安心仕居候間何卒體裁ハ是迄通り被召置被下度旨演舌第四號先外務卿ノ口達書ヲ添ヘ前日ノ書面少シク文字ヲ改メ第六號之通り差出ス

此程ヨリ度々御内諭ニ及ビタル件々御請相成候儀モ鮮ナカラズ御説諭ノ詮相立拙者ニ於テモ幸甚ニ候其内藩玉謝恩ノ儀ハ上下ノ分ニ於テモ演説ヲ待タズ輩下ヘ拜趨可有之コソ當然ノ儀ニテ固ヨリ泰然安居セラル、譯ニ有之間敷支營設立藩制改正ノ條モ再三申述ル通り即今難被差置要務ニ付御着手ノ譯ニ有之披見スルニ先外務卿ノ口達書ハ藩ノ一字ニ有之素ヨリ藩マデモ廢セラレ、ト言フニハ無之況ヤ蕃地御征討以來形勢モ押移リタレバ一律ニ難申儀御趣意ノ程貫徹候様内達ニ可及旨分テ太政大臣ヨリ承知ノ上御内諭ノ儀ニ候處要領ノ件々ニ至リテハ筋ナキ故障ノミヲ以テ陳述御請不被致御説諭申候詮モ不相立全ク拙者ノ不行届ヨリ情義徹底不致儀ニ可有之ト職掌ニ對シテモ不相濟残念ノ次第ニ候各方モ藩王ノ命ヲ受ケ御召ニ應ジ上京ノ事ナレバ時勢至當ノ事ナラバ快ク御請致サレ奉命ノ任ヲ全ウセラルルコソ當然ナルベキニ斯マデ御手厚キ御趣意ヲ露程モ汲受ナク依然タル從前通り心得ニテ瑣々タル事ヲ拾ヒ集メ申立ラル、儀一圓了解致シ難ク候少シハ前後ノ勘考モ有之藩王ノ爲行先ノ事迄モ注意アリ度者ナリ今日迄ノ成行ヲ以テ上申ノ積ニ候處未ダ情義ヲ盡サル事モ可有之哉ト厚意中ヨリ今一應存慮ノ程申入候何様被想得候哉承知致シ度

琉官曰ク退テ評議ノ上御返答可申上候間兩三日御用捨被下度

初メ御内達ニ及ビシヨリ往復ノ間時日遷延遂ニ今日ニ至リ大臣ニ對シテモ無申分仕合何レ明日

ハ上陳不致候テハ不相叶儀ト存候必ズシモ別ニ答酬ヲ要スルニモ非ズ今日御内諭ノ趣ニ依リ更ニ評議ノ廉モ候ハ、明朝マデニ承知致シ度

琉官曰ク承知仕候

同日

午後四人私宅ヘ入來藩王上京ノ條ハ私共不調法ニテ御内諭ノ趣分明ニ諒得仕兼今日迄判然タル御答不申上奉恐入候右ハ重事件ニテ清國ニ對シテモ差障リ有之遠方ヘノ旅行ニ付テハ藩内一般ノ人心モ安ンジ間敷殊ニ藩王ハ兼々病身ニモ候間何卒此儀ハ御用捨被下度

以テノ外ノ申分ト存候定テ各方ノ心得違ニ可有之當輩ノ人ト雖モ恩義ヲ受クレバ往テ謝スルハ通常ノ禮ナリ況ンヤ君臣ノ間ニ於テヲヤ莫大ノ恩義ヲ荷ヒナガラ事ヲ左右ニ托シ相拒マル、コソ奇怪ナリ昨年征臺ノ舉ヨリ清國談判ノ結局ニ至ル迄不容易國家御大事ニ及候モ畢竟琉球人民ノ爲ニ起リ候事ニアラズヤ右御手厚御取扱ノ次第ハ藩王初メ汲受ラレタル段申サルレドモ定メテ通徹致シタル儀ニ有之間敷往時ト變リ航海ノ道モ開ケ數日ヲ經ズシテ坐ナガラ着京ノ事ニ候藩王全クノ病身ナラバ其職ヲ奉ジ居ラル、道理モ無之右様ノ申立ニテ御用濟相成者ト被存候哉ノ旨申聞ク

琉官曰ク難有御趣意ハ藩王初メ實ニ深ク汲受奉リ候得共何分清國ニ對シ申譯無之ニ付御禮等改

テ不申上儀ニ御座候何分吟味ノ上御返答可申上候間兩三日間御用捨被下度
報上ノ時日ヲ過シ不都合ノ事ニ候得共其爲ニ一日ハ用捨可致候間明後日ハ必ず返答可被申候
琉官曰ク承知仕候

同 三日

四人出省支營御設立政體御改正ノ儀ハ我々共迄ニテハ逆モ御請仕ル權無御座候間藩元評議ノ上
御答へ申上度旨演舌第六號ノ通書面ヲ出ス依テ第七號ノ通說諭シ承知ノ證ヲ出サシム

同月四日

琉官四名出省藩王爲謝恩上京ノ儀猶又評議仕候處就病氣御斷申度趣ヲ以テ別紙號外ヲ通書面ヲ
出ス

此書面ノ御甚不都合ノ次第ニ候幾回モ申入候不御容易高恩ヲ荷ヒ書面ヲ以テ御禮申上ルナドト
ハ君臣上下ノ分ヲ辨ヘザル譯ニ候如此申立ヲ拙者ヨリ上申イタシ候儀不相調旨ヲ以テ差返ス
實體所勞ニテ不得止御理リ申上候義ニ候間幾得ニモ事情御洞察被成下此一條ハ意願相達候様偏
ニ奉難願候

情實ヲ察セザルニアラズ候得共不勘辨ノ書面何ケ度承知候テモ致落手候儀不相叶候

第一號

琉球江分營可被召立ト之一條再往御内達之趣委曲承知仕候此上願申上候儀恐入候得共先達テモ
申上候通周廻僅百十里程ノ所兵器ヲ以テ外憂ノ防可相調丈ニテ無之外國人渡着ノ節ニ專禮儀ヲ
以致應對是迄無事平穩相濟來候分營被召立多人數入込相成候ハ、人心致疑惑候段者不及申御内
地トハ相替遠隔ノ小邦色々事煩敷成立可申哉殊更本藩之儀

皇國支那江奉屬御兩國ノ御蔭ヲ以テ一國ノ備相立上下萬民致安堵居候故

皇國御奉公支那江之進貢ハ本藩重大ノ規模萬世萬代不相替忠誠ヲ盡シ度本願御座候處分營被召
立候ハ、支那ニ對シ何分申披相立間敷克御同察被爲在候數百年來親切ニ被取扱恩義厚キ國柄自
然都合取損候テハ信義不相立段ハ勿論何様ノ難題成立可申哉旁以至極胸痛仕居申候外憂御懸念
ノ處モ承知仕候得共各國ノ船ニ渡來之節ニ御在勤官員衆御應接被成猶事柄次第御本省江得御指
圖御取計被成事ニテ外國ヨリ侵侮ノ憂ハ有之間敷哉ト奉存候間前文旁ノ情實被遊御賢察何卒是
迄ノ通被召置被下度幾重ニモ奉懇願候事

亥四月十八日

第二號

支那ヨリ償金ノ内ニテ琉球難民江米拜領且蒸氣船可被成下トノ事件先達而御斷申上候處再重分テ御内達之趣承知仕此上何角難申上奉畏候事

號 外

- 一、同治皇帝薨御之段ハ於琉球者不相分上京ノ新聞紙ニテ相知申候事
- 一、清國代替之節ニ琉球江相知次第其當年慶賀使差遣申候事

亥四月廿七日

第三號

- 一、從前之職制可成體裁ヲ改メ府縣一致之制度ニ可準事

- 一、藩治職制適宜改正ノ爲人撰ヲ以テ官員赴任ノ事
- 一、明治之年號ヲ奉年中之儀禮等御布告通奉行之事
- 一、刑法ハ司法省之定律通施行可致右取調之爲メ擔當之者兩三名上京之事
- 一、學事修業事情通知ノ爲人撰ノ上少壯ノ者拾名上京之事

第四號

- 一、外務省ヨリ浦添親方與那原親方御用ニ付罷出候處伊知地貞馨殿森山茂殿ヨリ別紙三司官江之御書附被差出此様ニ書附被差出候儀不容易事ニ付候得共琉球方爲可致安心外務卿別段之御吟味ヲ以テ被相渡候間難有可致承知旨御口上御取添御渡相成候事
- 一、藩王閣下昨年特命ヲ以テ冊封ヲ賜リ永久之藩屏ト被仰出候ニ付テハ朝廷ヘ抗衡或ハ殘暴之所業アリテ庶民離散スル等ノ事アルニ非ザルヨリハ廢藩之御處置ハ固ヨリ有之間敷候
- 一、藩王教育向キ行届キ刑措數千年之由其任職ヲ不辱感心之事ニ候益庶民愛護永年被致貫徹度事ニ候

一、先年於其藩各國ト取組候條約原書被差出候ニ付向後藩難ヲ醸シ又ハ不爲ニ相成取計ハ決テ無之候

一、佛米蘭ノ外其藩ニ於テ條約不取結國ト雖 朝廷ニ於テ條約既濟之各國船艦其藩内江渡來ノ節ハ當省ヨリ出張セル官員之指令ニ遵ヒ佛米蘭ト結ベル條約ニ照準シ厚ク處置可被致候
右之件々外務卿副島種臣殿ヨリ致承知候爲御心得此段申述候也

外務省六等出仕 伊地知貞馨 在判

明治六年九月廿日

外務大丞 花房義質 在判

伊江王子殿

宜野灣親方殿

川平親方殿

一、先達ヲ被成下候御書附ニ國體政體永久不相替トノ御趣意委敷難相分候ニ付外務卿副島種臣

殿同六等出仕伊地知貞馨殿江尋上候處府縣ハ政體旁

朝廷ノ御任藩ト申候得者惣テ藩王ノ任ニテ御書附相見得候通琉球永久ノ藩屏ト被 仰出候ニ付テハ

朝廷江抗衡或ハ殘暴ノ所業等アルニ非ザルヨリハ廢藩ノ御處置ハ固ヨリ有之間敷候ニ付國體政體永久不相替所ハ相含且清國交通向モ矢張是迄ノ通被仰付候段承知仕候ニ付右之趣ハ藩王江モ致知達候様仕度申上候處彌其通可宜段被 仰達候事

癸酉十月五日

一筆致啓上候然ハ藩王儀特命ヲ以テ冊封ヲ賜リ永久ノ藩屏ト被 仰出候付テハ

朝廷江抗衡或ハ殘暴ノ所業アリテ庶民離散スル等ノ事アルニ非ザルヨリハ廢藩ノ御所置ハ固ヨリ有之間敷且藩王教育向行届刑措數十年ノ由被聞召益庶民愛護永年致貫徹候様外務卿ヨリ御承知被成候段御書附被成下尤右通廢藩ノ御所置ハ固ヨリ有之間敷候ニ付國體政府永久不相替且清國交通向モ是迄ノ通被 仰付候段御口達ノ趣等藩王始諸官委曲拜承仕誠ニ以テ難有仕合安堵仕申候就テハ永年國體政體不相替益教育向行届庶民致愛護候様可仕候右御受御禮爲可申上如斯御座候恐惶謹言

三月二十七日

疏官上京始末

池	浦	宜	伊
城	添	野	江
親	親	灣	王
方	方	親	子
		方	

外務大臣 花房 義 質 様
外務六等出仕 伊地知 貞 馨 様

第五號

一、從前之職制可成體裁ヲ改メ府縣一致制度ニ可準且藩治職制適宜改正ノ爲御內地ヨリ人撰ヲ以テ官員赴任可致被 仰付段御達之趣承知仕候然バ琉球小邦丈御內地通ニ者難相行所ヨリ國體政體永久不相替是迄通被 仰付置度去々年奉願其通被 仰付藩内一統令拜承難有安替仕居候次第ニ御座候處體裁改革被 仰付候テハ人心致疑惑國家相治リ申間敷ト至極心配仕居申候

間事ニ依リ可相改儀ハ調郡方ヲ以テ御渡海之官員衆得御差圖候様可仕候間何卒體裁ハ不相替様被 仰付度奉願候

一、新年紀元節天長節等之祝賀御布告通遵奉可仕旨御達之趣承知仕彌其通遵奉仕可申候
一、刑律取調トシテ擔任ノ者兩三名且學業及ビ形勢熟知之爲少壯之者十名位人撰ヲ以テ上京可致トノ趣承知仕候歸帆之上人數人體等見合上京爲致候様可仕候

亥五月二日

第六號

琉球へ分營被召立且從前之職制可成體裁ヲ改メ候様トノ事件御用捨之方再三奉願候得共分ケテ御内諭之趣承知仕候此儀至テ不容易事ニテ私共迄ニテハ取究難成至極及當迫居申候間何卒歸帆ノ上國評ヲ以テ何分申上候様被 仰付被下度奉願候事

五月三日

第七號

琉官上京始末

其藩ノ情實ハ。政府ニ於テモ。深ク御洞察有之事ナガラ。此程ヨリ度々申入候通。當時勢ニ立到リ御處分無之テ不叶件々ハ無餘儀御着手相成譯ニテ。拙者ニ於テモ。申立之趣條理相立候廉有之候ハ、飽迄致保護度存慮ニ候得共。從前ノ舊習ニ泥ミ。目前ノ小得失ヲ以テ。陳述有之候ニ就テハ。大臣ニ對シ。取成ノ詞無之。何様之御達ニ相成バ。難計候得共。此上ハ御裁決ニ任ル外之無ト存候。屢情實ヲ陳言シ。書面ヲモ差出シ置候間御採用可有之儀ト。必ズ安心ハ被成間敷。此段ニ能々可被相心得候

右承知仕候

亥五月四日

池城親方
津波古親方
與那原親方
幸地親雲上

差返シ候書面

臺灣御征伐被 仰付候爲御禮藩王上京可致旨御達之趣承知仕候征臺之儀厚 思召ヲ以被 仰付

藩王始一同深甚難有次第奉存候誠ニ恐多御座候得共藩王事脱體心氣弱リ常ナラズ事機ニ觸候得者驚動強ク殊ニ至此頃者心病差發不斷不寢之煩等モ有之事ニ而遠路ノ航海之儀何分ニモ不相調段者勿論右之次第被致承知候ハ、何様之可及煩惱哉ト必至胸痛仕居申仕合御座候間偏ニ御仁卹被召加何卒書翰ヲ以テ御禮申上候方ニ被 仰付被下度奉懇願候事

亥五月四日

琉球藩上京官員江說諭往復之顛末取調伺出候處御指令之趣致承知候然ル處條欵處分之儀ハ官員派出仰付候上緩急見計可取計云々御達ニ付猶又着手順叙之見込左件々申上候

一、清國關係之事ハ都而脈絡致候儀故下之四ヶ條共御廢止之命令書派出之官員江御下渡於藩元嚴達爲致其内加慶使派遣隔年朝貢之二件ハ其期限モ差迫リ不可差置急務ニ付御請之有無ニ不拘斷然差留可然哉在福州琉球館及ビ藩王代替ニ付冊封廢止之二件ハ時期切迫ト申ニモ無之候間廢徹屢速之間ハ一時該藩之都合ニ任セ可然哉

一、藩王爲謝恩上京之件ハ派遣之官員ヨリ反復說諭承伏爲致度候得共若就病氣事實不得止節ハ延期間濟差向親族名代ヲ以テ上京爲致可然哉

一、鎮臺支營設立之儀ハ既ニ御達濟ニ付陸軍省派出之士官當省派遣之官員ト同時出張諸事協議ヲ遂候様同省江御下命有之度

一、明治之年號ヲ奉シ年中之禮式御布告通遵奉之件

一、刑法之儀司法省定律通奉行爲致候ニ付差向取調ノ爲擔當之者上京之件

一、少壯之者學事修業時世通知之爲上京之件

前三ヶ條御請仕候得共遲緩之琉人實際猶豫モ圖難候間派遣之官員ヨリ督責速ニ履行可爲致候

一、藩政改革之儀モ御請仕居候得共猶又說諭ヲ加ヘ適度ニ應ジ着手爲致度布置之體段ハ豫メ御

治定之御旨趣派出之官員江爲心得度候ニ付御沙汰有之度依テ爲御參考別紙ヲ以相伺候

右件々至急御下命有之度疏藩之儀兼而上申仕候通名分條理而已ヲ以テ一時ニ致變革候儀ハ至難之情實有之候ニ付先藩治之體面ノミヲ改メ事務ヲ各官ヘ配當セシメ現實之取扱振ハ從前之通据置其餘ハ一切不問ニ置キ漸次人氣之折合ヲ見定メ順叙ヲ追ヒ着手致シ度存候
此段相伺候也

明治八年五月十三日

內務卿 大久保利通

太政大臣 三條實美 殿

伺之通

明治八年五月十八日

太政大臣
三條實美
印

(別紙)

琉球藩職制

一藩王

一等官

勅任官トス

一大參事

一員

四等官

一權大參事

一員

五等官

一少參事

二員

六等官

一權少參事

二員

七等官

以上奏任官トス藩議ヲ以テ人撰具狀ノ上宣下アルベシ

一大屬

八等

一權大屬

九等

一中屬

十等

一權中屬

十一等

一少屬

十二等

一權少屬

十三等

一史生

十四等

一藩掌

十五等

以上判任官トス藩議ヲ以テ相命シ候上届出可シ

一等外 一等 二等 三等 四等

右俸給ハ藩費ノ適宜ヲ以テ給與スベシ

五月十二日受官省

五月十日達

二局第千五百三課八十五號

明治八月五月八日奉
同月同日出

中錄河原田盛美

河原田

五月十日判決

丞 武井

第二局長 正臣

第三課長 章

錄 種島

第三局長 印

史官 五月十日 一局三課達濟

琉球へ鎮臺分營被置候儀 史官

琉球へ鎮臺分營被置候御達書引替之儀ニ付史官へ御答案

琉球藩へ鎮臺分營被置候儀ニ付同藩へ之御達書御回シ相成候處右ハ別段御改之上御差回ニ付最前之分御返却致候間御落手有之度此段御回答申進候也

八年五月 日

内務大少丞

史官御中

一萬千四百八ノ内

二局

琉球藩へ鎮臺分營被置候儀ニ付昨日同藩へ之御達書御回シ申候右ハ別紙ト御引替最前之分御返却有之度此段及御掛合候也

八年五月八日

史官

内務大少丞御中

琉球藩

琉官上京始末

其藩内保護之爲第六軍營熊本鎮臺分遣隊被置候條此旨相達候事

明治八年五月七日

太政大臣 三條 實美

李鴻章訪問私記

明治十四年十二月十四日

竹添進一郎

本月三日黎庶昌來館ノ節、李鴻章ノ幕賓朱端然案内致シタルニ付、余ヨリ先般本國ヨリ差廻シタル鐵道費調査書ヲ李中堂ニ呈致シタルニ、今以テ何等ノ御問合セモ無ク、余ハ明年滿期ニ付歸朝ノ筈ナリシ處、今度更ニ西京大津間新築鐵道費ノ調査書ヲ送來リタレバ、李中堂右調査書ヲ入用ナレバ、委曲面會ノ上陳述致シ度、仍テ李中堂ノ存慮ヲ貴下ヨリ伺取ラレタキ旨申聞置タルニ、三四日ヲ經ルノ後朱端然ヨリ書狀ヲ以テ李中堂來ル十四日午前十時衙門ニ出頭ノ由、仍テ同日午後一時迄談話致シタリ。其大意左ノ如シ。

最初應接ノ間ニ於テ李鴻章ト相並ビ談話セリ。

吳啓太傍ニ立テ通辯ス。

李 宍戸公使ハ再ビ來航スルヤ。

竹 何レ來航ナカルベシ。

李 今北京ニハ誰人有リヤ。

竹 代理公使有リ田邊ト云フ。

李 田邊ハ何ノ官ナルカ定メテ小官ナルベシ。

竹 否ナ卑官ニハ非ラズ、四等官ニシテ參贊官也。

李 參贊官ハ暫時代理スルハ當然ナレドモ、長ク代理スベキモノニ非ルベシ。一年近ク代理ノミニ止ルハ體ヲ成サズ。

竹 各國皆代理ヲ置クノ例アリ、體ヲ成ササルノ理ナシ。

李 中國ハ大國ナルニ代理ヲ置クハ如何。

竹 國ノ大小ニ論ナク同等國ニ在テハ交際上ニ差異有ル事無シ。今日中國ニ別段ノ用事無キ以上ハ代理ニテ十分ナルベシ。

李 宍戸ノ歸リシハ遣リ損ヒナリ。多分貴國ニテ革職セラレタルベシ、未ダ官ニ在リヤ否ヤ

竹 宍戸公使ニハ少シモ遣リ損ヒ無シ。總理衙門ヨリ一旦結成シタル約定ヲ違背ニ相成リタルニ付、公使ノ引上ゲニナルハ當然ナリ。右ハ中堂ノ熟知スル所、而シテ右約定ヲ變違セ

シハ中堂ノ横矢ヲ入レラレタルニ由ル。仍テ予ハ中國ヲ以テ條理ナシトシ、且ツ中堂ニハ尤條理ナシト思考ス。

李 約定ハ予ノ破ル所ナリ。然レドモ決シテ不條理ニ非ラズ。右ハ前年閣下ニ向テ詳細ニ明言セリ。閣下ハ之ヲ記憶セザルカ。

竹 一々記憶セリ。然ルニ彼ノ時予ヨリ内命ヲ奉ジテ中堂ニ内話セシ廟議ハ根元グラント將軍ヨリ中堂ト商議ノ末、右ノ辨法ナレバ中堂ニモ異議ナカルベシトノ事ニ付、我政府ハ其意ニ隨ヒタルモノナリ。然ルニ中堂ハ予ニ向ツテ頻リニ不承知ヲ御唱ヘニ付、予ノ考ニテハ中堂ノ内心ハグラント將軍ト同一ナレドモ、予ガ一個ノ書生ナルヲ以テ、態ト機密ヲ御明シ無之事ト推察致シタリ。

李 閣下實ニ誤レリ。閣下ニ承知セザルモノヲ決シテグラントニ承知スルノ理ナシ。貴政府ノ議ハカク迄ニハ無カリシヲ、閣下ヨリ申込而シテ宍戸ヲ作り立テ來レルモノナリ。實ニ閣下ノ如キ惡ムベキ人物ナシ。

竹 (此時笑テ云)予ハ中堂ノ位地ニ在ラズ、安ゾ廟議ヲ左右スルヲ得ン。彼ノ辨法ハグラント將軍ノ說ニ出デタルモノニシテ、我政府ハ中堂ノ必ラズ肯ズル所ト相信シタルモノナリ。抑々中堂ニハ我國ニ何ノ怨有リテ條約モ各國同様ノ便利ヲ與ヘズ。今度ノ談判ノ如キモ折

角和協ニ至リシヲ御破リ被成タルヤ。

李

予ハ貴國ニ怨ナシ、總テ閣下ガ惡キナリ。余ハ最初ヨリ不承知ノ事ヲ閣下ニ明言シタルニ非ラズヤ。一體貴國ノ談判實ニ條理ナシトス。予ガ不承知ナル以上ハ、例ヘ總理衙門ニテ議決スルトモ、天子ヨリ必ラズ我ニ御下間有之事故、予ガ出來ヌト云フ事ハ決シテ出來ル事ナシ。

竹

予ハ中堂ニヨリ機密ヲ御明シ無之事ト相考ヘ、我政府ニハグラント將軍ノ言フ處即チ中堂ノ意ナリト存ジタル處、右ハ大ナル意味違ヒナリ。

李

予ハグラントト辦法ヲ談ゼシ事ナシ、尤日清ノ兩國ハ和好セザル可カラズ、因テ收局ノ速ナルヲ望ムトノ主意ヲ日本ヘ渡航ノ上ハ、日本政府ニ申通ジ有之度トノ事ヲ申聞ケタル迄ナリ。

竹

グラント將軍ノ説ク處ハ、中國ニテ宇内ノ形勢ヲ通洞シ亞細亞ノ政略ニ注意スルハ、實ニ中堂一人ナリ。彼ノ琉球ハ東海ノ門戸ナルヲ以テ之ヲ日本ニテ專用スルトキハ、中國ノ咽喉ヲ扼スルノ姿ナルニ付、中堂ハ政略上ヨリ大ニ憂慮有之事故、例ノ辦法ナレバ中堂ニハ異議ナク承知有ルベシトノ大意ナリ。

李

政略上ノ事ハ話シタリ、辦法ノ事ハ嘗テ談ゼズ。

李

閣下ハ學問宜クシテ、心中ハ大ニ惡シ。閣下ハ予ガ決シテ承知セザルヲ知り、隨テダシヌケニ總理衙門ト談判ヲ爲シ、之ヲ結局セン事ヲ謀リ、宍戸ヲヒツバリ進京セリ、閣下ハ予ノ不承知ヲ明言セシヲ信ゼズシテ、右ノ如キ舉動ヲ爲セリ。閣下ハ實ニ惡ムベシ。予ガ心ハ鏡ノ如ク明白ナリ。十年前兩國條約ヲ結ブ時、總理衙門ハ不承知ナリシカドモ、予ハ深ク日本ト和好ヲ結ブヲ願フ故ニ獨リ奮テ之ヲ斷行セリ。今日ニ至ルマデ其心ハ毫モ變ズル事ナシ。何ゾ和ヲ破ルノ意有ランヤ。然ルニ我留守ヲ出シ抜ケニ宍戸ヲ引テ北京ニ入レリ、閣下ノ心中實ニ惡ムベシ。

竹

小生ハ中堂ノ意ヲ誤解セシ罪アルヲ以テ幾重ニモ譴責ヲ受クベシ。併シ宍戸公使ハ中堂ヲ出シ抜キタリトカ、我政府ハ中堂ト談判スルヲ好マザル等ノ御疑念有ルニ於テハ以テノ外ノ事ナリ。之ハ辯明セザルヲ得ズ。宍戸公使我政府ノ命ヲ受ケ、中堂ト商議ノ積ニテ來津有之タル處、其砌折惡ク中堂ハ不在ニシテ、御歸津ノ期日モ分リ不申ニ付、不得已一旦進京シテ、遂ニ中堂ト行違ニ相成リタリ。然ルニ中堂ハ文華殿大學士ナルヲ以テ、右ノ談判ニ付テハ一々總理衙門ヨリ中堂ニ打合セ有之事ト、宍戸公使ニハ存ジ込被居タリ。

李

予ハ多忙ナルヲ以テ、總理衙門ヨリ一々掛合ハ無之、隨テ最初ノ談判ハ一切承知セズ、總理衙門ヨリ奏問ノ上、天子ヨリ初メテ下間有リタルナリ。仍テ予ハ初ヨリ不承知ノ事ヲ

竹添ニ答ヘ置タル旨ヲ叙ベ、勿論此事ハ到底不承知ナリト伏奏セリ。

竹 是ハ案外ノ事ヲ承リヌ。我政府ニテハ中堂ハ文華殿大學士故、廟議ニ御關係無キ事ハ有之間敷ト相考ヘ、隨テ今度總理衙門ノ約定モ中堂御承知ノ上ニテ成リ立チ、而シテ其ノ違變ニ至リシハ中堂ノ横矢ニ出デタルニ付、實ニ中堂ノ處置ハ條理無之儀ト一途ニ存ジ込ミタルナリ。

李 予ハ實ニ最初ノ定約ヲ承知セズ、其砌兎ニ角閣下ヨリハ予ニ相談可有之處、一切其ノ事ナクシテ出シ抜ケニ進京セシハ尤モ惡ムベシ。故ニ予ハ益々其ノ約定ヲ破毀セザルヲ得ズ

竹 中堂ノ意此ノ如クナレバ、到底致シ方ナシ。

李 其後北京ニ往來スルヤ。

竹 久シク進京セズ。

李(笑テ云) 安戸歸朝ノ上ハ、進京スルニ及バザルベシ。

竹(亦微笑シテ云) 小生明年既ニ三年ノ滿期ナリ、例ノ如ク中堂ヨリ御叱リヲ受クル故早々逃ゲ歸ラント欲ス。

李 閣下ノ就任シタルハ去年ニ非ラズヤ。

竹 否ナ、一昨年ナリ。

(是時朱端然傍ヨリ一昨年就任セシヲ證明セリ)

李 ナル程一昨年ノ事ナリシ。

李 閣下ハ實ニ腹惡シキ人ナリ。予ヲ出シ脱キ安戸ヲ突ツケ事ヲ結バント謀レリ。仍テ予ハ閣下ノ任官セラレシヲ惡ミ、閣下ニハ其後ウケアワザリシ也。併シ閣下歸國ニ相成ラバ實話ヲ爲スベシ。此等ノ事予ガ承知セザル以上ハ決シテ出來ザルナリ。然ルニ予ハ不相替兩國ノ和好ヲ冀望スルニ切ナリ。就テハ安戸引上ゲタル後、外國人ヨリ兩國ノ和好ハ破レタルカト頻リニ相尋ヌルニ付、予ハ否ナ子等ノ見ル通りニテ何モ兩國不和ト云程ノ事無之ト答ヘ居ルナリ。

竹 併シ中堂今日ノ如ク内心怒ヲ懷テ、從前ノ議論ヲ御主張ニ相成ラバ、到底纏ルノ見込無カルベシ。

李 否、怒ルニ非ラズ、日本ニ條理ナキヲ以テ承知セザルナリ。孟子云以レ力服人者覇。貴國ハカヲ以テ人ノ國ヲ滅ス覇ト云ベシ。中國ハ徳ヲ以テ人ヲ服セント欲ス。

竹 人ノ國ヲ滅シタルニ非ラザルナリ。琉球ハ從前ヨリ我ノ屬地ニ有之處、曖昧ノ地ニ位スルヲ以テ、萬々一他國ヨリ占奪セラル、事アルニ於テハ、日本ヨリモ中國ヨリモサツトウ出來ザルトノ懸念有之處ヨリシテ、之ヲ廢藩シ以テ其所屬ヲ明白ニセシ迄ノ事ナリ。夫故

前琉球王ハ華族ノ内ニ列シ樂ンデ東京ニ留在セリ。

李 閣下ハ中國ノ書籍ニ涉リナガラ、琉球ヲ中國ノ屬國トハ思ハザルカ。

竹 中國ニ朝貢セリ、併シ夫レハ儀式迄ノ事ナリ。

李 朝貢ノ儀式ヲ爲スハ、即チ屬國ナリ。安南朝鮮モ亦タ進貢スルノミ、而シテ安南ノ東京ハ佛人モ敢テ之ヲ滅スルヲ爲サズ。

(余此議論ニハ取り合ハズシテ云ク)

竹 日本ハ小國ナリ、○○○○○○○○○○。然ルニ我國民ニ限り之ヲ疎逖セラ
ル、ハ、以レ德服レ人ノ舉動ニ非ザルニ似タリ。

李 否。各國ノ條約ハ敗戦ノ後脅制セラレタルモノニシテ、日本トハ親睦上ノ交際故兩國對
待ノ條約ヲ結ビシモノナリ。

竹 名ハ對待ナレドモ、其實ハ然ラズ、我國ハ各國ト中國ヲ待遇スルニ、毫モ差別ナクシテ
中國ハ各國ニ許スモノヲ、日本ニ許サズ、此豈對待ト云フベケンヤ。而シテ今我ヨリ請求
スル所ハ只我商民ノ中國ニ於テ、外國人ニ倚賴スルニ非ザレバ通商スル能ハズシテ、西人
ノ爲メ其利ヲ占有セラルノ憂ヲ免カル、ヲ望ム丈ケノ事ナリ。

李 夫等ハ如何様トモナルベシ、琉球ハ實ニ惘然ノ至ナリ。貴國ヨリ舊ニサヘ復スレバ中國

ニ於テ異義ナシ。然ルニ貴國ハ之ヲ分割セントス。中國ハ實ニ地ヲ取ルノ心ナシ。

竹 我國ノ處置ハ後患ヲ禦グ政略ニ出デ、即チグラント將軍ノ主意ニ原クモノニシテ、我國
ヨリハ中國ニ於テ御同意ノコト、信ジ居タリ。然ルニ琉球王ヲ舊ニ復セヨトノ御注文ニ至
テハ、實ニ難儀ノ至ナリ。試ニ地ヲ易ヘテ勘考セラレタシ、我國ニハ既ニ今日ノ通り運ビ
來リ居ルモノヲ、只今舊ニ復スルノ儀ハ政體上ニ於テモ決シテ出來ザル譯ニテ、到底我政
府ニシテ承知ナリ難シト愚考トス。

(此時李鴻章ハ嘆息ノ聲ヲ帶ビ、)

李 左スレバ日本ト和好ヲ全フスル事出來難シ。

是ニ至リ余ヨリ鐵道ノ事ヲ話シ出シタル處、李鴻章ヨリ手數ヲ煩シタル禮辭ヲ申述ベ、夫ヨリ
書室ニ案内シ茶酒ノ供アリ。

余ヨリ鐵道調査書ヲ示シ、概略ヲ申述ベタル處、李鴻章ヨリ何卒漢文ニ譯シ吳ル、様倚賴シ、
且ツ西京大津間ノ鐵道ハ日本人ニテ建築セシヤヲ相尋ネタルニ付、然リト相答シ處、若シ中國
ニ於テ實地ニ着手スルコトアラバ、日本ヨリ工人ヲ借り受ル事出可申哉ト相尋タレバ、余ヨリ
我政府ニ御懸合ニサヘナレバ、必ラズ差出スナルベシト返答セリ、李鴻章ハ満足ナル顔色ニテ、
左スレバ西人等雇入セズシテ出來ル儀ニテ實ニ結構ノ事ナリト云ヘリ。

夫ヨリ書藉ノ事ニ談及シ、其末余ヨリ拙者ノ左傳註釋不日脱稿スルニ付、其節ハ大序ヲ願度旨申述シ處、李鴻章云フ、琉球ノモツレアル以上ハ兩心和セズ、他日收局シテ兩心相和シタル上ハ相認ムベシ。李鴻章因テ筆ヲ取り解鈴人は繫鈴人ノ七字ヲ書キ予ニ示セリ。予笑テ云、何卒此句ヲ扁額ニ御認被下タシ。李モ亦笑ヘリ。

竹 一昨年中堂ト第三次ニ辯論セシ筆談ハ御渡シ無之、何卒今度拜領致シタシ。

李 アレハ其ノ節總理衙門ニ差廻セリ、因テ手許ニ無シ。

竹 中堂ヨリ天子ニ伏奏相成タル草稿ヲ拜見ハ出來申間敷ヤ。

李 奏間ノ大意ハ、自分儀從前ヨリ不承知ノ趣ヲ貴下ニ申聞置タル通ニテ、到底不承知トノ旨ヲ開陳セリ。

竹 不苦バ拜見致シタシ。

李 別ニ大事ナル件ヲ記載セリ、故ニ閣下ニ見セ難シ。其内ニ若シ和ヲ破ル時ハ我親ヲ兵ヲ引テ進戰セント明言セリ。併シ予ハ今日ニ在テモ十年前ト毫モ替ル事ナシ。日本ト和好ヲ厚クスルハ十分ニ冀望スル所、素ヨリ閣下モ諒知スル所ナリ。然ルニ予ニ謀ラズシテダシ拔ケノ舉動有之タルヨリ終ニ此ニ立至レリ。若シ收局妥結ニ至レバ予ノ心始メテ開豁ナルヲ得、予ガ是迄ノ親切ヲ貴政府ニテ酌取リニナラバ、少シハ中國ニ讓ル所アルベシ。

竹

中堂ノ固執セル主意ニテハ、纏ル見込無シ。
(李鴻章ノ音聲モ低ク染々タル話ニ相成タリ。)

李 纏マラス事ハ無シ、如何様トモ話シ合付クベキナリ。

又云、此ノ事兩國ノ和好ニ係ルヲ以テ、改テ閣下ニ說話スベシ。各國ヨリ予ニ向テ頻リニ仲裁ヲ申入ル、ト雖モ、予ハ之ヲ欲セザルナリ。予ハ兩國ノ和好ヲ望ムニ切ナルヲ以テ、親ラ此局ヲ了結セン事ヲ冀フ、外國人ハ好意ヲ以テ仲裁ヲ望ムニハ非ラザルナリ。閣下歸國ノ上ハ詳細ニ予ノ真情ヲ貴政府ニ通報アリタシ。

竹

中堂ノ主意ヲ我政府ニ述ブルモ到底無益ト存ズ、何トナレバ今日ハ琉球王ヲ舊ニ復スル儀ハ、政體上ニ於テ決シテ出來ル譯無シ。其上我政府ハ中國ヨリ御違約ニ相成タルヨリシテ、琉球之件ハ既ニ我國ノ所置ニ御任セニ相成タル事ト確信シ居ル事ナレバ、我國ヨリ再ビ此件ニ付、商議ニ及ブコトハ有之間敷ト信ズ。

李

決シテ中國ヨリ任セタルニ非ラズ、貴國ヨリ引上歸リタルモノナリ。予モ琉球ヲ元ノ如ク復封セント望ムニ非ラズ、琉球ニ付テハ貴國ヨリ既ニ着手ニ相成タル土地モ有之事ナレバ、其等ノ處ハ一切關係セズ、只小サクトモ琉球王ヲ置ク丈ケヲ望ム迄ノ事ナリ。隨テ從前總理衙門ノ談判ハ悉皆取り消シ、宍戸公使再航アリテ更ニ辨法ヲ商議アリタシ。宍戸モ

短氣ノ人ナリ、立腹シテハ宜シカラズ、何トゾ注意アリ度。尤モ別人ヲ貴國ヨリ派出スルニ至レバ大ニ仕惡シ。宍戸再航シテ收局ニ相成ル時ハ宍戸ノ體面モ總理衙門ノ體面モ皆宜シ。此事サヘ收局スルニ於テハ其他附屬ノ事件ハ容易ニ纏マル話ナリ。

竹

此件ハ總理衙門ノ違約ニ出タルモノニシテ、我國ヨリ手ヲ付ル譯ハ有之間敷ト存ズ。

李

此事ハ宍戸モ惡シ、其次ニハ崇厚モ惡シ、双方ノ體面ヲ全フスルニハ宍戸再航シテ收局スルヲ尤モ善シトス。崇厚ノ條約ノ如キハ一旦露帝ノ批准ヲ經タルモノナレドモ、不都合アリシ處ヨリ曾紀澤ヲ撰ンデ派出シ、夫レサヘモ纏リタリ。宍戸ノ引上ゲタルハ實ニ小事ナリ。因テ双方ヨリ今迄ノ文書ヲ繳消シ、悉皆無キモノニ付スベシ、返ストモ外國人ニ仲裁サスルハ殘念ナリ。

竹

兩國ノ意味大ニ行違ヘリ、中堂ハ日本ヲ條理ナシトシ、日本ヨリハ中堂ヲ條理ナキモノトス、然レドモ中堂ニモ御讓リ無キヲ得ズ。

李

勿論讓リモコラヘモスベシ、併シ琉球一件ニ付テハ復封ノ外ニハ承知ノ路ナキナリ。更ニ閣下ノ爲メニ實話ヲ述ブベシ。今度ノコトハ予一人ノ不同意ニ止マラズ。右ハ總理衙門ヨリ奏聞ノ上、天子ヨリ各總督巡撫ヘ皆々下問アリ。然ルニ各督撫不殘ガガヤト不同意ヲ言出セリ。夫レ故總理衙門ハタマラズシテ遂ニ違約ニ及ビタルナリ。併シ予ノ言フ如ク貴國ヨリ所置スルニ於テハ、督撫ヨリ如何程不同意ヲ鳴ラストモ、予一人ニテ其收局ヲ擔當スベシ。就テハ予ノ今迄陳述シタル主意ヲ簡條書ニシテ閣下ヨリ貴國ニ内報有之タシ。

(右ノ通り言終リテ、再ビ下文ノ通り申述ベタリ。)

兩國ハ是非共永遠ニ和睦ヲ主トスベキ間柄ニ付、琉球一件ノ爲メ兩國共内心ニ一物ヲ蓄ヘ居ルハ大ニ不宜、仍テ收局スルヲ要ス。

外國人ヨリ予ニ向テ仲裁ヲ申入ル、モ一々斷ルハ甚ダ面倒ナリ。故ニ速ニ結了スルニ非ザレバ極メテ煩ハシ。

全ク復封スル事ハ出來ザルモ、土地ノ幾分ヲ遣シ、只琉球王ヲ立ル丈ケノ事有之タシ。右ノ件サヘ收局スレバ、各國同様ノ條約ニ改正スルハ自分一人ニテ擔當スベシ。

再ビ宍戸ヲ派スベシ、其節ハ閣下ノ來ルヲ要ス。

予ノ手許ニテ決議スレバ總理衙門ニハ異議無シ。又予ヨリ一封ノ書ヲ奏上スレバ天子ノ所ハ受合ナリ。

然ル時ハ宍戸及ビ總理衙門ノ體面皆全キヲ得。宍戸公使トノ話シハ表向キニ係ルヲ以テ、閣下ニ向テノ如キ内談ハ致シ難シ。仍テ閣下ハ必ズ來ルベシ。而シテ宍戸公使閣下トノ意味齟齬不致様有之度、而シテ極内密ナル貴政府ノ意ハ閣下ト熱議シ、其上ニテ宍戸ト表向

キニ談判スベシ。

竹 謹ンデ中堂ノ意ヲ我政府ニ稟スベシ、併シ琉球王復封ノ事ハ到底被行難カルベシ。

李 右不被行時ハ實ニ收局ノ見込ナシ、左スレバ日本ハ全ク和好ヲ保全スルノ意ナキヲ信ズルナリ。

竹 兎モ角モ中堂ノ御主意ヲ我政府ニ具稟スベシ、併ルニ筆端ニテハ盡シ難キヲ以テ、余直ニ歸朝直ニ上陳可致ナリ。尤明春中堂ノ來津ヲ待テ今一應拜晤ノ上歸朝可致ヤ、又ハ開河ヲ待テ直ニ歸朝可仕ヤ。

李 今日既ニ意中ヲ盡セリ。他ニ言フベキノ事ナシ。開河ヲ待テ直ニ歸朝アリ度シ。

竹 弊國ノ情實多クハ中國ニ通ゼズ、何卒中堂ニハ一度御渡航有之度、左スレバ弊國ノ諸大人欣躍シテ奉迎隨テ襟懷ヲ吐露シ、我國ノ情實明白ニ相分リ可申シ。

李 予ハ何分ニモ其隙ヲ得ズ、且ツ目下兩國ノ紛糾ニ際スルヲ以テ、若シ親ラ貴國ニ行ク時ハ、傍觀者ヨリ予ヲ和好ヲ乞フ爲メニ渡航シタリト疑フナルベシ、故ニ予ハ往クヲ欲セズ。

(李鴻章又左ノ通り開陳セリ)

宍戸ノ來ル時ハ疍癩ヲ起サズ、シンミリトシテ來ラン事ヲ望ム、而シテ貴政府モ少シハ讓歩有之度、相互ニコラヘ難キヲコラヘ收局ヲ求ムベシ。此件サヘ相濟ニ於テハ條約ノ儀ハ改正期

限ニテモ、又即時ニテモ改正出來ル事ナリ。左スレバ兩國ノ心中相和シ永遠ニ親睦スルヲ得ベシ。若シ此ノ事ヲ貴政府ヨリ背ンザルニ於テハ、條約改正モ決シテ承知セザルノミナラズ、終ニ和好ニ至ル目途ナシ。熟考セラレン事ヲ希フ。

右李鴻章トハ凡ソ三時間談話致シタル始末ナリ。李鴻章ノ意ヲ約言スレバ少々ノ土地ヲ與ヘ琉球ヲ復封セラレ度、左スレバ其他ノ件ハ日本ヨリ請求ノ通り承知スベシトノ大旨ニ過ギズ。

一、是ニテ清國政府ノ廟議ハ大抵相分リタル上、復封ノ名儀不相立以上ハ、到底清國政府ニテ收局出來難キ情實有ル事ヲ確信セリ。

一、實益上ヨリ論ズル時ハ、清國ニ割與スル二ツノ島ヲ以テ琉球ヲ復封シ、我ノ屬國トナスニ於テハ土地ヲ失フノ損失ナクシテ、一面ニハ條約改正ノ實利ヲ收ムルヲ得、從前ノ談判ニ比スレバ更ニ便益アルヲ覺ユ。只其ノ最モ困難ナルハ復封ノ名儀ナリ。

尙泰ガ恭順ヲ盡シタル忠悃ヲ褒賞シ、祖先ノ墳墓ヲ離ル、ノ情ヲ憫察シ、隨テ墳墓ヲ守ル爲メ領地幾分ヲ祭祀料ニ被下置、此ニ移住スルヲ許シ特別ヲ以テ王爵ヲ賜フ様ノ手續ニ相運バ、左迄不體裁ノコトハ有之間敷歟。

清國ト條約ヲ改正シ、和好ヲ永遠ニ保全スルニハ今日ヲ機會ト存ズ。若シ此機會ヲ失シ、

萬一清國ヨリ外人ノ仲裁ヲ乞フニ至ラバ、向後條約改正ノ見込絶テ無之而已ナラズ、永ク相敵視スルノ情ヲ氷解スルコト能ハザルベシ。左スレバ日清交際ノ熟不熟ハ實ニ今日ノ一舉ニ相決スル事ナレバ、何卒今一應廟議ヲ凝サルル様懇願ニ堪エズ。

明治十四年十二月十五日

竹添進一郎

伊藤博文殿

其後招商局之汽船二隻ヲ以テ山海關ノ戍兵ヲ南方ニ積戻リタリ。只今ノ處ニテハ山海關ノ兵員既ニ半分餘モ減少シタル有様ニテ、而シテ琉球一件ハ近日絶テ何等ノ噂モ無ク殆ト消滅シタル氣色ニ見エタリ。

一、米人ノシユツフェルトハ過日北京ヨリ來津今以テ當地ニ滞在、差タル用事ハ無之様相見エ娘一人ヲ連レタル位ノ事ナリ。或西人ノ説ニテハ旅費ヲ貪ル爲メ避暑旁汗漫致シ居ルトノ儀ナレドモ果シテ實否如何。

一、清政府ヨリ英國ニ注文致シタル三艘ノ軍艦已ニ出來、内貳艘ハ天津ニ備ヘ置トノ噂ナレドモ未ダ着津セズ。

明治十四年八月九日

竹添進一郎

一昨年琉球復封之嘆願トシテ航清致シタル琉人即チ向德宏ノ一列ハ李鴻章衙門ノ裏手大王廟中ニ潜ミ居リタル處、昨年來踪跡不分明ナリ。然ルニ近日ノ上海申報ニ琉球人天津病院云々ト仰々敷掲載致タレバ、直ニ探索ニ及ビタルニ、右ハ一昨年渡航致シタル一列中ノ兩人ニシテ、辮髮ヨリ衣服等ニ至ルマデ支那人ニ扮装シ容易ニ其ノ琉人タルヲ辨別スル能ハズ。而シテ不相替大王廟中ニ潜ミ居、何モ事替リタル様ニハアラズ、仍而不取敢此段内稟ス。

明明十四年八月十日

竹添進一郎

伊藤參議殿
井上參議殿

(以下六頁削除)

グランド將軍御會見記

一千八百七十九年八月十日濱離宮ニ於テ

聖上ゼネラル・グランドト御對話筆記

先互ニ禮辭有リ

陛下

朕疾ヨリ卿ヲ相見ント欲セシモ政務多端ニシテ能ハズ今日始メテ爰ニ會スルノ時機ヲ得卿健
安ノ壯容ヲ看ル大慶斜ナラズ

グランド

余當國ニ來航シテヨリ殆ンド既ニ二ヶ月ナラントス、然ルニ陛下ノ政府並ニ貴國人民ノ待遇
ヲ辱スルノ殊ニ優渥ニシテ到ル處極テ懇誼ヲ蒙リ實ニ思ノ外迅速ニ光陰ヲ過シタリ。就テハ
來ル火曜日ヨリ函根温泉ニ赴キ本月十九日乃至廿日頃一先歸府、夫ヨリ本月廿九日發ノ瀛船
東京號ニ搭ジ一行皆共ニ桑港ヘ向ケ將ニ歸航致サント欲ス。今暫クハ滯留ノ意ナリシニ事情
之レアリ遺憾ナガラモ該船ヨリ歸國致サルヲ得ズ。

グランド將軍御會見記

陛下

願クバ今暫ク逗留アランコトヲ欲スレ共、是非トモニ該船ニテ歸國セラレザルヲ得ズトナレバ難奈何次第ナリ。楮テ卿ニハ今般我國內ノ實況ヲ親シク歴覽アリシコト故我國事ニ付意見ヲ有セラル、ノ事モ之アラバ幸ニ教示アランコトヲ

グラント

誠ニ辱キ仰ナリ、凡ソ他國ノ政策ヲ議スルハ其國人ニ若カザルコト固ヨリ言ヲ俟ザレドモ、請フ爰ニ聊カ鄙見ヲ上聞ニ及ブベシ。

余曩ニ長崎ニ着港セシヨリ常ニ情ヲ當國農業ノ景況及人民進歩ノ状態ニ深く注目シ、曾テ聞知スル所アリシヨリモ一層大ニ事情ヲ詳悉スルヲ得タルニ因リ、余ガ從來久シク日本ノ爲メヲ思ヒ其進歩ヲ望ムノ衷情ハ是ニ至テ愈々深キヲ加ヘ、自ラ信ズラク眞ニ日本ノ幸福ヲ冀ニ切ナル者 陛下ノ自國人民ヲ外ニシテハ他ニ復タ恐ラク余ノ如キハ之レアラザル可シ、是蓋シ余一個ノ衷情ニ非ズ即チ我米國人民ノ衆情ナリ。

新嘉坡ヨリ此方ニ在テハ新紙若クハ雜誌等ノ亞細亞人ト米歐人トヲ同等視シテ論議スルモノアルヲ見ズ、只東京タイムス及ジャパン、メールノ兩紙ガ東洋諸國ト雖ドモ國權ハ各同シク之ヲ有セルガ如クニ論ズルアルノミ。又西洋諸國ノ官吏輩ニ至テハ皆盡ク利己主義ニ執着シ

日本及清國ノ國權ヲ顧ルモノ、如キハ殆ンド希ナリトス、其不正貪欲ナル實ニ余ヲシテ往々切齒扼腕ニ堪ヘザラシム。

陛下

朕深ク卿ノ誠意ヲ嘉ミス。

グラント

凡ソ文明各國ニ於テハ皆一般ニ政黨ナル者アリ、蓋シ政黨ハ相互ヒニ控制シ失政ノ事ナカラシムルノ便益アリテ其効用尠ラズト雖モ、亦互ニ現存政府ヲ轉覆セント謀ルノ弊害アルヲ免レズ。思フニ當國ニモ亦必ズ此政黨アラン、而シテ我米國ニテ「デマゴグ」ト稱スベキ政論ノ主唱者アリテ、此輩ヤ自己ノ黨與ヲ得ント欲シ寃メテ政府ニ抗抵スルノ通論ヲ發スルナルベシ。爰ニ余ガ所見ヲシテ誤謬ナラザラシメバ、今日此國ノ新聞及人民中ノ輿論ハ大ニ民選議會ノ設立ヲ冀望スル者ノ如シ、今ヤ果シテ其開機ナルカ否ハ余ノ所知ニ非ザルモ、能ク時機ヲ察シ之ヲ設立スルハ何國ヲ論ゼズ甚ダ利益ナシトセズ。方今歐洲各國ニ於テハ露國ニ至ルマデモ皆此般ノ議會アラザルハ無シ、凡ソ政府ハ其治ノ立君ナルト共和ナルトニ拘ハラズ、人民ニ憑依スルモノヨリ強キハナク、當局者ハ頼ヲ以テ輿論ノ在ル所民心ノ歸スル所ヲ了知スルヲ得ルナリ。是故ニ此國ニ於テモ早晚必ズ該會ノ設立アルベキナレバ、今ヨリ宜ク

政府ノ意向ヲ人民ニ示シ、時來レバ將ニ其開設アラシメ、人民ヲシテ其責任ニ應ズルノ知識ヲ養成セシム可シ。而シテ一たび既ニ選舉代議ノ特權ヲ人民ニ許與シタル後ハ永々之ヲ許與シ、再決テ取戻スヲ得ベカラズ。是レ 陛下必ラス御心得アラセラルベキ事ナリ。故ニ如是會議ヲ創立スルニ當テハ用心ノ過ルモ宜シカラザレドモ、深ク注意セズンバアル可カラズ。事ヲ起スニ太急ナルハ極テ危フケレバ、時期尙未ダ到來セザルニ輕卒議會ヲ起シ却テ擾亂ヲ招クコトアル可ラズ。初ヨリシテ此議會ニ期望ヲ屬スルコト甚ダ重大ナル可カラズ。最確ナル道ハ徐々ニ進歩ヲ謀リ漸ヲ以テ人民ノ知識ヲ進マシムルニ若カズ。故ニ余今竊ニ日本ノ爲ニ謀ルニ先ヅ着手ノ初ハ國中首領ノ人物ヲ舉用シテ顧問議會ヲ起シ、之ニ附スルニ立法ノ權ヲ以テセズ只討論ノ權ヲ與フル事ト成スベキ歟。然ルトキハ自然ニ信任ト知識ヲ得又其責任ノ性質ヲ了得スルニ至ルベシ。畢竟民選議會ノ要ハ人民ノ知識ニ在リ。而シテ日本人民ノ智識ニ進メルハ余ガ實ニ驚愕ニ堪ヘザル所ナリ。

陛下

大ニ感服スベキノ商案ナリ。

グラント

外債ノ事ニ就キ余又一ノ愚考アリ、凡ソ國ノ最賤グベキハ外國ニ債ヲ負フヨリ大ナルハ無シ。

人ニ金錢ヲ借り債却ノ資力ナキハ殆ド詮方ナキモノニシテ、債主ニ壓服セラレ自ラ卑屈ナラザルヲ得ズ。是レ一個人ニシテ然リ、況ヤ一國ニ於テヤ。試ニ埃及西班牙又ハ土耳其ヲ見ヨ、其景況實ニ憐ム可シ。一國ノ財源ハ皆悉ク外國ノ抵當ト爲リ一モ我所有ト稱スルヲ得ベキモノナキニ至ル、而シテ埃及ノ藩王ハ外國ニ其讓位ヲ迫ラレ、又西班牙ノ如キハ莫大ナル外債ノ爲ニ各種ノ内國稅ヲ非常ニ增收シ、加之上下ノ稅吏私曲ヲ逞シ堂々タル富國モ殆ド將ニ衰亡セントスルノ勢ナリ。然ルニ今日本ノ外債ハ幸ニ如是ノ巨額ニ非ズト聞ク、然レバ其債主ニテ承諾サヘ致サバ返期末ダ來ラズトモ何時ニテモ之ヲ償却スルコト難カラザルベシ。一日モ早ク支消スル方日本ノ利益ニシテ、成ルベクハ此上外國ヨリ借入レ無キニ若カズ。外國ニ於テ弱國ニ債ヲ負セ以テ不正ニモンノ權威ヲ振ント謀ルアルハ 陛下ニモ必ズ了知サセラハ所ナラン。是レ畢竟其國ニ政權ヲ得ント欲スルガ故ニシテ、只常ニ之レガ機會ヲ伺ヘリ。今ヤ亞細亞ニ於テ稍ヤ外國ノ指揮ヲ受ザルハ日清ノ兩國ノミナルニ、若シ此兩國間ニ戰爭ノ起ルコトアレバ彼輩忽チ其機ニ乗ジテ資金ヲ貸付ケ其内政ニ干與ノ權ヲ取ント欲スルノ志ナキニ非ズ。

今此談話ノ續キニ陳申スベキ事ニハアラザルモ、余曩ニ清國ニ滯留中屢李鴻章並恭親王ト面會ノ際余ニ夫ノ琉球事件ヲ詳細ニ語ラレ、余ヨリ日本政府廟堂ノ人ニ説キ此事ヲ公平穩當ノ

處分ニ至ラシメンコトヲ乞ハレタリ。是ニ於テ余ハ彼ノ代理ト爲リテ此事ヲ處辨スルコトハ固ヨリ肯ゼザリシモ、及ブ限リハ周旋スル所アルベキヲ約シ、兎ニ角我國ノ公使ビンハム氏ニ商議ス可シト告置キタルニ依リ、ビンハム氏ニハ既ニ數回示談ニ及ビ、又伊藤君並西郷中將君ニモ此程日光滯在中ニ面談ヲ遂ゲ大ニ事情ヲモ詳ニスルヲ得タリ。然ルニ雙方ノ所論互ヒニ相同ジカラザルハ總テノ争件皆然ラザルハナク、余ガ清國ニテ聞ク所ト日本ニテ聞ク所トハ大ニ差違ナシトセズ。依テ其是非曲直孰レニ在ルカハ固ヨリ余ニ於テ確知スル能ハザレバ、其如何ハ敢テ猥ニ鄙見ヲ吐露スベキニ非ザルナリ。今更日本ニ於テ勢ヒ退キ難ク又言フベカラザルノ事情アルベキハ余能ク之ヲ知ル、且既ニ自ラ信ジテ判然其國權トスル所ノ處分ヲ行ヒタル以上ハ、何處マデモ其國權ヲ全フセンコトヲ思ハザル可カラズ。是レ實ニ左アルベキ事ナリ。然レドモ此儀ニ就テハ清國ノ意思ヲモ亦宜シク察セズンバアル可ラズ。故ニ余ハ只此一點ニ就キ辯ズルアラント欲スルノミ。夫ノ清國ノ思フ所ニ於テハ日本ノ所爲ヲ以テ和親國ノ道ニアラズシテ彼ノ國權ヲ輕蔑シ、古來琉球ニハ彼レ多少ノ關係ヲ有セルコトヲ顧ザルノ處置ナリトシ、特ニ往年臺灣事件ニ屈辱ヲ被タルコト胸裏ニ忘ル能ハザルヨリ、彼ノ不平ヤ一層甚シク、畢竟再ビ臺灣ヲ占取シ而シテ彼國ト太平洋ノ間ヲ遮斷セント欲スル日本ノ意ナルベシト疑念セリ。是レ清國ノ大臣等ガ日本ニ對シ急激怨恨ノ心ヲ生ズル所以ナリ。

是故ニ余ヲ以テ之ヲ視レバ此事ハ互ヒニ論判ニ涉ルコトナク、又日本ノ要求スル所敢テ其權利ナキニハ非ザルベキモ、只ニ清國ノ心情ヲ量察シ寛大公義ノ心ヲ以テ彼ニ一步ヲ讓ルニ若カザルガ如シ。實ニ兩國間ニ和親ヲ保有スルノ今日ニ甚ダ切要タルコトヲ考フレバ、雙方ニ於テ互ニ相讓ル所ナカル可ラザルナリ。余未ダ爰ニ確言スルコトハ能ハザレドモ、余ノ聞ク所ニ據レバ清國ニ於テハ該島嶼間ノ疆界ヲ分畫シ、太平洋ニ出ル廣濶ナル通路ヲ彼ニ與フルノ議ニモ至ラバ彼レ之ヲ承諾スベシト、此事果シテ確説ナルカハ知ル可ラズト雖モ、亦以テ夫ノ清國大臣等ガ心ニ忿怒ヲ懷キナガラモ猶熟議ヲ容ル、ノ意ナキニハアラザルコトヲ知ルベキナリ。

陛下

琉球事件ニ就テハ伊藤並某々ニ命ジ置キタルニ依リ彼輩近日卿ト面會ニ及ブベシ。

グラント

此事件ニ就キ尙ホ一言ノ陳スベキアリ、此琉球事件及其他トモ清國ト談判ヲ遂サセラル、ニ當テハ、成ベク外國ヲシテ之ニ干與セシメラル可カラズ。夫ノ歐洲諸國ハ余ソノ外交方略ヲ以テ察スルニ、其志ヤ只亞細亞人民ヲ屈從セシメント欲スルニ在テ更ニ其利害ヲ顧ミズ、只管私利ヲノミ是レ謀リ、若シヤ日清間ニ事起ルアレバ却テ幸トシ、自ラ利益ヲ占メント欲ス

ルニ外ナラズ。夫レ日本ト清國トハ元來同一人種ニシテ特ニ舊好ノ國ナレバ、互ニソノ友情ヲ思ヒ雙方相讓ル所アラバ孰レニモ面目ヲ汚サル様ノ示談ニ和議ヲ整へ、以テ兩國間ノ親和長久ヲ計ルヲ得ベシ。是ヲ以テ余若シ滯在中ニ兩國ノ和議成ルヲ聞キ得テ歸國スルニ至ラバ余ノ大悦ハ何物カ之ニ過ギン。

陛下

清國トノ交際ハ最モ平和親睦ナランコト朕ニ於テモ冀望スル所ナリ。

グランド

余今般當國ノ實況ヲ目撃スルニ、人民皆伶俐ニシテ能ク勤業勞苦ニ堪へ、諸般ノ工業頗ル盛大ノ有様ナリ。只課税稍未ダ薄カラズシテ其貯資一般ニ寡少ナランカヲ恐ル。蓋シ日ヲ追テ豊富ニ趣クノ狀ハアリト雖モ、到底現行ノ輸出入稅約存立スルノ間ハ其進歩甚ダ遲緩ナルヲ免ル可ラズ。各種ノ輸入品ヲ總テ五分稅トナスハ實ニ非常ノ輕稅ト謂フ可シ。又輸出品ニ稅ヲ賦課スルハ甚ダ惡シ。是レ眞理ニ戻リ又經濟上ニモ適セザルノ事ニシテ、ソノ國益ニ非ザルヤ判然タリ。之ヲ徵收スルノ全額ハ即チ產出者自己ノ損失ニ歸シ、加フルニ人民ニ奮勵心ヲ失ハシムルノ害アリ。是ヲ以テ此輸出稅ハ宜ク一日モ早ク之ヲ廢スルニ若カズ。實ニ今般ノ條約改正案タルヤ、各外國政府ニ於テモ必ズ承允スベキモノタレバ、之ヲ改正スルニ當テ

ハ輸入物品ノ或ル種類ニハ少クモ之ニ二分五分ノ稅額ヲ賦課シ、以テ内國ノ工業ヲ保護シ、併テ歲入ノ増補ヲ謀ラザル可ラズ。其ノ運ニ至ルコト愈々早ケレバ内國ニ豐源ノ大ニ開クルコト隨テ速ナルベシ。是レ條約改正ノ甚ダ今日ニ急切ナル所以ナリ。

今尙一ノ陳言セント欲スル事項アリ。余當國ノ諸學校ヲ一覽スルニ各其學制ノ宜ヲ得タルハ思フニ米歐諸國ノ學校ニモ更ニ劣ルコトナカルベシ。而シテ其教師タル者ハ大概皆内國ノ學士ニシテ、能ク其ノ生徒ノ教育ニ應ズルヤ更ニ疑ヲ容レズ。然レドモ學校ニ於テハ宜シク爰ニ注意スベキノ一事アリ。凡ソ教師ノ若年ナルハ縱令能ク其教師タルニハ適當スルトモ其知識尙淺ク經驗未ダ廣カラザレバ專ラ書冊ニ就テ教ヲ授ル迄ニ止リ、教育ノ法ヲシテ益々精良ニ至ラシムルコトヲ缺ノ憾ナキ能ハズ。夫レ教育ノ法ハ進マザレバ必ズ退キ、一旦靜止ノ點ニ達スレバ復タ忽チニ退却ヲ始ムルモノナリ。此故ニ我米國ニテハ此患ヲ防ガンガ爲ニ久シク經驗ヲ積タル老年ノ學士一二名ヲ置キテ若教師輩ヲ監督シ、又學務ヲ總理セシメ、而シテ此老師ヨリ各國ノ學校ト常ニ學事ノ通信ヲ爲シ、相互ニ其意見ヲ交換シ其良法ヲ採ル事ト爲スナリ。此方法ノ如キハ日本ニ於テモ亦必ズ緊要ナルベシ。又將來日本ノ諸事業ニハ悉ク日本人ヲ使用スルニ至ランコト余ノ期望スル所ト雖モ、有益ナル外國人ノ傭ヲ解クニ急ナル可ラズ。我國ト雖モ外國人ヲ傭ヒ之ヲ要用トセバ長ク使用スルモ決テ厭フコトナシ。特ニ貴國

ノ工部學校ヲ興シタル輩ノ如キハ世界ニ無比ノ人々ナレバ差支ノ事アラザルノ間ハ長ク使用
サセラルルコト可ナルベシ。

余ノ上言セント欲セシハ先ヅ以上ノ數事ナリ 陛下貴重ノ時間ヲ厭ハセラレズ鄙言ニ尊聽ヲ
辱フシ誠ニ感謝極ナシ。

陛下

卿ノ所說朕審ニ之ヲ領ス此數事ニ就テハ朕篤ト思慮ニ及ブベシ爰ニ其ノ懇情ヲ謝ス。

三條太政大臣

商話ヲ拜聽シ大ニ益ヲ得タルコト尠カラズ悉ク緊要ノ事項ニ意見ヲ示サル其誠意厚情寔ニ感
荷ニ堪ヘズ。

使節委任ノ全權ニ關スル諮問草案

(明治四、五年)

今般我曹辱ク特命ノ全權ヲ奉ジ茲ニ海外各國ニ使スルニ當リ其至重ノ大任タルコト萬人ノ觀
望ニ係ルヲ以テ各國政府ニ至リテ咨議研究スルノ際ニ臨ミ其至重ノ大任タル實證ナカラザル
可ラズ熟考スルニ我

天皇陛下ノ御書中ニ掲載スル所ハ全體ノ綱領而已ニテ處分眼目實踐ノ順序ニ涉ラズ 勅旨
別勅ノ如キモ細大ノ事務相混合セルヲ以テ商議ノ標準トスルニ適當ナラズ然ラバ則チ近日華
盛頓府ニ至リ彼外務卿ト面議スルニ臨ミ何ヲ以テ使節奉命ノ眼目ト云ハンヤ何ヲ以テ我
天皇陛下ノ大臣ヲ以テ此特命ノ使臣ニ任ジ宣ヒタル目的ト云ハンヤ其際茫漠ノ對ヲナサバ獨
リ我使節ノ榮辱ニ關スル而已ナラズ併テ我政府ヲシテ疎漏ノ詬ヲ受シムルニ至ラン歟於此僕
竊カニ

御書勅書并ニ別勅ノ趣意ニ基キ其體ヲ推テ要ヲ發シ其末ヲ溯テ源ヲ探リ茲ニ使節委任ノ全權
天皇陛下ノ期望預圖ノ眼目

實踐處分ノ順序ヲ草シ以テ 各位諸君ノ賢考ニ供ス此草案スル所實ニ暗中ヲ摸索スルノ類ニ
 係ルヲ以テ彼商議應接ノ日ニ於テ果シテ各國政府ノ協合ヲ得ベキ歟僕自カラ之ヲ信ズルヲ得
 ズ又他日我國ニ於テ之ヲ實行スルニ臨ミ果シテ事情ニ適當ナルベキ歟僕又自之ヲ證スルヲ得
 ズ只條理ヲ推考シテ實際ヲ測臆シタル而已ナリ 各位諸君請フ之ヲ熟讀シ異論アラバ之ヲ筆
 述シ遺漏アラバ之ヲ綴シ以テ我使節派出ノ眼目ト商議ノ目的トヲ大至シ近日華盛頓府ニ於テ
 咨議研究スルノ用ニ供セヨ謹デ各位諸君ノ賢考ヲ望ム

伊 藤 博 文

使節委任ノ全權

今般我

天皇陛下ヨリ派出セラレタル特命全權使節ハ歐米各國ノ政府ニ至リテ新ニ條約ヲ結ビ或ハ現今
 ノ定約ヲ廢止シ又ハ更正スベキ全權ヲ委任セラレタルニ非ズ

派出ノ大眼目ハ現今ノ條約ヲ實踐シタルニ付是迄經驗シタル所ノ利害ヲ擧テ之ヲ各國政府ニ討
 論シ。將來我國民ノ爲ニ其權利ヲ増サンコトヲ謀リ。或ハ新約ニ加入スベキ條款ヲ議シ。我ハ
 我國ノ情實ヲ披陳シテ各國政府ノ考案ヲ乞ヒ。到底我帝國ヲシテ開明諸國ノ社中ニ入ラシメ萬

國公法ヲ遵奉スル者ト同等並肩ノ交際ヲナサシメ獨立不羈ノ公權ヲ全ク受用スルコトヲ得セシ
 メント欲スルニ在リ

此大眼目ヲ達センニハ内政ニ於テ如何ナル改革ヲナスベキ乎。如何ナル法律ヲ設立スベキ乎。
 如何ナル方略ヲ以テ如何ナル政務ヲ施行スベキ乎。又外務ニ於テハ如何ナル方法ヲ標準トスベ
 キ乎。如何ナル交際ヲナスベキ乎。如何ナル處分ヲ以テ其權理平均ヲ得ルノ域ニ至ルベキ乎都
 テ之ヲ咨議研究スルヲ須要ナリトス

是故ニ使節ハ天皇陛下ニ代リテ我國ト外國トノ間ニ關涉スル重件ヲ商議シ各國政府ヲシテ使節
 ノ披陳スル所ニ聊ノ虛僞ヲ挿マズ確實ナル情狀タル事ヲ信用セシメ承認セシムベキノ大任ナリ
 其大任タル如此故ニ我政府ハ凡ソ此使節ガ各國政府ト商議シタル條款ヲ嘉納シ他日之ヲ内政外
 務ノ實際ニ施行シ或ハ他日之ヲ條約中ニ加入スベキコトト確定シ、條約改定ノ日ニ臨ミテ聊カ
 異同スル所アリト雖ドモ、其大綱要領ノ如キハ充分ノ條理アリテ辨疏スルニ非レバ後日ニ至リ
 使節ガ目今各國政府ト協議シタル條款ヲ變更スルコトヲ得ズ。

爰ヲ以テ

天皇陛下ハ特ニ其貴重信任ノ大臣ヲ撰擇シテ使節ニ命ジ其期望預圖スル所ヲ各國政府ニ傳ヘシ
 メ、以テ現今將來ニ施設スベキ方法ヲ商議セシメン爲ニ特別ノ全權ヲ委任セラレタリ。

天皇陛下ノ御期望豫圖ノ眼目

第一

天皇陛下ハ我東洋諸州ニ行ハル、所ノ政治風俗ヲ以テ我國ノ善美ヲ盡スニ足レリトセズ。何ゾヤ歐米各國ノ政治制度風俗教育衛生守産概ネ我東洋ニ超絶スルヲ以テナリ。於此開明ノ風ヲ我國ニ移シ我國民ヲシテ速ニ同等ノ化域ニ進歩セシメンコトヲ志シ夙夜勵精黽勉スルヲ專務トセリ。

第二

天皇陛下ハ國力ヲ一ニセン爲ニ封建ヲ破リタリ。人民ノ權利ヲ重ジテ世祿ヲ減ジタリ。舊習ノ陋俗ヲ除キ公明ノ政治ヲ布カン爲ニ賢能ヲ舉グルニ當リテ其門閥ヲ論ゼズ、學術ヲ盛ニシ智識ヲ擴メン爲ニ學費ヲ起シ遠ク師ヲ海外ニ招キタリ。鐵道ヲ建築シテ往來ヲ便ニセント謀リ、電信ヲ通線シテ書信ヲ速ニセジコトヲ望ミ、航海ヲ安全ニスルニ燈臺ヲ以テシ、船舶ヲ修理スルニ造船廠ヲ設ケ、貿易ヲ助ケン爲ニ貨幣ヲ改鑄シ、公論ヲ取ル爲ニ議院ヲ開キ、保護ヲ固クセ

ン爲ニ兵制ヲ一ニシタリ。凡ソ此般ノ諸務其成功ニ至ラザル者尙多シト雖ドモ已ニ其端緒ヲ開キ皆歐米各國ニ行ハル、所ノ現時ノ制ニ倣ヒタリ。

第三

天皇陛下ハ我國自主ノ權理アルヲ以テ、政務上ニ於テハ中外人民ノ別ヲ論ゼズ、凡ソ我國內ニ居住スル者ヲシテ我法律ニ服從セシメ、我政府ノ保護ヲ以テ其生命家産所有ヲ安全ナラシメント欲セリ。

第四

天皇陛下ハ平時戰時ノ別ヲ論ゼズ、歐米各國ニ於テ遵奉スル萬國公法ノ條規ニ從フテ外國トノ交際ヲ處分セント欲セリ。

第五

天皇陛下ハ外國人民ノ我版權ニ入ラント欲スル者ヲ許可シ、而シテ此許可ノ法律ヲ設立シ之ヲ公布セント欲セリ。

第六

天皇陛下ハ我國民ノ外國版籍ニ入ラント欲スル者ヲ許可シ、而シテ其者ハ日本人タルノ權理ヲ失フ而已ニシテ別ニ之ヲ拒止スルノ法律ヲ設ケザルベシ。

第七

天皇陛下ハ人理ノ自由ニ基キ、内外人民ノ間ニ婚姻ヲ許可シ將來設立スベキ法律中ニハ婚姻ノ條規ヲ定メ内外ノ人民ヲシテ之ヲ遵奉セシメント欲セリ。

第八

天皇陛下ハ外國人民ノ我國民法及ビ地方規則ニ違背セザル以上ハ、其國內ニ來往シ其國內ヲ往來シ其產業ヲ營ミ其便利ヲ達スルコトヲ許可シ一切其自由ヲ得セシメント欲セリ。

第九

天皇陛下ハ將來設立スベキ法律ニ於テ、外國人民ハ諸事盡ク日本人ト同等ノ權利ヲ有スルヲ得ザルベシト雖ドモ、政府ノ威權ヲ以テ生命家産所有ヲ保護スル事ニ付テハ同視同仁ノ理ヲ主トシ更ニ内外ノ差別ヲ設ケザルベシ。

第十

天皇陛下ハ我國ハ物産ヲ昌ニシ、内外ノ貿易ヲ盛ニセン事ヲ望ミ、其景況ト國力トヲ計リ、時々交易ノ章程ヲ更正シ、中外ノ稅額ヲ増減シ、我國自立ノ權利ヲ以テ之ヲ實際ニ施シ、凡ソ我國ニ來リ我國ニ住スル者ヲシテ之ヲ遵奉セシメント欲セリ。

第十一

天皇陛下ハ將來設立スベキ法律ヲ普ク我國内ニ居住スル人民ニ通知セシメント爲ニ之ヲ國內ニ公布スルニ當リテハ國文ニ英佛ノ兩譯文ヲ附セント欲セリ。

前條ノ眼目ヲ綱領トシテ我國今日ノ事情ヲ酌リ
之ヲ實踐スルニ適當ナルベキ處分ノ順序

第一 前文ノ第三第五第八ノ趣旨ニ基キ、外國人ノ我國内ニ居住スル事ヲ許スニハ先ヅ東京西京大阪ノ三府並ニ諸開港場ニ於テ居留地ノ制ヲ廢シ其市街ノ境内ハ内外人民ノ區別ヲ論ゼズ互ニ雜居スルコトヲ許スベシ。

第二 右ノ府港ノ外ハ雜居ヲ許サズト雖ドモ我政府ヨリ與フル所ノ往來切手ヲ所持スル外國人ハ日本全國中ヲ旅行スルコトヲ得ベシ。

第三 右ノ府港ノ外タリトモ我政府ノ免許ヲ得タル外國人ハ其願立ノ地ニ居住スルコトヲ得ベシ。

第四 此居住並ニ往來ノ免許ヲ與フル爲ニ地方官ニ於テ各所記録所ヲ設ケ之ヲ司ラシムベシ。

第五 現今實踐ノ條約ニ據レバ凡ソ外國人民ノ裁判ハ其國ノ岡士之ヲ司ルト雖ドモ向後ハ之ヲ廢止シ一切其地方ノ裁判ニ任スベシ。

第六 内外人民ノ訴訟ヲ聽カンガ爲ニ各地方ニ裁判所ヲ設クベシ。其長官ハ日本官員タリト雖ドモ自餘ノ法官ハ内外人民ノ別ヲ論ゼズ各邦ニテ其法律ニ通達シタル人物ヲ撰ンデ之ヲ我裁判所ノ法官ニ舉用シ我法律ニ照シテ審判セシムベシ。

第七 政府ノ第一等裁判所ニ於テハ法律ヲ論議スル爲ニ各邦ニテ最モ法律ニ熟通シタル人物數員ヲ撰ミテ司法官ト爲スベシ。

第八 政府ノ議政官ハ此司法官ヨリ進呈スベキ法律ノ議案ヲ得テ之ヲ討論シ之ヲ各國ノ法律ニ比較シ其議案果シテ至當ナリト認メバ

天皇陛下ノ許可ヲ乞ヒ 御璽ヲ得テ之ヲ國內ニ布告シ以テ國律トナスベシ。

第九 此國律ハ國文ヲ以テ本トシ英佛ノ兩譯文ヲ添ヘテ公布スベシ其餘ノ布告モ皆此ノ兩譯文ヲ添フベシ。

第十 現時實踐ノ條約中ノ租稅貿易ニ關係スル個條ハ一切之ヲ廢止シ日本政府ニ於テ時々貿易ノ規則並内外租稅ノ増減ヲナスベシ。

第十一 内外人民ノ生産商業ハ都テ其者ノ自由タルベシト雖ドモ會社ヲ結ビ或ハ内海ヲ航シテ通輸スル等ノ如キハ地方官ノ特例ニ非ザレバ許サルコトアリ此般ノ條例ニハ兼テ之ヲ公布シテ之ニ從ハシムベシ。

第十二 現時實踐ノ條約中此新議ノ個條ト齟齬スル者アラバ一切之ヲ廢止スベシ且ツ其趣旨明確ナラザル者アラバ公法ノ條規ニ從テ之ヲ定ムベシ。

岩倉大使ワシントン條約談判筆記

筆記ブルークス

西曆千八百七十二年第三月十一日 我明治五年壬申二月二日
月曜日

米國華盛頓府國務省ニ於テ日本使節米國聯邦國務卿ハミルトン。フィッシュ談判筆記大副使五人森少辨務使鹽田一等書記官並ニ米國々務卿輔チャレス、ヘール及ビ我領事ブルークス同席

- 一、使節 今日ノ談判ノ趣旨ヲ明亮ニセンガ爲メ既往及近時ノ事情形勢ヲ書面ニ認メ持參シタレバ當席ニ居合スル使節附屬タル「ブルークス」ヲシテ讀誦セシムベシトテ談判ノ端ヲ開ク
- 一、國務卿フィッシュ曰ク其書ノ趣旨大ニ面白ク思ハル、ルニ依リ大統領ニモ之ヲ告知センコト大慶ナレバ其寫書ヲ贈ラレ度、大統領ニモ定メシ満足ニ思フナルベシ
- 二、又使節公ニハ定メシ我國ノ政體御承知ナルベシ條約ハ我國上院三分ノ二之ヲ允准スルニ非ザレバ之ヲ認メテ結局ノ條約ト認ムルコトナク是レ我國ノ仕來ナリ
- 二、使、其事ハ予等兼テ承知スル所ナリ現今ノ條約ニ因リテハ千八百七十二年七月第一日ヲ以

テ條約ヲ改正スベキ筈ナリ故ニ我が政府此使節ヲ派出シ其條款ヲ熟議セシム然ルニ右期限前其使命ヲ完成スルコト能ハザルニ依リ使命ノ終ル迄期限ヲ延サンコトヲ望ム

- 三、卿、各國政府互ニ趣旨ヲ通達シ現今ノ條約ハ千八百七十二年七月第一日ニ至リ全ク廢止スベシトノコトヲ既ニ了解ス今度ノ使節ニハ右條約ヲ取結ブノ權ナシト見テ可然哉
- 三、使、條約中改正スベキ條件ヲ商議論スルノ權アリ余等只ニ之ヲ論ズルノミニテ今度ノ談判ニテ互ニ陳述スル所ヲ日本ニ於テ取結ベキ條約ノ基トナシ 天皇陛下自ラ允准セシ後其本書ヲ取替スル筈ナリ
- 四、卿、使節公ニハ草案書ニ調印スルノ權ヲ帶有セラル、乎
- 四、使、然リ談判ノ結末ヲ記載スベキ書面ニ名印スルノ權アリ
- 五、卿、貴國皇帝ヨリノ書翰中ニハ其權ヲ與フルコトナシ今貴君ノ陳述セララル、所ニ隨ヘバ別ニ其權ヲ與ヘラレシコトト見ユ
- 五、使、然リ
- 六、卿、此書翰ニテハ條約ノ條款ヲ取極ムルノ權ヲ與フルニ非ズ只ニ之ヲ論ズルノミナリ
- 六、使、今度談判ノ結末ヲ記セルモノニ名印スルコトハ差支ナシ
- 七、卿、日本政府ニテハ之ガタメノ何程ノ引受ヲナス乎

七、使、談判ノ結末ハ多分政府ニテ承諾スベシ此草案ハ追テ條約ノ基トナル者ナレバ多クハ我政府ニ於テモ許諾スベキ積ナリ

八、卿、條約改正ハ何頃ナル乎草案ノ効力限程及ビ何頃本書ヲ取替スル哉ヲ知ルコト最緊要ナリ如何トナレバ條約ノ如キハ皆上院議員ノ内三分ノ一ハ二年毎ニ變ズルナレバ新選ノ議員等入來ル時ハ又其所見モ大ニ異ナルコトアルベシ

八、使、其期限ヲ豫メ稔ト定ムルコトハ難シ此地ヨリ歐洲ニ赴キ各國政府ト談判ニ及ブ積ナレバ多分當年々末ニハ日本へ歸國スルコト出來スベシ歸國後ハ速ニ改正ニ取掛ルベシ

九、卿、草案ニ名ヲ記シタル上ハ政府ヲシテ其約ヲ履行セシムルコトニシテ則條約ナレバ既ニ改正ヲ爲スモ同様ナリ

九、使、余等ハ唯今度改ムベキ條約ノ條款ヲ論ゼンコトヲ望ム且我政府ノ允准ヲ經タル上ニ非レバ之ヲ極定セザルベシトノ約諾ナレバ談判ノ結末ヲ書載スル書面ニ調印スルコトヲ得ベシ

十、卿、此事爲シ難キニ非ズ蓋シ夫レニハ我方ニ於テモ聯邦議事上院及ビ大統領ノ允可ヲ經ザレバ得ズトノ約ナレバ差支ナシ然シ何頃其允准ヲ取り何頃改正ニ取掛ルトノ期限ヲ知ルコトヲ望ム

十、使、兩條ノ趣意ヲ諾ス若シ日本ノタメ公然タル約諾トナラザル時ハ日本帝國合衆國大統領議事上院之ヲ互ニ允可スル迄ハ又合衆國ノタメニモ之ヲ約定セザルベシ此約束ヲ以テスル時ハ双方ノ趣意ヲ合シ談話ノ結局ヲ書記シテ後日ノ備忘トナストモ余等ニ於テ差支ナシ

十一、又、可成ハ改正ノ期限ヲ千八百七十三年七月第一日迄延期センコトヲ望ム

十一、卿、外各國トノ條約モ同時ニ改正セラル、乎

十二、使、然リ

十二、卿、使節ノ帶有セラル、外各國へノ委任狀ハ矢張調印ノ權ヲ與へズ唯ニ論評スルトノ同

文同意ナル乎

十三、使、何レモ同様ナリ

十三、卿、他ノ國々トノ條約ハ皆一樣ナル乎貿易及ビ其他ノ事ニ關係スル諸條款ハ何レノ條約ニ於テモ同様ナル乎

十四、使、然リ凡テ外國ト取結ブ條約ハ皆同様ナリ

十四、卿、然ラバ一國ニ與フル特典ハ之ヲ他ノ國々へモ與フルノ趣意ナル乎

十五、使、然リ

十五、卿、條約改正延期ノ事ニ付既ニ他ノ國々ヨリ報ヲ得クル乎否

十六、使、其事ハ既ニ書通シタレドモ未ダ其回答ヲ得ズ

十六、卿、左スル時ハ合衆國ノ報答ニハ少シク求ムル所アリ我等ニ於テハ素ヨリ日本皇帝及ビ使節公ノ意ヲ樂シムルコトヲ望ムニヨリ他ノ政府ニテモ之ヲ承諾スルトキハ右改正ノ期ヲ一ケ年遅延スベシ其間ハ是迄ノ條約ヲ取行ヒ若シ其内新條約ヲ以テ他國ニ別段ノ便利ヲ與フルコトアラバ現今條約ノ箇條一ヲモ廢止セズシテ其便利ヲ以テ我國ニモ及サレンコトヲ企望ス

十七、使、然リ

十七、卿、此取極メヲ以テ使節公ニハ條約改正ノ談判ニ取掛リ何ノ件何ノ條彼ヲ改メ之ヲ加フト云フコトヲ述ベ給フ乎

十八、使、陳述スルコトハ數多アリト雖ドモ是レ皆細微ノコトニ涉レル者ナレバ今爰ニ其緊要ノ條件ヲ舉ゲン

十八、卿、但其概略ト總論ヲ聽キ後日其順序ヲ追テ其細目ヲ論ズベシ

十九、使、海關稅ヲ定ムルコトニハ自由ノ權ヲ得ルコト及ビ局外中立ノ事

十九、卿、第二ノ箇條ハ大ニ難アルベシ然シ貌利多泥亞トノ條約ノ如ク總體兩國間交際ノ事ヲ

記載スベシ

廿、使、外國コンシユル裁判ノ權ヲ廢シ日本司法省ニ歸セシムベキ事

廿、國務卿次官、此事ハ條約取極メノ日ヨリ直ニコンシユルノ權ヲ廢スルト云フ事ナルヤ

廿一、卿、ソレハ後日論定スベシ

廿一、使、通用貨幣ノ規則、罪ヲ犯シ他國ニ遁匿スルモノ兵隊上陸ヲ禁ズル事。兩國間ニ難事差起ル時ハ公然絶交ノ舉或ハ戰爭ニ及バザル前平和ニ事ヲ落着セシムル様取計フ事。是ハ緊要ノ事件ニシテ尙細事ニ至テハ他日又追々談判スベシ

廿二、卿、合衆國ヨリモ貿易ノ章程人民ノ保護及ビ其他ノ事ヲ願フ事アルベシ貴君今陳述セラ、處ニテハ現今條約中ノ總條款ニ涉ラズ此數ヶ條ヲ論ズル順序ハ如何セラ、哉

廿二、使、何レニモ都合ニ從ヒ之ヲ論ズベシ

又、委細書面ニ認ムル方可然哉貴君ノ所思ヲモ伺フ

廿三、卿、之ヲ次ノ談判ノ節熟考ノ上取極ムベシ

又、使節條約ヲ取極ムルノ權ナシト云フニ付難事アリ一ケ年遅延スル時ハ大統領選舉ノ期ニ至リ大統領並諸官員及ビ議事上院ノ三分一ヲ變ゼン故ニ其已前ニ取極ルニ非ザレバ終ニ取極メ難カルベシ先ヅ互ニ談論シテ双方旨趣ノ符合スル乎ヲ見ル方可然双方異存ナキ箇條ハ之ヲ書面ニ記載スベシ去迪必ズ調印セザルヲ得ズト云フニモアラズ是等ノ事ハ愈事ヲ論ズルノ際ニ臨ミ取定ムルヲ好シトス

又他日諸件都合ニ隨ヒ之ヲ論ズベシ此次ノ談判ニハ合衆國ノ改正セント願フ條件ヲ申通
セン夫レニハ我等一同商議セザルヲ得ズ且余モ今貴君ノ所望ヲ知ルヲ得タリ

廿三、使、條約改正ノ期限ニ付テハ今決定シテ申入ルル事能ハズナレドモ千八百七十三年三月
前迄ニ定ムル様尙思考シ一兩日間ニ貴君へ報知スベシ

廿四、卿、然ラバ猶水曜日第十二字面晤ニ及ブベシ

原文筆記 ブルークス

第二號

千八百七十二年第三月十三日 我明治第三壬申二月二日
水曜日

華盛頓府國務省ニ於テ國務卿ハミルトン、フィッシュ及ビ日本使節談判手續筆記當日出席
ノ面々

岩倉大使、木戸副使、伊藤副使、森少辨務使、鹽田一等書記官、隨行ブルークス、
國務卿ハミルトン、フィッシュ、同輔チャールズ、ヘール、譯官ライス

一、卿、使節に於て演述すべき事件ありや

一、使、曰有り先日約せし處の廉を談判いたし度候此前の談判の節に拙者持參致候國書に全權
委任の文面無之この御話有之候故其後我輩より森少辨務使を以て相談に及び候處早速同人に
要用と被思召候廉を御傳有之依て當方に於ては副使の内を歸國爲致

天皇陛下より要用分明の國書を願受候積に決定致し候

現時國書にて其權有之候義と存候得共尙不足之處有之候と勘考いたし候

勅旨の趣意は至て廣大にして國書に載せ有之候より遠く相及び居り候

二、又、夫故に使節に於ては 天皇に申奏して全權の分解を乞受候義肝要に候事と勘考致し
候

三、又、申立次第遅々なく全權を委任せられ候儀相違有之間敷候就ては右往返の間は其儘談判
致し居返事到着次第調印出來候様の結末を得置度候

二、卿、其儀に付難事無之と存候併使節に於て全權を御掌握被成候迄は唯談判いたし候のみ
にして約定にては無之候此前の會議に使節より談判可被度數ヶ條御示し有之候得どもま
た所存を述べ熟讀に及び居不申候間今日は拙者の所存にて條約改正の節に相改可然のケ
條を陳述致し可申候

四、使、承り度候

三、 卿、右ヶ條の内已に御用意の處も可有之候得ども先拙者より開口可致候

第一條 外國船を當時未開の港に入進せしむる事を許すべき事

第二條 燈明臺並港運上之事

第三條 條約規程の事就中長崎にては何處を以て内地と致居候哉不相分面倒出來居候事故に取廣め不申ては不相叶候

第四條 旅行切手の法を立て外國人を保護し而して内地を通行し日本人と貿易を營むべき權利あらしむるべき事

第五條 條約規定の内に於て外國人財産を賃貸し實產家屋田土を所持し且其處より一定の距離内に在りては之を他人に譲り渡すべき權利あるべき事

第六條 何の役目に拘らず日本人外國人の使役に供し且又條約規程并に開市の地に於て日本人外國人を相雇候儀勝手たるべき事

第七條 日本人より外國人との貿易交際の間直に又は直ならずとも制限を設け或は免狀或は格別の免許を立てざる事

○内地の運上を設け又は開港場に持出す所の物品に税を賦すまじき事
○從來開港場には番所を立て販賣する所の物品より税を取立て之が爲めにして代價滞騰

に及び候儀承知いたし居候

此ヶ條の趣意は普通の國税を被置申立候儀には無之唯其地方又は別段の税を貿易品のみ賦して不公平に陥る事を防ぎ候而已に候

第八條 何國より輸入し又は何國より輸出せるに拘らず凡て輸出入税は一樣公平なるべき事

但し密商は禁止すべし

第九條 地方規則の事

第十條 言語出板并信心の自由を與へ宗旨并禮拜の事を寛恕し之を苛責し侮辱せざる事
第十一條 他國の政府に與へたる貿易の利益又は殊典特例は之を合衆國の人民に同等に及ぼすべき事

四、 卿、右は御同様に於て熟考可致肝要のヶ條に候勿論御相談中には他のヶ條も相生じ可申候

五、 使、前日差出し置候ヶ條の簡明御入用と存候

五、 卿、近來御國と條約御取結に相成候義と承知いたし候

六、 使、然り御國へ差遣し候使節に於て假條約取結申候併日本よりの近報迄は未だ政府に於て

本條約允准には及び不申候

六、 卿、御用意出來居候は、前會御差出之條約に關係したるヶ條御辯明伺度候

七、 使、當方に於ては未だ準備整不申候に付條約調印後直にコンシユル裁判の權を廢し候義は所望に無之候

歐米の良法を基本として立法の條例を定め候義を布告致し其日より諸の案件を地方の裁判所に於て取扱其準備出來候上にてコンシユルの權を廢し申度候
當方に於て取扱ふべき手順を豫めヶ條中に書載いたし置度候

七、 卿、歐洲の各國に於けるが如く満足すべき地方の裁判所御設立の上は何時にてもコンシユルの裁判所を廢し候義我政府に於ては大慶致し候併之を開くに於ては全く其満足すべき設立に關係致し候故將來之を備る事不容易の義と存候

八、 使、新約の爲に陳述致し候ヶ條を談判し且貴下の御存慮伺度候

八、 卿、此儀に付て貴政府の所望充分に了解いたし兼候

九、 使、外國に戰爭有之節は日本政府に於て素より我國民をして局外中立を破らざしめざる手段は何程も有之候得共萬一日本在留の外國人に於て公然と鬭争の舉に及び管轄致し難き時は日本政府は其土地に於て外國人右様の所業に及び候爲め局外中立を破り候責に任じ候義は相

免れ度候

九、 卿、新約のヶ條中右様の處にては使節の御所存御書入可然哉と存候

十、 使、其外談判のヶ條御了解相成候哉

十、 卿、茲に所持いたし居候

第一、日本政府の都合に依りて海關稅を相定め候義勝手にるべき事

第二、局外中立の事

第三、貨幣の事

是等の御趣意承知致度候に付少々御簡明被下度候

十一、 使、御承知之通り造幣寮を設立して新貨デシマル法を通用いたし候に付左之ヶ條を立て候云々

日本政府は全國の造幣寮を立てデシマル通貨の普通の法并同徑の定量品位を用ひしに依り一切の租稅政府の收納等日本の圓貨を以て算用仕拂收納いたし此後は之を以て全國の貨幣となし一切の負債に於て之を以て本位と爲すべし
舊約に従へば我政府に於ては量目比較を以て外國の貨幣を引換可遣責に任じ居候得共今日にては造幣寮にて地金引換可申に付此ヶ條は不要用と成候當今に於ては貨幣引換の事は總

て爲換廳并相對の取引に任じ候積に候

十一、卿、左様に候得共通貨の義を全く日本の貨幣に限定被成候御趣意に可有之候此仕法にては自ら日本の貨幣騰貴して商人には非常高値の價に相當り不申哉且此仕法にては貴政府に於て日本の貨幣を貯藏し日本一圓金の相場を二弗と爲し候とも所詮致し方無之候到底道理上に於ては全國は之を以て本位となし且外國の貨幣も御承認無之ては不相叶義に候

十二、使、舊約に依る時は三百十一鎊を以てメキシコ百弗に引換居候得共前品四角の舊貨相廢し候手順に到り其名の貨幣無之候事故以後は他國同様に貨幣引換は造幣寮又は爲換廳にて相對に致し可申候

十二、卿、貴國壹圓量の本價并メキシコ洋銀と比較の價承知いたし度候

十三、使、我貨幣は其量四百十六ケレオンにて純銀九百分あり銀貨はメキシコ、ドルラルと同様にして金貨との比例は一ト十六、一七三なり但し本位以下は一ト十三、三分一に同じ

十三、卿、貴政府に於て當時貨幣に就て損失にても有之候哉無之候はゞ何故に變換の義御所望に相成候哉

十四、使、右は爲換廳の職務を以て政府を頼し候義最早無用の事と存候故に候なり殊に舊貨幣は一切無用に屬し候故此後には新貨の事而已記載いたし候

十四、卿、然らば新約中に日本の圓貨并メキシコ洋銀を一樣に御受取の旨御記載被成候哉

十五、使、左様と存候

十五、卿、新約に日本貨幣並にメキシコ洋銀を一樣に御請取可相成義御同意被成候哉

十六、使、左様に候

十六、卿、然らば面倒の義有之間敷勘考仕候此一條の決定は先づ是迄にいたし置可申候

十七、其次の條は互に脱走人引渡の事に候此一條は當政府と大抵諸國との條約に同様の文面有之候事故少々取捨いたし重罪に限り其通りにいたし可申候

十七、使、然り

十八、卿、日本に兵隊の上陸を禁止するの趣意は如何の譯に候哉

十八、使、先年來我國歩艱難に就て内亂を生じ之が爲めに外國人に多少の危害有之其時成立之政府にては之を保護する事能はざるより竟に外國より兵隊を送り越したり一體此義は他國に於て許さざる事に候得共以後は豫め免許狀を得ずしては之を爲能ざる様にいたし度候

十九、此一條は決して貴國從來の所業に就て申述候義は無之唯此後歐洲の諸國と取結ぶべき條約中に書載いたし度候

十九、卿、當方に於て彌差支有之哉は存じ不申候得ども只條約中に右様の文面有之時は何か嫌疑を受け候様に相見え候而已なり他國にて承知いたし候はゞ於當國は差支無之候此義は當國よりも先づ篤と他國と御談判可然候

廿、又結末のケ條に若し兩國の間に一方ならざる不和を生ずる時は兵力に依らざる前に平穩の簡解を爲すべしと有之是は當時文明諸國に行はるゝ所の法律に候故に今之を條約中に書載いたし候時は全く文明國中を目して野蠻となし候事を防ぎ候様に相見え申候然れ共之を加ふる義に就ては格段之御趣意有之候乎

廿、使、是も此後條約を改正すべき他國の事に關係いたし候當方に於て是迄日本之舊史に出來候事實の再生を防ぎ度積に候

廿一、卿、當方に於ては此一條には別段の御趣意無之候はゞ差支無之候

廿二、輔、之を防ぐ事は出來間敷候得共世界の耳目をして之を破りし事を顯然と知らしむる事は出來可申候

廿一、使、尙勘考可致候

廿三、卿、今日のケ條を御勘考被下度且此後の集會相願度候

廿二、使、談判の事件を總て勘考いたし置可申且又副使兩人當月廿日より當府出程桑方濟港へ

相越此處より第四月一日の郵船を以て日本に渡航致し候筈に付急速に談判を遂げ右副使當府出立前迄に可成は相應の結局を得て之を我が政府に充分に報告爲致度候

廿四、卿、來る土曜日一字半より一時半間談判いたし可申候間其節双方の存慮を明かにし箇條の辨明を致し可申候

條約を調候義は第三月二十日迄には間に合不申候

廿三、使、辱く存候來る土曜日乃第三月十六日十三字半に罷出可申候

筆記ブルークス

政體ニ關スル意見書

參議 大久保利通

世ノ政體ヲ議スル者輒ハチ曰ク、君主政治或ハ曰ク民主政治ト、民主未ダ以テ取ル可カラズ。君主モ未ダ以テ捨ツ可カラズ。然リ而シテ此政體ハ實ニ建國ノ楨幹爲政ノ本源至大至高ナル者ナリ。其體確立セザレバ則ハチ國何ニヲ以テ建タンヤ、政何ニヲ以テ爲サンヤ。夫レ民主ノ政ハ天下ヲ以テ一人ニ私セズ、廣ク國家ノ洪益ヲ計リ、沿ク人民ノ自由ヲ達シ、法政ノ旨ヲ失ハズ、首長ノ任ニ違ハズ、實ニ天理ノ本然ヲ完具スル者ニシテ、目今合衆瑞西蘭土其他南亞墨理駕地方ニ於テス。此政體ハ創立ノ國新陟ノ民ニ施行スベクシテ、舊習ニ馴致シ宿弊ニ固着スルノ國民ニ於テハ適用スベカラズ。瑞西蘭土ハ沃饒四塞天府ノ國ナリ、一國ノ向背以テ歐洲ノ全勢ヲ輕重ス、是ヲ以テ各國相軌シ相制シ敢テ之ヲ覬覦セズ。而シテ合衆國ハ建國未ダ百年ニ足ラズ、當初君主政治ノ壓制ニ苦シミ、民主ヲ以テ其國ヲ建ツ。其餘皆ナ創立ノ國新陟ノ民ノ故ヲ以テ斯ノ政體行ハル。然レドモ其弊黨ヲ樹テ類ヲ結ビ漸次土崩頽敗ノ患モ亦測ル可カラズ。往時佛蘭西ノ民主政治其兇暴殘虐ハ君主擅制ヨリ甚ダシト、名實相背クニ及ンデ

ハ亦此クノ如シ。是亦至良ノ政體ト謂フ可カラズ。若シ夫レ君主ノ政ハ蒙昧無智ノ民命令約束ヲ以テ之レヲ治ムベカラズ。是ニ於テカオカ力稍衆ニ擢ル者、其威力權勢ニ任カセ、其自由ヲ束縛シ、其通義ヲ壓制シ、以テ之ヲ駕御ス。此レ方サニ一時通用ノ至治ナリ。然レドモ上ニ明君アリ、下ニ良弼アル時ハ民其禍ヲ蒙ラズ、國其敗ヲ取ラズト雖ドモ、猶内外ノ政朝變暮化百事渙散ノ弊ヲ免カレズ。若シ一旦暴君汚吏其權力ヲ擅マ、ニスルノ日ニ當リテハ、生殺與奪唯意惟レ行フ。故ニ衆怒國怨君主一人ノ身ニ歸シ、動モスレバ廢立篡奪ノ變アリ。其法政概ムネ人爲ニ出テ天理ニ任カセズ、此レ人情時勢ニ於テ久シク持守ス可カラザルモノニシテ、即チ英國「コロンウエル」及ビ佛國千七百年代ノ革命其覆轍亦以テ徵スベシ。

抑政ノ體タル、君主民主ノ異ナルアリト雖ドモ、大凡土地風俗人情時勢ニ隨テ自然ニ之レヲ成立スル者ニシテ、敢テ今ヨリ之レヲ構成スベキモノニ非ラズ。亦敢テ古ニ據リテ之レヲ墨守スベキモノニ非ラズ。魯國ノ政體以テ英國ニ施コスベカラズシテ、英國ノ政體以テ亞國ニ用ユベカラズ。亞ヤ英ヤ魯ヤ其政體以テ我國ニ行フベカラズ。故ニ我國ノ土地風俗人情時勢ニ隨テ亦我が政體ヲ立テザルベカラザルナリ。

維新以來宇内ヲ總覽シ、沿ネク四海ニ通ジ、我國ヲシテ萬邦ニ卓越セシメントス。然レドモ其政ハ依然タル舊套ニ因襲シ、君主擅制ノ體ヲ存ス。此體ヤ今日宜シク之レヲ適用スベシ。而シ

テ土地ハ萬國通航ノ要衝ヲ占メ、風俗ハ進取競奔ノ氣態ヲ存シ、人情既ニ歐米ノ餘風ヲ慕ヒ、時勢半バ開化ノ地位ニ臨ム。將來以テ之レヲ固守スベカラザルナリ。然ラバ則ハチ政體以テ民主ニ歸ス可キカ、曰ク不可、辛未ノ秋廢藩ノ令下リ、天下漸ヤク郡縣ニ歸シ、政令一途ニ出ヅルト雖ドモ、人民久シク封建ノ壓制ニ慣レ、長ク偏僻ノ陋習以テ性ヲ成ス殆ンド千年、豈ニ風俗人情ノ以テ之レニ適用スルノ國ナランヤ。民主固トヨリ適用スベカラズ。君主モ亦タ固守スベカラズ。我國ノ土地風俗人情時勢ニ隨テ我ガ政體ヲ立ツル、宜シク定律國法以テ之レガ目的ヲ定ムベキナリ。英國ハ歐洲ノ一島國ナリ、幅員二萬五千方里人口三千二百萬餘「ノルマンチー、ウキルアム」入國以來僅カニ八百餘年ニシテ、國威ヲ海外ニ振ヒ、萬邦ヲ膝下ニ制シ、今日ノ隆盛ニ至ル者ハ蓋シ三千二百餘萬ノ民各己レノ權利ヲ達センガ爲メ、其國ノ自主ヲ謀リ、其君長モ亦人民ノ才力ヲ通暢セシムルノ良政アルヲ以テナリ。我日本帝國モ亦亞細亞洲ノ一島國幅員二萬三千方里人口三千一百餘萬、

天智帝中興以來千有餘年ニシテ、其英國ノ隆盛ニ至ラザル者ハ他ナシ、三千一百餘萬ノ民愛君憂國ノ志アル者萬分有一ニシテ、其政體ニ於テモ才力ヲ束縛シ權利ヲ抑制スルノ弊アルヲ以テナリ。其國家ヲ負擔スルノ人カト、其人カヲ愛養スルノ政體ニ從テ國家ノ以テ隆替スル所ロノモノ昭ニ此クノ如シ。抑我が

祖宗ノ國ヲ建ツル、豈ニ斯ノ民ヲ外ニシテ其政ヲ爲ンヤ。民ノ政ヲ奉ズル亦豈ニ斯君ヲ後ニシテ其國ヲ保タンヤ。故ニ定律國法ハ即ハチ君民共治ノ制ニシテ、上ミ君權ヲ定メ、下モ民權ヲ限リ、至公至正君民得テ私スベカラズ。夫レ人々相交ハル時ハ人々相競フ、君民相交ハル時ハ上下亦相競ヒ、相交ハルノ際ニ於テ是非曲直善惡邪正ノ分之レヲ裁決セザル可カラズ。其特權君ニ在ルヲ君主ト謂ヒ、民ニ在ルヲ民主ト謂フ。其君民共ニ之レヲ執ルヲ君民共治ト謂フ。此レ上下各其公權通義ヲ保全暢達センガ爲メ、君民共議以テ確乎不拔ノ國憲ヲ制定シ、萬機決ヲ之レニ取ル。之レヲ根源律法ト謂ヒ、又之レヲ政規ト謂フ。即チ所謂政體ニシテ全國無上ノ特權ナリ。此體一タビ確立スル時ハ則ハチ百官有司擅マ、ニ臆斷ヲ以テ事務ヲ處セズ、施行スル所ロ一轍ノ準據アリテ變化渙散ノ患ナク、民力政權並馳シテ開化虛行セズ、此レ建國ノ楨幹爲政ノ本源ニシテ、今日百般ノ務メニ從事スル着々々々ニ注意セズンバアル可カラザルナリ。然リト雖ドモ今日此議ヲ建ツル乃チ

天皇陛下ノ大權ヲ輕重スルヤ、曰ク否、夫レ天子ノ大權其ノ外貌益重モケレバ則ハチ其實權愈輕シ。何ントナレバ則ハチ將門均ヲ兼ルノ日、天子九重ノ内ニ在リテ威嚴堂々下民仰イデ以テ神トナス。而シテ天子尺寸ノ權ナシ。一旦親カラ萬機ヲ裁スルニ當リテ下民始メテ天日ヲ拜シ、至尊モ亦タ斯人タルヲ知ル。而シテ外貌ノ威半バ損ス人情時勢ノ日ニ開明ニ赴ク水ノ濕ニ就ク

ガ如ク、物理ノ自然人力ノ支フル所ロニ非ラズ。今ニシテ此レ之レヲ察セズ、其外貌ノ大權ヲ強持セント欲セバ、則ハチ天子坐ナガラ空器ヲ擁シテ昔時將門秉均ノ日ニ異ナラザルノミナラズ、天位モ亦將サニ危カラントス。是ヲ以テ上ミ君權ヲ定メ、下モ民權ヲ限ルモノハ蓋シ國家愛憂ノ至情ニ出デ、人君ヲシテ萬世不朽ノ天位ニ安ンゼシメ、生民ヲシテ自然固有ノ天爵ヲ保モタシムル所以ンナリ。

然ラバ則ハチ今日ノ要務先ヅ我ガ國體ヲ議スルヨリ大且ツ急ナルハナシ。苟シクモ之レヲ議スルニ序アリ。妄リニ歐洲各國君民共治ノ制ニ擬ス可カラズ、我ガ國自カラ皇統一系ノ法典アリ、亦タ人民開明ノ程度アリ、宜シク其得失利弊ヲ審按酌慮シテ似テ法憲典章ヲ立定スベシ。

治國ノ道タル其政府ノ體裁ニ於テハ各其國古來ノ風習人情ニ從ヒ、或ハ立君獨裁或ハ君民共治或ハ共和政治等ノ異ナルアリト雖、國中百端ノ事務ヲ議定施行スルニ至テハ必ズ獨立不羈ノ權ヲ有スル處有テ以テ斷然之ヲ行フニ非レバ、衆論百出異說紛々終ニ定基ナク、人々一己ノ私論ヲ主張シ、着手方向ヲ誤リ、施行順次ヲ失ヒ、進マント欲シテ退キ、急ナラント欲シテ緩ナルノ弊ヲ生ジ、國政不振基礎不立ノ憂ヲ致ス。然而所謂三種ノ政體中立君獨裁トハ則國ニ從來ノ定法ナク、只國君ノ意以テ之レガ國法ト爲リ、其君權無限ナキ者ヲ云君民共治トハ從來ノ定規ニ從ヒ、君民ノ間各其權限ヲ定メ以テ法ヲ立ツ、君主之レニ因テ自ラ國政ヲ理ムルモノヲ云共

國政ヲ人民共治ト云ヘシニ至ツテハ人民相共ニカラ盡シ、以テ法憲ヲ定メ、定ムル所ノ法憲ニ從テ國政ヲ理ムルノ人ヲ撰ビ、之レヲシテ國務ヲ奉行セシムル是レ也。雖然各其不羈獨立ノ權勢ヲ有スル所在テ百端ノ國政ヲ裁決施行スルノ意ニ至テハ則チ一ナリ。故ニ立君獨裁ノ國ハ君意ヲ以テ確然不可犯者トシ、君民共治人民共治ノ國ニ於テハ定憲定法ヲ以テ確乎不拔ノ者トス。今我政體ヲ察スルニ自ラ此三者ヲ斟酌折衷スルモノニシテ、能ク國風ニ應ジ時勢ニ適スルニ似タリト雖モ、然レドモ實際ニ臨デ尙ホ適切ニシテ以テ弊ナシトセザル者アリ。其故何ゾヤ、命令ノ出ル處實權ナク、又隨テ一ナラザルニ因ルナリ。之ヲ人身ニ喩フルニ手足動モスレバ恣ニ其好ム所ヲ行ヒ、其欲スル所ニ趨ルガ如ク、既ニ其主宰ヲ失テ氣脈相通ゼズ首尾相應ゼザルガ如シ。故ニ今深ク此ニ注意シ篤ク執勢ヲ量ツテ窃ニ左ノ擬議ヲ建ツ。

太政官職制

太政官中三院一寮ヲ置ク可シ

正 院

左 院

右 院

政體ニ關スル意見書

式部寮

此三院一寮以テ太政官ト名付クベシ

正院

天皇陛下親臨

太政大臣

天皇陛下ヲ輔弼シ萬機ヲ統理シ諸上書ヲ奏聞シテ制可ノ裁印ヲ鈴シ且勅書ニ署名鈴印スルヲ以テ任トス。右院ニ在テハ之ガ長タルベシ

左右大臣

職掌太政大臣ニ亞グ太政大臣缺席ノ時ハ其事務ヲ代理スルヲ得其右院ニ在ルヤ參議ト共ニ全國百般ノ事務ヲ裁決施行スルヲ掌ドル

大内史

其他 略ス

左院

左右大臣或ハ參議ノ中チヨリ之レガ議長トナルベシ
一等二等云々ハ諸立法ノ議事ヲ掌ドル

右院

太政大臣之レガ長タルベシ

左右大臣

參議

全國百般ノ機務ヲ商議判決スルヲ掌ドル

式部寮云々

正院ハ 天皇陛下臨御シテ萬機ヲ總判シ、太政大臣左右大臣之ヲ輔弼シテ庶政ヲ獎督スル所口ナリ。

凡全國一般ニ布告スル制度條例及 勅旨特例ノ事件ハ太政大臣ノ名ヲ以テ正院ヨリ之ヲ發令スベシ

諸省使寮司局ヲ廢立分合スル先ヅ右院ノ商議ヲ經テ上奏シ允裁アレバ則チ太政大臣ノ名ヲ以テ令スル正院ヨリスベシ。

凡勅任官ノ進退ハ 宸斷ニ出ヅルト雖ドモ、必ズ先ヅ右院ノ商議ヲ經テ上達シ、太政大臣之ヲ奏上シ、允裁ヲ得テ后チ進退スベシ。凡ソ奏任官ノ進退ハ其所轄長官ノ奏聞ニ因ルト雖ドモ、

必ズ右院ニ於テ商議ノ上太政大臣之ヲ處置ス。本院中判任官ノ進退ハ其所轄ノ具狀ヲ得内史ヲシテ之レヲ處置セシムベシ。

凡ソ訟獄ニ付其事情ニ差誤ヲ生ジ裁制上過マツテ斷決スルモノアリトスル時ハ、司法官其情曲ヲ具狀シ、右院ノ商議ヲ經テ太政大臣之ヲ上奏シ、允裁ヲ得テ其罪科ヲ宥ムルコトアルベシ。凡ソ一般ノ奏事ハ必ズ先ヅ右院ノ商議ヲ盡シ、判決シテ後チ主任ノ者ヨリ之レヲ正院ニ出ダスベシ。然シテ太政大臣之ヲ奏上シ、制可ヲ得ハ乃チ主任ニ付シテ施行セシムベシ。

議政行政ニ關スル諸文書法案及勅書令條差除黜陟ノ記録等ハ内史ニ付シテ司掌セシムベシ。恒例ノ公文既發ノ命令通常ノ達書等ハ外史ニ付シテ司掌セシムベシ。

凡ソ右院ノ議判ヲ經主任ヨリ允裁ヲ乞フ處ノ奏書ハ、内史其部類ヲ分カチ、之レヲ本帖及副本ニ寫シ、本帖ニハ右院議判者ノ名ヲ記シ、内史又々之レニ記名シ、之ヲ太政大臣ニ出スベシ。太政大臣之レニ鈴印シテ御批允裁ヲ受ケ之レヲ主任ニ歸シテ奉行セシムベシ。内外史所屬ノ各局課式部寮等ノ事務ハ各其主任ヲシテ管理セシム。

左院

左院ハ諸立法ノ事ヲ議スル所ナリ。

新ニ制度條例ヲ創立シ、或ハ從來ノ成規則ヲ増損改革シ、及例規ナキ事件ヲ新ニ考定スル等、惣テ局中ノ衆論ヲ盡シ、自カラ建議シ、或ハ右院ノ下議ニ依テ草案ヲ起シ、之ヲ議定シ、鈴印ノ上之ヲ議長ニ呈シテ右院ニ出スベシ。

左院ハ立法ノ主務ニ付充分擬議スルノ權アリト雖ドモ、裁決ノ權ハ固ヨリ有スル能ハズ。然レドモ諸立法ノ事件ハ必ズ本院ノ議論ヲ經、本院ノ鈴印有ル者ニ非ザレバ直チニ右院ニ於テ議判シ、太政大臣ニ呈シ、假令之レガ允裁ヲ受ルト雖ドモ、決シテ奉行スルコト能ハザル者トス。議員ハ平常ト格外トノ兩員アルベシ、平常ノ員ハ常ニ此局ニ奉事スル者ヲ云ヒ、格外ノ員ハ諸省輔丞ノ内ヨリ撰擇シ、其省ノ任務ニ關スル事件ニ付法案ヲ起スコト有ルトキハ常ニ出仕參與スベシ。

明法寮ヲ以テ此内ニ付スベシ。

右院

右院ハ天皇陛下太政大臣左右大臣參議及諸省ノ卿ニシテ參議タル者ニ特任シテ諸法案及事務ノ當否ヲ商議シ、定論ヲ立テシメ、太政大臣ヨリ之レヲ奏上セシムル所ナリ。若シ最重大ナル事件ヲ商議スルニ當テハ時機ニ依テ

天皇陛下親臨スルコトアルベシ。

諸奏事及諸般ノ布令等皆ナ已ニ右院ノ判決ヲ經ルニ非ザレバ太政大臣ト雖モ決シテ直チニ奏上
允裁ヲ受ケ奉行スルコト能ハズ。

凡ソ諸般ノ事務ニ於テ列坐相共ニ商議判決シ、鈴印シテ同意ヲ表スル上ハ、其事務ノ主任誰レ
タルヲ論ゼズ、連印ノ員ハ皆ナ均シク其責ニ任ズベシ。

右院中二三ノ書記官ヲ置キ日々當直ノ參議若シ左右大臣ノ兩人在ル時ハ右大臣ヲシテ常ニ院中ノ長タラシムル
院ノコトヲ任シテ可ナランカ然ル時
モ可ナランカ又然ラズシテ參議ノ他省ニ兼務ナキモノ在ラ、其人右
ハ別ニ當番ヲ立ツルニ及バザル可シヨリ其當日ノ議事及ビ議判ノ大意ヲ書記ニ下付シ之レヲシテ簡明
ニ簿記セシメ置クベシ。

立法行政司法ノ三件ハ各一種ノ事務ニシテ、自ラ區別アリ。其所任ニ至リテモ亦區別ナキコト
能ハズ。若シ之レヲ一手ニ司リ、法ヲ立テ政ヲ行ヒ、司法ノ權ヲ有スル時ハ其事務大ニ煩亂シ
テ之レヲ反覆討論深思熟慮スルコト能ハズ。良法ヲ立テ克ク之レヲ處分シ、又諸件ノ定法ニ合
スルヤ否ヤヲ決スルニ暇ナク、自然處事倉卒ニ出テ百弊並ビ生ズルヲ免レズ。加之此三大權ヲ
一處ニ任ズル時ハ、或ハ其威權ヲ逞フシ、私意ニ任セテ法制ヲ妄立シテ其權理ヲ意トセズ、恣
マ、ニ衆人ヲ奴視シテ敢テ其疾苦ヲ顧ミズ、全國ノ利害ニ關セズシテ特ニ己ノ情欲ヲ專ラニ

セシコト有ラントス。於是乎歐洲各國多年ノ實驗ヲ經テ久シク政學ニ力ヲ盡セシ所ノ國ニ於テ
ハ此三大權ヲ區別シテ各其職掌ヲ制限シ、法規ヲ立テ、以テ各自ノ權限ヲ定メ、互ニ相守リ毫
モ干犯セシムルコトナキヲ要ス。是レ其政務ノ本原ニ基キ其機軸ヲ定立セル者ニシテ、蓋政體
上ニ於テ其法ヲ得タリト謂フ可シ。是故ニ我國現今ノ形情ヲ見將來ノ事勢ヲ察スルニ、早ク此
體裁ニ注目シテ政憲ヲ定ムルニ非ザレバ、果シテ政體ノ善美ヲ得タリト云フベカラズ。雖然今
此體裁ニ倣ヒ治國ノ三大權ヲ區分シ、互ニ相干犯スベカラズトスルモ、未ダ實際ニ於テ果シテ
行ハル、ヤ否ヤニ至リテハ實ニ豫メ言フベカラズ。故ニ目度ヲ茲ニ期シ將來ヲ慮ツテ左ノ擬議
ヲ建ツ。

議政

議院ハ之レヲ掌ドル一切議事ノ綱領ニ掲グル所ノ者ヲ議スルニ止マリ直チニ之ヲ施行スル
ヲ得ズ。

國權ニ基キ議則ニ據リ重大ノ事件ヲ議シ議決スルモノヲ太政大臣ニ付シ奏聞シテ親裁ヲ乞フ
モノトス。

行政

各省使府縣之レヲ掌ドリ直チニ一般ニ施行ス。
 特權ヲ以テ太政大臣ノ奏スル所ヲ親裁シ直チニ之レヲ施行ス。
 國憲ニ基キ議院ノ議ヲ經テ已ニ制可スルモノヲ施行ス。

天皇陛下ノ權

- 一、國政ヲ執行スルニ無上ノ特權ヲ有ス。
- 一、皇統ヲ禪ル。
- 一、親ヲ勅任官ヲ黜陟ス。
- 一、全權公使ヲ派出ス。
- 一、特典機密ノ使ヲ海外ニ派遣ス。
- 一、議員ヲ聚散ス。
- 一、議院ノ議全國ニ障碍アルトキハ其議ヲ廢ス。
- 一、法律ノ撰定ヲ議院ニ下ス。

- 一、師ヲ興シ師ヲ罷ム。
- 一、政事上ノ過失ニ關セズ。
- 一、一般法律ノ羈束ヲ受ケズ。
- 一、訴訟ノ被告トナラズト雖ドモ裁判官ニ特命シテ之レヲ聽カシムルコト有ルベシ。
- 一、謀叛ノ不軌ノ徒ヲ除クノ外裁判擬決ノ後特典ヲ以テ死罪ヲ宥ダム。
- 一、賞罰。
- 一、爵位ヲ與奪ス。
- 一、新タニ華族ヲ置ク。
- 一、諸族ノ名稱ヲ與奪ス。
- 一、海陸軍及ビ城砦軍艦兵器ノ類ハ一切之レヲ管ス。
但シ卿兵ヲ親營ス。
- 一、尺度量衡ヲ定ム。
- 一、皇族ヲ管理ス。
- 一、我臣民ノ派出ヲ禁ジ外國在留ノ我臣民ヲ召シ又タ我臣民ヲ海外ニ放逐ス。
- 一、外國人民ヲ我生民ト同視シ之レヲ使用ス。

一、外國人民ニ免狀ヲ與フ。

議政院

華族及ビ特命選舉ノ議員並ニ行政諸省ノ卿ヲ集會シ國憲ニ基イテ重大ノ事務ヲ議セシムル所ナリ。

職制

長官

一ノ議員ヲ議員中ヨリ投名ヲ以テ選舉シ院中ノ事務ヲ調理ス。
國憲ニ基テ議事ヲ整齊シ議員ヲシテ議則ヲ確守セシメ行政ノ事務ニ關涉スルナシ。

議員ヲ選舉スル概規

一、華族ノ戸主二十一歳以上ノ者議員ヲ選舉スルヲ得ル。
一、議政院議員ハ華族選舉スル所ロノ華族議員二十名其他 天皇陛下ノ特命ヲ以テ選舉スル所

ロノ議員ハ定限ナシ及ビ行政諸省ノ卿ヲ以テ議員トス此レ亦陛下ノ特權ナリ。

一、華族選舉ノ議員ハ罪アルニ非ラザレバ 陛下ノ特權ト雖モ其職ヲ免ゼズ。

一、初メ滿二ケ年ニ至レバ華族選舉スル議員並ニ特命選舉ノ議員其半數更ニ新選ヲ以テ之レヲ變ヘ置ク残り半數ハ滿三ケ年ノ後又タ之レヲ變ヘ置ク。

一、特命ヲ以テ選舉スル議員華族ノ外奉職中ハ官給ヲ賜フ。

議事ノ綱領

一、藏入ノ額ヲ議定スル事。

但概算ハ大藏省ニ於テ擔當調査シ其法案ヲ正院ニ於テ通議審定シ然ル後議政院ニ出スベシ。

一、既定ノ稅額ヲ増減變更スル事。

但非常ノ天災及ビ不得已ノ事故等ニテ一歳ノ收入豫算ノ額ニ滿タザル時ハ更ニ之レヲ償フ方法ヲ議定スル事。

一、新タニ諸租稅ヲ賦スル規則ヲ議定スル事。

一、諸法律ノ草案正院ニ成ル者ヲ議定スル事。

- 一、諸會社一般ノ條例定規ヲ議定スル事。
- 一、貨幣鑄造ノ方法及ビ其品量ヲ議定スル事。
- 一、金券ノ發行償却ノ方法及ビ其規則ヲ議定スル事。
- 一、内外ノ國債ヲ募リ及ビ之レヲ償却スルノ方法ヲ議定スル事。
- 一、兵員ヲ増減スル事

但非常ノ事アルニ臨ンデハ

陛下ノ特權タル事

一、帝王ノ許可ナクシテハ本院ノ議定ハ一般ノ法トセザル事。

但一旦議決スル者上奏シテ不可ノ令アル者ハ本年ノ會集ニ於テ再ビ之レヲ議スベカラザル事。

一、本院ニ於テ議スベキ事件ヲ本院ニ出サズシテ大臣直ニ陛下ニ奏聞シ一般ニ公布スルトキハ之レヲ拒ムノ權アルベシ。

雜纂 壹 終

秘書類纂 壹

人名索引

(一)

- 伊藤 博文 三五、三六、四四、九、一〇五、一〇六、一三六、一四〇、一四五、一六一、一六二、一六四、一六五、二〇〇、三三八、三三〇、三三六、三三七、三三三、三四五、
- 伊東巳代治 四四、四九、一四四、一四五、
- 岩橋 萬造 三五、三三、
- 伊知地貞馨 三三、三四、三六、三九、五一、五七、五九、三〇、三九、三九、三九、三三、
- 池城 親方 三九、四一、四二、四六、四七、四七、四八、四九、五〇、五七、五八、五九、二九、
- 伊是親雲上 三三、
- 池村親雲上 三三、

索引

- 伊波 王子 三四、
- 伊江 王子 三〇、三二、
- 井上 馨 三〇、

(八)

- 蜂須賀茂韶 四、
- 長谷川 喬 二五、
- 林 友 幸 三三、三六、三〇、三三、三三、
- 坡名城里之子 二四、
- 鉢嶺筑登之 二四、
- 花房 義質 三九、三九、
- ハミルトン 三九、四五、

(六)

- 細川潤次郎 四、
- 穂積 八束 二〇、二六、
- 穂積 陳重 二〇、
- 堀江 弘貞 三四、三六、
- 堀江 王子 四、

(八)

ペーター・ゼ・グレート 一九八、
ヘー ル 三九、四六、

(ト)

道家 齊 二〇三、二〇六、
富井 政章 二〇五、
富谷銚太郎 二〇五、
時任 義富 三九、
桃原親雲上 二四、
渡具知里之子 二四、
徳大寺實則 四八、四九、五〇、

(チ)

茅原 王 三、
知念 三三、

(リ)

リンコルン 一九九、
李鴻章 三〇三、三七、三九、三五、

(ヲ)

河原田盛美 二〇一、二五、三〇〇、
川平 親方 二九〇、

(エ)

横田 國臣 二〇三、二五、二〇六、
與那原親方 二九、三三、三三、三四、三七、
三六、三九、三三、四〇、四一、四四、
二七、四八、四九、五〇、五七、五八、
二九

(タ)

橘 宿禰 三〇、
田中不二磨 四、二〇、
田中 光顯 一〇一、
高木 豊三 二〇五、
田部 芳 二〇五、
多嘉良親雲上 二四、
竹内 綱 二七、
竹添進一郎 三〇三、三八、三九、三〇、
田邊 太一 三四、

岡 成 三〇、
奥田 義人 一四、二〇、

オーガスタス 一九、

岡野敬次郎 二〇五、

太田峯三郎 二〇六、

大久保利通 三八、三九、三〇、三三、三五、
一四、二四、四四、四六、四八、四九、五〇、
二五、六〇、六三、六六、七六、九六、三五、

大野 省内 三三、

(ワ)

渡邊 千秋 一七、一七五、一八、

(カ)

葛城 王 三〇、

桓武 天皇 三〇、

金子堅太郎 四、

梶取 素彦 二四、二八、
二〇四、二〇六、

龜井英三郎 二〇四、二〇六、
河村讓三郎 二〇四、二〇五、二〇六、

(レ)

黎 庶 昌 三〇一、

(ソ)

曾禰 荒助 一〇一、

添田 壽一 二〇三、二〇六、

副島 種臣 二九〇、

崇 厚 三四、

曾 紀 澤 三四、

(ツ)

塚原 周造 三五、
津波古親方 三八、二四〇、二四一、二四二、二四三、

(ナ)

ナポレオン 一九八、

仲村 染 二四、

(ラ)

ライ ス 三四五、

(ウ)

ヴィクトル、エムマヌエル 一九、
ウイリヤム一世 一九
梅謙次郎 二〇三、二〇五、二〇六、
浦添親方 二〇〇、二六九、二九三、

(ノ)

野村 靖 二七、二九、
野村親雲上 三七、三八、二四、
ノルマンデー、ウイリヤム 三七、

(ク)

九鬼隆一 四、
グスターブ、アドルフス 一九、
久米金彌 二〇三、二〇六、
倉富勇三郎 二〇五、
久志親雲上 二二七、
久場筑登之 二四三、
グラ 三〇五、三〇六、三一一、三一一、

福崎 秀連 三九
ブルークス 三九、四四、三四、
フイシユ 三九、三四、

(コ)

光仁 天皇 三〇、
小村壽太郎 二〇三、二〇六、
小管直達 三九、
幸地親雲上 三三、三四、四一、二四、二四、
二四、二八、二九、三一、三七、三九、二九四、

小灣筑登之 二四、
吳啓太 三〇三、
向徳宏 三九、
コロンウエル 三六、

(セ)

榎本武揚 二八、三〇、三五、
寺原長輝 二〇三、
寺尾亨 二四、二五、二六、

索引

(ヤ)

柳田謙太郎 二〇三、
山内驛遞權頭 三六、
山里親雲上 二四、
尾部筑登之 二四、
安村子 二四、

(マ)

マルシヤル 九、
松本莊一郎 二〇三、
前島密 二五、二六、二七、三三、三三、
眞榮城親雲上 二四、
前川親雲上 二四、
松川子 二四、

(フ)

ブロンドフ 九、
フランドル 九、
富美宮 二七、

(ア)

鄭永寧 二七、
天智天皇 三七、
有賀長雄 一四、
アンベルト一世 一九、
アルフレッド 一九、
有松英義 二〇、
新城里之子 二四、
新垣 二四、

(サ)

鮫島 九、
佐藤秀顯 二〇三、
三條實美 二八、二九、三〇、三六、二四、
二五、二六、二六、二七、二六、三〇、
櫻井純造 二八、二九、
西郷從道 三六、

(キ)

宜野灣親方 二四、二六、二九、

五

戰時禁制品處分問題

索引

引

三五、三六、

六

シユッフエルト

三八、

鹽田三郎

三九、

(ヒ)

土方久元

一〇、三〇、

平田東助

二〇、二六、

平野長憲

二五、

ビンハム

三五、三六、

(モ)

諸勝

三〇、

森田昌純

二八、

森山茂

二九、

森有禮

三九、四六、

(ス)

末松謙澄

四、

金城親雲上

二二、

城間

二二、

玉城

二二、

恭親王

二二、

木戸孝允

二二、

(メ)

目賀田種太郎

二二、

(ミ)

三崎龜之助

二二、

(シ)

聖武天皇

三〇、

淳仁天皇

三、

尙泰

二六、二五、二四、二六、二七、

祝嶺親雲上

二二、

島袋

二四、

新里

二四、

朱端然

三〇、三九、

穴戸巖

三〇、三〇七、三〇八、三一三、三二四、

秘類
纂書

戰時禁制品處分問題

目次

外務大臣ヨリ處分方法取調ノ稟議	一
獨逸船バアヤルヌ號積載清國軍用品差止ノ義	三
筑波艦ノ拿捕シタル英國倫動印度支那汽船會社 益生號搭載貨物ノ内捕獲檢定ノ件	五
英國汽船ゲーリック號差押ノ件	二四
高陞號沈沒ノ件	二五
捕物裁判法案	四八
艦隊司令官ヘノ命令	五四
局外中立ニ關スル意見	五九
捕獲規程	六三
捕獲規程中改正ノ件	八一

海上ノ權力ニ關スル要素……………八三

戰時ニ於ケル禁制物品及禁制運漕……………九五

戰時禁制品……………一〇一

戰時禁制品ノ布告及品目ノ件……………一二八

拿捕裁判令草案……………一二七

拿獲裁判令……………一三一

清水市太郎書簡……………一三八

朝鮮ハ日本ノ同盟國ナリ……………一四〇

戰時禁制品ヲ布告スル事及其品目ニ就テ……………一四七

糧食ハ戰時禁制品ナルヤ否ヤ……………一五一

中立船敵ノ兵隊及信書ヲ運送スルコトニ就テ……………一五五

目下石炭ノ輸出ヲ禁止スル理由及方法……………一五八

東學黨鎮定ノ爲メ朝鮮政府ヘ援兵ヲ送ルニ付國際法上ノ攻究……………一六三

敵ノ軍艦ニアル中立國人……………一七〇

敵地ニ於ケル課金及徵發……………一七六

沈沒船高陞號内ニアル貨幣拾ヒ上ゲニ就テ……………一八五

再ビ高陞號内ニアル貨幣拾ヒ上ゲニ就テ……………一八九

我軍艦浪速英國運送船ヲ「シヨバイオノル」近海ニ沈沒セシメタルハ國際法上不當ナルヤ否ヤ……………一九一

千八百八十五年清佛戰爭ニ於ケル米運封鎖……………一九七

石炭ハ禁制品カ……………二〇二

清國ト通商禁止令發布ノ件……………二〇四

商船捕獲戰……………二一一

ストエルク氏國際條約論……………二二〇

祕書類纂

戰時禁制品處分問題

外務大臣ヨリ處分方法取調ノ稟議

明治二十七年八月四日付ヲ以テ外務大臣陸奥宗光ヨリ内閣總理大臣伊藤博文ニ對シ戰時禁制品處分ノ件ニ關シ別紙譯文之意味ヲ以テ英國臨時代理公使ヨリ問合アリタレドモ本件ニ就テハ此際政府ノ方針ヲ一定スルコト緊要ナリト信ズルヲ以テ速ニ相當ノ官衙ヲシテ右處分方法ヲ取調ベシメタル上閣議決定セラレタキ旨稟議アリタリ。

猶英國臨時代理公使問合ニ對シ回答ノ都合モアレバ本文處分方法ノ儀至急取調相成ル様御取計ヲ乞フ旨附言ス

外務大臣ヨリ處分方法取調ノ稟議

千八百九十四年八月二日付ヲ以テ東京駐在英國公使代理ラルフ・エス・ペジエツト氏
問合セノ大要ハ「在橫濱英人某商會ヨリ日本政府ニ於テハ穀類及貨幣ヲ戰時禁制品トセ
ラル、ヤ且ツ此等ノ物品ハ何等ノ船舶ニアルモ捕獲セラルベキヤノ儀窺書差出來リタル
ニ付右ニ關シ何分ノ貴意御報道ヲ乞フ」云々

獨逸船バアヤルヌ號積載清國軍用品 差止ノ義

獨逸船「バアヤルヌ」號積載ノ清國軍用品輸送差止方ノ義ニ付別紙ノ通り西郷海軍大臣
ヘ致通知候間御參考ノ爲メ右寫茲ニ及御送付候 敬具

明治二十七年十月十九日

外務大臣子爵 陸 奥 宗 光

內閣總理大臣伯爵 伊 藤 博 文 殿

(寫)

在新嘉坡帝國領事ヨリ十八日午後五時三十分發ノ電報ヲ以テ左ノ通り申越シタリ。

獨逸船「バアヤルヌ」號ハ上海送リノ武器二百九箱及硝石二十桶ヲ積載シ、本月十八日朝新
嘉坡ヘ來着ニ付、本官ハ右品ヲ本港ヘ陸揚ゲセシムルコトニ盡力シタリ。然ルニ同船々長ハ之

獨逸船バアヤルヌ號積載清國軍用品差止ノ義

ヲ香港マデ輸送スルコトヲ許可セラレタシト申出、又本港駐在獨逸國領事モ之ヲ香港へ留置スベキコトヲ保證セリ。特ニ右硝石ハ船底ニ積込アルヲ以テ、陸揚ゲヲ爲スノ大困難アルガ故ニ、輸送スルコトヲ許可セラレタシト申出タリ。右ハ如何取計ヒテ然ルベキ哉

依テ本大臣ハ今朝左ノ通り電訓セリ。

若シ出來得ルナレバ「バアヤルヌ」號積載ノ武器ハ總テ新嘉坡へ陸揚ゲセシムベシ。硝石ニ關シテハ獨逸領事ノ保證ヲ容レ之ヲ清國へ輸送セズシテ香港へ留置セシムルコト差支ナシ。

本件ニ就テハ不取敢右様取計ヒ置キタレドモ、實力ヲ以テスルニアラズシテ、此戰時禁制品ノ輸送ヲ差止メ可得哉否ハ固ヨリ茲ニ難豫言所ナリ。

明治二十七年十月十九日

外務大臣子爵 陸 奥 宗 光

海軍大臣伯爵 西 郷 從 道 殿

筑波艦ノ拿捕シタル英國倫動印度支那汽船會社益生號搭載貨物ノ内捕獲檢定ノ件

曩ニ軍艦筑波ノ拿捕シタル英國倫動ナル印度支那航海汽船會社汽船益生號搭載貨物ノ内、戰時禁制品ニ對シ定規ノ公告滿了ニ付、本日捕獲檢定ヲ爲シ、檢察官ニ於テハ素ヨリ同意ヲ表シ居リ、又訴願人トテハアラザルニ依リ、抗議ノ生ズベキ筈ナキヲ以テ、乃チ直チニ確定ト看做シ、其執行モ既ニ相濟ミタリ、捕獲審檢所ハ最早何時閉廳ノ儀ヲ發令セラシ、モ差支ナキ如シ。夫ニ就キ一應開申致シ置度仔細ハ、抑モ當所職員ノ儀本邦古來未曾有ノ責務ニ服事シ、益生號拿捕事件發生スルヤ、事體苟モ外交ニ關スルヲ以テ、始終一方心志ヲ勞シ拮据罷勉審理ヲ慎重ニシ、且可成的迅速ノ處斷ヲ要スル爲メ、夜白ノ別ナク執掌從務、乃チ結局ニ及ビタルノ次第ナリ。然レドモ該職員ハ素ヨリ報酬等ヲ仰グベキ性質ノモノニアラズ。畢竟各自名譽ノ本分ヲ盡シタルニ外ナラザレバ、強テ稟請スルヲ得ズ